
蜂蜜入りホットミルクとブラックティー

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜂蜜入りホットミルクとブラックティー

【Nコード】

N6018T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

クリスマスの晩、表の世界から闇の世界に足を踏み入れてしまった。

裏と表・白と黒。ほんの数ヶ月の物語でも、人生なんてそんなものだ……

蜂蜜入りホットミルク

目覚まし代りのラジオから杏里のスノーフレイクの街角が流れていた。

今朝と言いかもつ昼過ぎなのだが街中がやけに静かだった。

昨日から降り続いた雪が珍しく都会でも積もっているのだろうか。

「はあ〜」

溜息を付きベッドから出ようとすると背後で何かがモゾモゾと動いている。

栗毛色と言いか不思議な色のウエーブがあるロングコートの小動物が。

仔猫の様に体を丸めている……

それは昨夜の出来事だった。

年末前の一大イベントで世間が浮かれ騒いでいる2日間をほぼ完徹で過ごし自宅であるマンションに帰る途中。

「寒！ 何がホワイトクリスマスだ？ 神も仏も無いな。まったくもって無情だな」

親父の仕事を手伝わされやつの事で開放され。

店を出ると昼過ぎから降っていた雨が雪に変わっていた。

幸せに満ち溢れるカップル達の行き交う街を疲労困憊しながら彷徨うかのごとく歩いている。

こんな日に独りで夕食をする気にもなれず。

と言って帰ってから作る気力も無く、コンビニで温かい物を適当に見繕って帰る事にした。

自宅であるマンションに向かう為に大通りから外れると普段でも人通りが少なく、緩やかな上り坂になっている通りには足跡一つ無く雪が薄っすらと積もっていた。

道の先にある街灯の下には年末の粗大ゴミが出されている。

足早に通り返けようとする小さくしゃみが聞こえた気がした。

「何だ？ 捨て猫か？」

見ると粗大ゴミの脇にある段ボール箱の中で何かが動いた様だった。普段なら無視していただろう。

完徹の所為で少しハイになっていたのかもしれない。

段ボール箱を覗き込むとそこには有り得ない生き物が蹲って雪で白くなりつつある。

「生きているのか？」

俺の独り言にも殆ど反応が無い。

コンビニで買ったばかりの湯気の立っている肉まんを鼻先に近づけてみた。

「痛たたたっ」

事もあるつかその生き物は肉まんではなく俺の指に齧り付いてきた。思わず手を引き剥がすと体を小さく震わせながら恨めしそうな瞳で俺を見ている。

齧られた親指を見るとくつきりと歯型がついていた。

「そんな目で見るな。ほれ」

肉まんを差し出すと不思議そうな顔をして首を捻っている。

一刻も早くこの場を離脱して帰りたいが、この状況を放置する訳にもいかず仕方なく肉まんを半分に割って顔の前に突き出すと少し躊躇いながら齧り付いた。

そして空いている左手でダウンジャケットのポケットからスマートフォンを取り出し電話をしようすると鋭い視線が突き刺さった。見ると肉まんに齧り付いたまま俺に目で訴えかけている様だった。

『どこにも連絡するなと』

溜息を一つ付いて、スマートフォンをポケットに仕舞い込む。

何かとんでもない物に巻き込まれてしまった予感がする。

それでも誰かが手を差し伸べないと最悪な状態になるだろう事は容易に想像が付いた。

その誰かが現時点では俺自身しか居ない事すら。

直ぐに行動に移す、グズグズしていても状況は悪くなるだけだし俺自身にも余裕が無い。

ダウンジャケットを脱いで肉まんに齧り付いている生き物の体を包み込んで小脇に抱えるようにしてマンションに向かい走り出した。不思議な事に暴れるような事は無かった。

単に凍えて動けないのか……

それとも力尽きる寸前なのか……

その時の俺にはどうでも良い事だった。

玄関を開けてリビングに行き直ぐに暖房をつける。

一先ず運び込んだ物をソファーの上に置いてリビングとひと続きになったダイニングのカウンター付きキッチンに向かいミルクパンで牛乳を温め始める。

蜂蜜入りホットミルクをマグカップに入れて横に座るとガタガタと体を震わせている。

仕方なくカップを持ったまま口につけさせて人肌より少しだけ熱めに温めたミルクを飲ませると喉を鳴らしながら飲み始めた。

しばらくすると落ちて着いたのか体が温まってきたのか震えは止まったようだ。

風呂にでも入れて体を芯から温めてやるのが一番良いのだろうが、今の自分にはそんな気力は欠片も残ってなく。

一気に睡魔に襲われ思考回路が麻痺し始めていた。

寝室に向かい電気も点けずにスエットに着替えていると寝室のドアが開きベッドに何かが潜り込んだ。

「クソ、仕方が無い。俺がソファーで……」

独り言を言いながら寝室から出ようとしたが金縛りに遭ったかのようについに体が動かなかった。

すると背後から冷酷で冷徹な声がした。

「何故、助けた？」

「人を助けるのに理由なんかあるのか？」

「俺は人ではない、貴様の命など造作も無いぞ」

その言葉は頭の直ぐ後ろから聞こえ喉元には氷の様に冷たい刀が突きつけられていた。

「随分と不義理な奴だな。まあ、勝手に俺が助けただけだからな。逃げるなり好きにしろ」

「……………」

即座に導き出した返答に対して返事は無くその代わり背中に何かが当たり、喉元に突きつけられていた刀が床に鈍い音を放ちながら落ちた。

ゆっくりと振り返ると俺の背中に凭れかかっている生き物は拾って来た時とは違い漆黒のウエーブが掛かったロングコートで腕や足には深い傷が無数にあり血が滲み出している。

床に崩れ落ちそうになる生き物の体を咄嗟に後ろに腕を回して床に倒れないよう体を支え、抱きかかえるようにすると薄っすらと目を開けた。

その瞳は虚ろだったが吸い込まれそうな青い色をしている。

「人ではないって何者なんだ？」

「ヴァンプ」

か細い声で息も絶え絶えに答えた。

「吸血鬼？ この時代に？ それにしては随分弱いいな」

「……を失い過ぎた」

「なんだ？」

「……………」

もう声にならない様だった。

このまま放っておけば確実に散るのが判る。

仕方なく床に落ちている刀の刃で親指を切りその指を口に含ませると喉を鳴らしながら飲みだした。

「これじゃ足らねえか。冗談抜きでとんでもない物に巻き込まれたな。好きなだけ飲め」

今にも散りそうなヴァンプと言う生き物の後頭部に手を回し口が

俺の首筋に当たるようにしてやる。

一瞬だけ強い痛みが首筋に走る。

だが我慢できないほど痛い訳ではない、最初だけ強い痛みがあり段々痛みが鈍くなっていく。

それと同時に全身から力が抜けていくのが判る、それが当然なのだろう。

人の血液量は体重の13分の1から14分の1と言われている。

体重62キロの俺なら5リットル程度だろうか、その3分の1つまり1.5リットル強を急激に失えば生命に危険が及ぶ。

今がその状態なのだろう。

阿良々木風に言えば怪異に出遭ったと言う事か。

夏目や四月一日風に言えば妖やアヤカシと言った類の物なのだろう。段々意識が遠くなっていく。

助けてはいけない物を助けてしまったか？

助けてはいけない物？

子どもの頃にどこかで同じ様なことを……

助けた俺が最悪な事になったようだ。

暗闇しか写さない左目に閃光の様に痛みが走りそこで意識が途絶えた。

散ったと思っていたが不思議な事に目覚まし代わりのラジオで目が覚めた。

「夢なのか…… そろそろ起きてくれないか？」

拾った時と同じ栗毛色と言うか不思議な色のウエーブがあるロングコートで仔猫の様に体を丸めている生き物に声を掛けた。

「ふえ？」

モゾモゾとおきだして眠たそうな目をこすって辺りを見渡していた。

「ふ、ふえー！」

現状を把握したのか羽毛布団を抱きしめて人の顔をもの凄いい形相で睨んでいる。

それは仕方の無い現状なのかもしれない。

寝室にはダブルベッドしかなく2人で寝ていたのは明白だから？

明白？ 寝ていたのか？

それじゃあれは本当に夢だったのか？

確かに体がだるいが何処にも変った所は無く、今までと何ら変わりが無い。

何ら変りが無いが親指には刀で切った傷すら跡形も無かった。

だるいのは完徹の所為だと言われればそうなのかもしれない。

が、とりあえず否定をするべきなのだろう。

「何もして無いよ。まあ俺自身も意識が無かったからそれが確かか
と言えれば確証は無い。信じてもらうしかないな」

「ふう。そ。それじゃ」

呆気ない返事をして小柄な生き物は玄関に向かい歩き出し……

飛ぶ様に戻って来て寝室のベッドに潜り込んだ。

「何で玄関を開けっ放しにするんだ。寒いだろうが！」

叱責しながら玄関に向うとマンションから見渡せる玄関の外は街が
真っ白に雪化粧をしていた。

俺が住んでいるマンションは高台にあり高層マンションではないが
真っ白に染まった街が容易に見渡せた。

「寒！ それに腹が減った」

そこでタベから何も食べていない事に気づいて、ドアを閉めて体を
擦りながらキッチンに向う。

バターを入れた鍋で玉葱とベーコンをみじん切りにして焦げ付かな
いように炒め、ホットミルクにした残りの牛乳と固形ブイヨンを放
り込みそこにクリームコーンの缶詰を入れて塩コショウで味を調え
る。

カウンターに置いてあったパネトーネを切って皿に盛りスープをマ
グカップに注いでいると視線を感じる。

顔を上げると目の前にあの生き物の顔があった。

「何だ、ほらお前の分だ」

「……」

「要らないのなら俺が食うぞ」

すると何処かで可愛らしい腹の鳴る音がする。

「自分の物は自分で運べ」

「う、ううう」

カウンターダイニングのテーブルに自分の分を運び椅子に座ってマグカップに口を付けた。

すると俺が口を付けたのを確認してから小動物みたいな小柄な生き物がスープを飲み始めた。

昨夜は気が付かなかったがこの真冬にオフホワイトでオフタートルネックのニットワンピースの姿だった。

そして俺は何の変哲も無いグレーのスエット上下で連夜の完徹の所為で思考回路はカタツムリの如く鈍い動きだった。

重たい瞼を辛うじて開けて小動物を見ると美味しそうにパネトーネを頬張っている。

とりあえず名前だけでもと口を開いた。

「なあ、名前を……」

「頂きました」

両手を綺麗に合わせ一礼して立ち上がり。

俺の頬に唇をつけ。

耳元で囁いてマンションから飛び出して行った。

「こちらも頂きました」

と……そこで俺は撃沈した。

晴れのち暴風雨

短い冬休みがあつという間に終わり。

休みボケの所為か、単なる寝過ぎか重い体を引き摺るように学校の校門に向かい歩いている。

それと理由は判らないがクリスマスの翌日からそれが何だか理解できないが違和感を覚えていた。

校門が近づくつれ生徒が多くなってきた。

ここ明陽学院大学付属高等学校は高校には珍しく単位制が導入されていて、大学と同じ様に履修する授業を好きな様に選ぶ事が出来るようになってる。

その為に登校時間や下校時間もまちまちで全生徒が同じ時間に登校するのは新学期の初めと学期末だけになっていた。

「ハルリン、おはよー」

後ろからいきなり腕をつかまれ。

まだ冬はこれからだと言うのに桜舞い散る春爛漫の様な顔をしながら、春の陽気でおかしくなった様な奴の呼び名でよばれてしまった。見下ろすと可愛い茶色い髪の毛のショートボブで頬をピンク色に染めて口を尖らせている小柄な生き物は、赤いショート丈のダッフルコートを制服の上に着て俺の腕をがっちりとホールドしていた。

「あんな、朝露。俺には亀梨晴海きなしはるみっていう女に間違われそうな名前があるんだ」

「私だって朝露じゃないもん！ 朝香菜露あさかなつゆって名前だもん！」

「で、菜露。朝ばらからなんなんだ？」

「久しぶりなのにつれないんだ」

「悪かったな。おはよー」

「うん！」

嬉しそうに返事をした菜露は一つ後輩で1年生だ。

他の生徒の波に乗りながら校門に向う。

この明陽学院は制服自体もかなり自由になっている。

基本は男女とも紺のブレザーで。男子のズボンはグレーか紺のスラックス、女子はグレーか紺のチェックのスカート。

シャツも白・ブルー・イエロー・ピンクから選べて、ネクタイとリボンも色違いで2種類用意されている。

そして夏場は白のポロシャツも許されていて自分で組み合わせる事ができる。

冬の季節はブレザーの下にパーカーを着ていたりする生徒も居るが先生方はあまり口煩く注意する事は無かった。

この時期に着るコートに関しても指定が無かった。

それ故にダッフルコートやピーコートが主流でダウンジャケットを着ている連中も多い、色もかなりカラフルだ。

俺はと言うとブレザーに紺のスラックス。

シャツは白でネクタイはエンジ。

スタンダードな黒いステンカラーコートを着ている。

カバンは学校指定のヨーロッパの学生が使っているようなキャメル色の革製で3wayバッグになっている。

俺はカバンを背負って両手をスラックスのポケットに突っ込んでいた。

校門を過ぎて昇降口に向っていると見知った顔が増えてくる。

「お、珍しい奴見つけ」

「おう、東雲しのめか。真面目だな、相変わらず」

「どう言う風の吹きまわしだ？ 始業式には殆ど顔を出さない奴が」

「別に、気まぐれ。朝早く目が覚めただけの事だ」

「そう言えば晴海。顔色悪いよね」

菜露しのめまで突っ込みを入れてきた。

東雲しのめは名を恋次れんじと言い俺が一応在籍しているアメフト部の仲間と同級生だ。

一応と言うのは、今は殆ど部活には参加していない状況で幽霊部員と言った方がいいのかもしれない。

それと菜露が突っ込んできた顔色が悪いというのはその通りだろうと思う。

確かに体は重いしだるい。

それは毎晩の様に吸血鬼に寝込みを襲われる夢を見ていたからだ。眠りが浅いというかそんな夢を見る原因はクリスマスの出来事だと思う。

そしてその夢を見た日は必ず体がこんな状態だった。

「晴海はお正月も仕事だったの？」

「ああ、完璧に拉致られて軟禁された」

「でも、バイト代は貰えるんでしょ」

「まあ、な」

いくら身内だからと言って年末年始の2大イベントにただ働きじゃ目も当てられない。

しかし、予定があるのかと言えばそれはまた別の話だった。

「亀梨は去年も相変わらずか。で、どうした？ あのクリスマス前に告ってきた彼女は？」

「ああ、クリスマスも正月も仕事だって言ったら『無理！』と叫んで何処かに消えた」

「あのな、少しは都合つけてやれよ」

「うざい。俺はあいつ等のファッションアイテムじゃねえつつの」

「本当に勿体無い。お前は背も高くってかなりイケてるのに」

「それじゃ、東雲に今度は回してやるよ」

「いや、それだけは勘弁してくれ。あいつに殺される」

東雲は一駅向こうにある姫乃月学園女子高等学校・通称（姫女）に彼女が居て、その彼女は恐ろしいくらいヤキモチ焼かしい。

俺が下手を打てばかなり高確率で東雲が天に召す事になるだろう。少し見てみたい気もするが敢えて争いの種を撒く様な事はしないのが平和を愛する俺だった。

そんなくだらない話をしていると悪友達が集まり始めていた。

「晴海がいる」

「だから天気が良いのか」

「亀、元気？」

他はスルーしよう。

名前の所為か俺は晴れ男と言う事になっていているらしい。

そして今日は悪友の言葉どおり抜けるような快晴だった。

昇降口がもう目の前で後輩の菜露と別れようとした時に校門の方でどよめきが上がった。

ざわつきながら集まり始めている生徒達の方を見ると1人の女生徒を取り囲むようにしていた。

取り囲んでいるのは殆どが1年生と2年生の女子でその周りを男子生徒が遠巻きに覗き込んでいた。

「なんだ。あれ？」

「新学期初日の恒例の儀式みたいなもんだ。亀梨は初めてだったな。

あの取り囲まれているのは誰が言い始めたのか学園一のアイドル・ほうじょうみづ

鳳条美雨。3年生の先輩で名前は美しい雨と書き晴れ男のお前とは

反対に雨女として認知されている」

「へえ、そんな先輩が居たんだ。俺には関係ねえな」

東雲の説明を聞いて昇降口に向おうとして振り返った時に、その鳳条先輩の顔が見えた気がした。

本当に一瞬だけチラッと見えた気がしただけだった。

が、次の瞬間。

俺の背中に数え切れない視線が突き刺さり、どよめきと言うより絶叫に似た雄叫びが上がっている。

俺の腕にしがみ付いていた菜露にいたっては巻き込まれない様に、飛び退きながら俺の腕から離れた。

「はあ？ 何なんだ？」

振り向くと見覚えのある栗毛色と言うか不思議な色のウェーブがあ

るロングコートの生き物が明陽学院の制服の上に真っ白なコートを羽織り俺を指差して声を上げている。

すると今まで出来ていた人だかりがモーゼの祈りで海が真っ二つに割れたように道が出来て、鳳条先輩が指を指したままゆっくりと歩いてきた。

何故だか判らないが嫌な汗が滲み出し、背中に嫌な物が走る。

そんな事はお構い無しに俺の目の前まで進んできた。

「同じ学校だったんだね」

「……………」

「また、会えたね」

「……………」

「でも、会えたのは運命だけだね」

「その会えたは、遭遇の遭えたですか？ 鳳条先輩」

「えっ、名前。知っていてくれたんだ」

「いや、数秒前に聞きましたし。未だに先輩だなんて信じられませんでした」

「もう、酷い事を言うんだね、亀梨晴海君。クリスマスの一夜を共にした仲なのに」

雲行きが怪しくなり快晴から一気に暴風雨に変わった。

鳳条美雨先輩のともでもないカミングアウトのお陰で寸でのところで昇降口前は修羅場と化すところだったが、俺は東雲と悪友達に一瞬にして入学の時に振り分けられたクラスメイトと本来なら呼ぶべき人間の集まっている教室に粗大ゴミの様な扱いで連れて来られていた。

菜露は無事にあの場を離脱出来たのだろうか後でメールでもして安否を確認しよう。

そんな事を考えていると忽ち民衆に取り囲まれた小悪党の様な状態に陥っていた。

その周りを昇降口前に居たであろう男達が遠巻きに見て、女子は口

々に不満を炸裂させている。

「鳳条先輩まで亀梨の毒牙に」

「とうとう我等が女神まで汚すか」

「命知らず。夜道は気をつけな」

平和を何より愛する者に対して酷い言いようである。

がしかし、平和を愛する故に反論はしないし反論しないといけない様な事を俺は一切していない。

「なあ、亀梨。親友として忠告するぞ。今度も遊びか？」

「あんな、東雲。今度も次回もねえよ。今までだって俺は遊んでい
たつもりはないし、俺から告った事なんて一度もねえよ」

「鬼畜！」

「うざ。勝手に向こうが言い寄ってきて勝手に離れていくんだらう
が。それに俺は一度たりとも手を出した事が無い！」

「おお、言い切った」

悪友達が冷ややかな目をしながら感心している。

「それじゃ、キスは？」

「はあ？ 誰が好きでもない女にするか」

「それじゃ、迫られたらどうする」

「『腹が痛い、トイレ』で一発だ」

「外道、そこへなおれ。据え膳喰わぬとは不埒な奴。恥を知れ！
叩き切ってやる」

時代劇を見過ぎの奴が居るらしい。ご丁寧に抜刀する真似までして
いる。

「俺はこよなく平和を愛する人間だから」

「よく言うよ。俺らの中で一番手が早いくせに」

「不可抗力だ」

「それじゃ、鳳条先輩が言っていたのは嘘なんだな」

「……先輩の名誉の為だけに言っておく。一応、嘘じゃない」

俺は真実だけを述べた。誤解があるといけないので付け加えようと
すると東雲が食い下がってきた。

「亀梨は確か一人暮らしだよな。一つ屋根の下に……やっぱり」

「あのな、一人暮らしは不可抗力だ。親父は自由が良いと子供みたいなことを言ってマンションから何処かに出て行ったんだ。それにあの晩も不可抗力だ」

未だに親父が何処で暮らしているのか知らない、店に居なければ地球上の何処かにいるわけだから基本的に家などと言う概念が親父には無いのかもしれない。

それと事実を言えばあれが夢でなければ俺は先輩に手と言うか首を差しだした。

でも、本心は悪夢であって欲しいと心のどこかで思っていた。

「亀梨。親友の俺には本当の事を……」

「はつきり言う。確かに一晩だけ一緒に居た。しかし、お前らが思っ
て言うような事は一切無い」

「散りやがれ！」

教室中に響き渡ったその声は東雲でも悪友達でも、ましてや俺の心の叫びでもなくこの学院で俺達の担任とでも呼ぶべき竜ヶ崎先生りゅうがさきの怒鳴り声だった。

スレンダーな体に常に黒いスーツを纏い。

漆黒の絹の様なロングヘアーで目鼻立ちのはつきりとした顔にふちなしの眼鏡を掛け。

その奥から鋭い眼光を飛ばしている。

騒いでいた生徒達は潮が引くように席に着き始める。

東雲は俺の隣の席に座り悪友達の顔からは血の気が引いていた。

「新学期そうそう何なんだ、この騒ぎは！ また亀梨か。お前が珍しく始業式の日顔を出すとろくな事が無いな。後で職員室に来い」
俺自身は何も問題を起こすつもりは無いのに常に何かあれば中心人物だと思われ、入学してから何度と無く呼び出しを喰らっている。
そんな事がありこの学院では不良で女たらしの烙印を押されてしまっている。

屋上

俺は始業式を抜け出して校舎の屋上に来ていた。
2年の3学期まで一度も始業式に出た事が無いのだから出なくても構わないだろう。

それにその事について一度も指摘された事は無い。

始業式は出席日数には響くが単位には響かないので他で回収すれば良い、ただその程度の事だからなのだろう。

空は快晴。

北風も穏やかでブレザー姿でも寒さはそれほど感じなかった。

このままふけてしまおうか、そんな事を考えていると寄りかかっている壁の横にある屋上のドアが開いてドアの影から女の子が顔を出す。

不思議な色の髪の毛が風に吹かれ靡いている。

「亀梨君、発見！」

「こんな時間に先輩はサボりですか？」

「現にサボっている亀梨君には言われたくないな」

「一つだけ忠告しておきます。俺なんかに係わっていると先輩の評判を落としますよ」

「あら、私はそんな事は気にしないわ。評判なんてただの噂にしか過ぎないもの」

そう言いながら俺の横に腰を降ろした。

初めて出会った時は状況が状況だっただけに気づかなかったが小柄な生き物と言うだけで年下だと思い込んでいたらしい。

落ち着き払った物腰、そして瞳が特に印象的だった。

吸い込まれそうなくらい不思議な茶色い瞳をしている。

そしてその瞳は何処までも真っ直ぐで、何処と無く悪戯ばさを秘めている。

「会えたのは運命だと言ったはずよ」

「運命ですか。それじゃ先輩は俺の事を知っているんですか？」

「ええ、知っているわ。亀梨かめなしと書いてきなし君、身長178センチ体重62キロ。アメフト部に所属・ランニングバックやクォーターバックなどをこなすマルチプレーヤーだった。喧嘩っぱやくって女たらし。不良of不良。不幸を呼ぶ男。誰に聞いても黒い噂ばかりね」

「それなら」

「言っただけよ。そんな物はただの噂に過ぎない。喧嘩の理由はいつも誰かを守る為。そして女子が交際を申し込んで断らないのは相手を傷つけない為と自分も傷つきたくないからかしら。それでも亀梨君の中ではルールがある。違つかしら？」

理由は判らないが鳳条先輩にはお見通しの部分があるようだ。告られて断らないのはそれ以上言い寄られるのが面倒だから。

誰かと付き合っていると噂が流れれば言い寄ってくる女の子は確実に減る。

だから二股なんて絶対に有り得ない。

適当に相手をして踏み込んできたら冷たい態度を取れば自然と離れていく。

そしてこちらからは決して近寄らない理由なんて簡潔だ。

恋愛感情なんて何処にも持ち合わせていないのだから。

喧嘩の件は誰にでもある事で触れられたくない事に触れられれば誰でも怒るただそれだけの事だ。

「それと1年生の子とも仲が良いのね」

「ああ、菜露か。朝香菜露、竜ヶ崎先生の義理の妹だよ。よって菜露には後輩以上の感情はあるがそれ以上でもそれ以下でもない」

「それはどう言う意味なのかしら？」

「言葉のまんまさ。先に言っただけだ、俺と係わると評判を落とすって。そんな事なんか気にせず菜露は俺に接してくるからな。それと竜ヶ崎先生と言うより龍ヶ崎霧華は俺が子どもの頃からのお目付け役だよ」

「親代わりって事なの？」

「家の都合ってやつ。親父は仕事命の人間だからな。母親は訳ありで居ない」

「訳ありって亀梨君は子どもの頃は海外に居たんでしょ」

「親父の仕事の都合だ。ヨーロッパを転々と日常会話程度ならフランス語・イタリア語・英語の3カ国語なら喋れる」

「うわぁ、凄いんだ」

「凄い事なんかじゃねえよ。俺が生まれたのはイタリアのシチリアだからな」

段々、苛々してきたなんでこんな事を話さなきゃならないんだ。

そして苛々の原因はクリスマスの夜の事を聞きたいがどうしても聞けないで居る自分自身の所為だった。

「ごめんなさいね。色々と喋りたくない事を聞いてしまつて」

「別に。ただあまりプライベートな事は喋りたくないだけだよ」

「嘘つき。まあいいわ。それじゃ亀梨君は私の事をどの程度知っているのかしら？」

「誰に対しても物腰が柔らかく下級生からも同級生からも人気がある。正義感が強く曲がった事が嫌いな人。成績は中の上。容姿端麗。運動神経もそこそこの学院のアイドルってくらいですよ。名前だつて朝に知つたばかりですし」

竜ヶ崎に怒鳴られてホームルームが終わつた後で始業式までの間に聞いた情報が全てだったが俺みたいな黒い噂なんて何処にも無く真っ白で、何処かで聞いた事があるような『清く正しく美しく』を地で行く様な人だった。

俺の知っている情報は鳳条先輩に言わせればただの噂にしか過ぎないがだ、俺の知りうる情報の全てだった。

下の方でチャイムが鳴っている始業式が終わつたのだろう生徒たちの声がザワザワと聞こえてきた。

「先輩、そろそろ戻つたほうが良いんじゃないですか？」

「あら、亀梨君は戻らないの？」

「ええ、どうせ誰かが落としたギガトン級の爆弾の所為で呼び出しを喰らってますから。よってこれ以上俺に係わらないで下さい」

「申し訳ないけれどそれは無理な相談ね。だってあなたは既に私達側だから」

鳳条先輩の放った言葉が俺を貫き、立ち上がろうと浮かしかけた腰を力なく落とした。

それは本日二つ目でこの場に当事者しか居ないがメガトン級の爆弾で。

クリスマスの夜の事が現実になった瞬間だった。

「マジですか……」

「ゴメンなさいと謝るべきかしら」

「いや、助けたのは俺自身の意思ですから」

「それと、毎晩お邪魔しちゃって」

「はあ？ それじゃあれは夢じゃなくって……」

「現実よ。クリスマスの夜は本当に塵になる寸前で、それでも訳も聞かずに助けてくれた君に申し訳なくって。亀梨君が人間に戻るかもしれないギリギリの量しか飲む事が出来なかったの。でもそれじゃ結局全快するには足りなくって毎晩少しずつ補わせてもらっていたの」

「それじゃ、俺は？」

「今は限りなく人間に近いヴァンプかな」

「かなって曖昧だな」

「詳しい事は夜の私に聞いて頂戴ね」

すると何か柔らかくって温かい物が俺の頬に当たり鳳条先輩は耳元で『頂きました』と言って颯爽と屋上を後にしていた。

先輩に出会ってから二度目の撃沈……

その場で冷たいコンクリートの屋上に倒れこんだ。

見事なまでの散りぷりだった。

どう足掻いても先輩に勝てる気がしなかった。

始業式が終わっても授業をしている教室がいくつもある。

俺自身も受けようと思っていた授業があったがそんな気分になれず
にただでさえ重い体を足取りも重く職員室に向った。

「失礼します。竜ヶ崎先生は？ 居ないか。ほっ」

「何を『ほっ』と安心して気を抜いているんだ。亀梨晴海」

「いや、出直してきます」

「いいから来い」

気配も一切感じさせず背後から竜ヶ崎先生の声がして、職員室の隣
にある折檻部屋とも呼ばれている進路指導室に連れ込まれようとして
いる。

竜ヶ崎先生が俺の襟首を掴んで力任せに引つ張った。

「な、何でここなんだよ。職員室でいいだろうが」

「それじゃ、職員室で話せるような事なのか？ 登校して来たくせ
に始業式をサボって女と屋上でいちゃつくとは良い根性しているよ
な」

完全にロックオンされている、大人しく従うしか無いようだ。

逃げ出してもAIM-9 サイドワインダーの様に執拗に追い詰め
てきて撃沈されれば跡形も無く散ることになるだろう。

渋々進路指導室にある椅子に腰掛けて机に片肘を突いて不機嫌の権
化の様な顔した。

現に体はすこぶる調子が悪い。

すると竜ヶ崎先生は机の横にある資料が入れられているスチール製
の本棚に寄りかかって腕組みをして俺を見下ろしていた。

「で、何が聞きたいんだ？」

「晴海、3年の鳳条とはどう言う関係だ？」

「関係も何もねえよ。ただクリスマス前の晩に雪に埋もれていたから
助けたただけだ。喋れる状態じゃなかったからマンションに一晩だけ
置いた。それだけだ」

「何故、マンションに？」

「警察に任そうとしたが拒絶された。放っておく訳にいかないだろう、あのまま放置したら寝覚めが悪いし、今頃は新聞沙汰になって大騒ぎだろうよ。明陽学院のアイドルが野垂れ散ったって」

「本当にそれだけなのか？」

「彼女がここ明陽学院のアイドルだって知ったのは今朝だ。まあ、不意打ちで2回ほど頬にキスされたけどな。それ以上でもそれ以下でもねえよ。理由は霧華が一番良く知っているだろうが」

それにこれ以上もこれ以下も話をするつもりは無い。

俺自身ですら俺自身に起こっている事が未だに信じられないでいる。そんな事を易々と話す訳にはいかないだろうし喋るべきではないだろう。

始業式に出席していた霧華が鳳条先輩と俺が屋上に居た事を知っていたのは全くと言っていいほど不思議に思わない。

何故なら霧華のスキルやポテンシャルが半端ない事は身を持って知っていたから。

「しかし、お前の親父さんにも困ったものだな。高校生のお前を完徹で働かすなんて」

「毎年の事だからしょうがねえよ。それにあの店は俺が顔を出さなかったら確実に傾いて散るぞ」

「で、今は何処に居るんだ？」

「地球上の何処かだ。俺には関係ないだろ」

「そうはいかない。進路の事について話し合わないといけない時期だろうが」

「そんな物は鼻から決まっているだろう。何処かの店に下働きに出されるか、レシピと物々交換で海外行きだ」

「晴海はそれで良いのか？」

「良いも悪いもねえよ」

「これから先は長いのだぞ」

「未来も夢も当に散った散った」

「本当にお前はうざい奴だな。とつとと散れ！」

本当に教師としては如何なんだ？

確実に軍隊の鬼上官の方が似合っている。

そんな竜ヶ崎先生に尻を蹴り飛ばされて強制的に廊下に排出されるとプリントを抱えている女の子にぶつかってしまふ。

すると女の子が持っていたプリントが物の見事に舞い散って、女の子は尻餅を付いた。

「痛い！」

「悪い。本当にゴメン。大丈夫か？」

「晴海のおたんこなす！」

頬を膨らませ口を尖らせて尻餅を付いている女の子もとい小動物は菜露だった。

「悪いな」

「通算534本目の犠打だね。それに私は小動物じゃないモン！」

「あのな、それじゃギネス記録になっちゃうだろ。それに俺は534回も呼び出されてねえし、犠打って地味過ぎだろ」

そんな事を言いながら廊下に散らばったプリントを菜露と集める。

「お義姉ちゃん。何だって？」

「今朝の事情説明をさせられた」

「ああ、学院のアイドルと親密なお泊りデートか」

「親密でもデートでもねえよ。一体どんな話になっているんだよ」

「その件に関してはただじゃ言えないな。それに正式に謝罪してもらってないし。今朝だってあの後で質問攻めにあって凄く大変だったんだから」

「あのな、謝っただろう。判ったからそんな顔をするな。ケーキで手を打たないか？」

「やった！『Nero e bianco』のケーキだよ。晴海と行けば並ばないで済むんだもん」

「了解」

早くも4月の新入部員獲得の為の練習だろうか、何処からかAKB

48の『会いたかった』を奏でる吹奏楽部の練習が廊下まで流れて聞こえていた。

その後、プリントを職員室に届け約束どおり菜露にスイーツ&カフェ N e r o e b i a n c o に連れて行かれ。

菜露の気が済むまで俺はブラックティーを飲みながらケーキを奢らされた事は言うまでも無い。

まあ、こうして菜露と放課後に出歩くのは嫌いではなかった。

ただ一つ、常に俺の腕にしがみ付いて密着してくる事を除いては。

嫌

そんな風にドタバタで始まった3学期も数日が過ぎ。

俺は今日の午後最後の講義を滅多に選ばない大教室で受けていた。

それは、俺が受けようとした講義が急に休講になり帰ろうとした所を東雲に見つかり、週明けに受けるはずだった物理の講義を大教室で受ける羽目になった。

「本当に亀梨は大教室の講義が嫌いだよな」

「あんな、大教室の講義が嫌いなんじゃなくて晒し者になるのが嫌いなんだ」

俺の言葉どおり階段状に並んでいる机の下のほうで授業中だというのにヒソヒソと耳打ちしている連中が大勢いる。

恐らく始業式があった日の事を話しているのだろう。

講師の先生が咳払いをしてもお構いなしだった。

「で、一番後ろの席なわけ」

「はあ？ 一番前に座って後ろの話し声が気になり振り返ってみる。アルゴリズムたいそうの明陽学院大学付属高校のみなさんといつしよになる。それこそ気分が悪いわ」

「まあ、言い得て妙だな」

「それに後ろからだったら、何処のどいつが話しているか丸見えだからな。後で蹴散らしてやる」

少し大きな声で言うところヒソヒソ話が一瞬で静寂に変わり、話をしていた生徒が一齐に黒板に集中し始めた。

「亀梨は黒だな。それもとす黒い漆黒だな」

「穢れの無い純白と言ってくれ。俺は平和を愛する正義の味方だ。神聖な授業を妨害する奴を排除しただけだ」

「そうなのか？ まあ如何でもいい、俺達も授業に集中しようぜ」
東雲とこれ以上話しているところらが悪者になってしまう。

黒板とノートに真面目に向き合うことにした。

本日最後の授業の終わりを知らせるチャイムがなり。

生徒達は一斉にざわつき始めて教室を後にする。

教壇では先生が教科書や資料をまとめ俺と東雲の方を一瞥して教室を出て行くこうとしている姿が見える。

どれだけ有名人になってしまったのだろう。

「明陽で知る人は居ないくらいだな」

「はあ、俺の平穏な日々を返してくれ」

「そうは問屋が卸さないみたいだぞ。ほれ」

東雲にわき腹を突かれ教科書やノートを整えながら顔を上げる。

ちょうど下段と上段の中央にある出入り口に通じている通路に栗毛色と言うか不思議な色のウエーブがあるロングコートの小動物が笑顔でこちらを見ている。

雲行きが怪しくなってきた。

速攻で帰らないと今にも降りだしそうだ。

「東雲、帰るぞ」

俺の言葉が合図の様にその小動物はあろう事が出入り口に向わず階段をあがってこちらに向ってきた。

帰りかけていた生徒達も何事かと足を止めてこちらに注目している。

「お久しぶり。亀梨晴海君」

「そうですね、鳳条先輩」

素っ気無く返すと先輩が視線を東雲に移した。

「東雲恋次君、亀梨君をお借りしていいかしら」

「ええ、どうぞご自由に煮るなり焼くなり」

「ありがとう。そうそう、これ。彼女が探していたCDよ」

「それじゃ遠慮なくお借りします。亀梨、散って来い」

「恋次！ てめえ！」

今、俺の肩を叩いた東雲が物理の講義に無理矢理連れて来た理由が判った瞬間だった。

事もあるう事かこの馬鹿恋次は親友を売りやがった。

どれだけ安いんだ俺は？ CD一枚それもレンタルって。

態々会わないように避けていたのに親友を信じてこの有様だ、話を持ちかけたのは鳳条先輩なのだろう事は容易に想像が付く。

彼女が居る東雲が先輩に声を掛ける訳が無く、やきもち焼きの東雲の彼女の友達もこの学院にはいると聞いたことがある。

東雲がどれだけチャレンジャーでも他の女の子、それも学院のアイドルに声を掛ける様なことをしないのは明白だ。

そんな事が彼女の彼女にあれば確実に桜が咲く前に東雲が散るだろう。

逆でも散りかねないが彼女が探していたCDを借りたという口実があれば無罪放免どころか東雲の株が一気にアップするだけの事だった。

俺の株は一気に下落するが……

「亀梨君、私と付き合いなさい」

「あの、それはどう言う意味の付き合いですか？」

その瞬間、何かがぶちぎれる様な音が聞こえた気がした。

「いいわ。正式にあなたに申し込みます。亀梨晴海、私の恋人になりなさい」

「丁重にお断り申し上げます」

鳳条先輩に深々と頭を下げる。

すると床しか見えないはずの視線の先に鳳条先輩の手が見えネクタイが引つ張られた。

どうやら鳳条先輩が俺のネクタイを掴んだ様だ。

苦しくなり堪らず顔を上げるととても柔らかい物が口に押し付けられた。

それは俺の顔と鳳条先輩の顔の距離がゼロになった瞬間だった。

思わず言葉を失ってしまふ。

どうやらそれは俺だけではないようだ、教室が授業中以上に水を打った様になり東雲さえも呆然としている。

鳳条先輩は顔を離し俺の耳元で囁いた。

「頂きました」

気が付くと俺はロッカー室からカバンを取り出して昇降口に向って歩いていった。

あの後、鳳条先輩は俺の耳元で『昇降口で待っているから』と言うと大教室を後にした。

それから事は良く覚えていなかった。

恐らく立ち並ぶ氷の像の中を歩くように教室からロッカー室に来たのだと思う。

そして生徒達を凍り付けにした当の本人は昇降口で何食わぬ顔をして始業式の日と同じ格好で立っていた。

「遅いぞ」

「あのな、どうしてあんな事を」

「昨日は朝香さんとデートだったんでしょ」

「まあ、男女が一緒に出掛けるのをデートと呼ぶのならそうなんだろう」

「私も亀梨君とデートしたいな」

「まあ、仕方が無いか」

「良いの？」

「あんな事をした後で聞くな」

寒空の下、昨日は菜露と歩いた道を今日は鳳条先輩と歩いている。

昨日と決定的に違う事は俺の左腕に菜露の様な重みは無く、遠慮がちに俺のコートを摘んで少し後ろを鳳条先輩が歩いて付いてきている事だった。

デートを頑なに断る事も出来たがそれはあえてしない。

何故ならここまで俺に拘る理由をはっきりと知りたいと言う気持ちがあるからで。

学院では話せない事の方が多いと考えて外で2人っきりで話したほうがお互いに都合がいいだろうと思った。

駅に向かい通学に毎日の様に使っている電車に乗り込む。

「鳳条先輩の家も同じ方向なんですか？」

「うん、亀梨君が降りるひとつ先の駅だよ」

「そうだったんですか」

「でも、ほとんど会った事が無いよね」

「まあ、登下校の時間はまちまちだし。取っている科目が違えば3年間一度も顔を合わさなくても不思議じゃないですよ」

「そうかな」

「それでも、鳳条先輩の噂ぐらいは知っていましたよ」

「ええ、どんな噂なの？」

「3年に凄い美人がいるとかその程度ですけどね」

「本当に女の子に興味が無いんだ。もしかして……」

「それは全力で否定させていただきます。俺は一応ノーマルですよ」

「ふうん、一応なんだ」

そんな他愛の無い会話をしていると降りる駅に着いた。

改札を抜けて駅前の大通りから並木道になっている通りに入ると直ぐに、金曜日ということもありかなりの行列が出来ているのが見えてきた。

「うわあ、凄い行列だよ。ここのケーキって凄く美味しいけど買うのが大変なんだもん」

「鳳条先輩も買いに来た事があるんですね」

「もちろんだよ。女の子にとってスイーツはとても大切な物なんだよ」

全面ガラス張りになっていている店の前に出来ている行列を横目に見ながら店内に入ろうとすると鳳条先輩に腕をつかまれた。

「待って。皆、寒い中を並んで待っているんだよ」

「良いから行きますよ」

鳳条先輩らしい正義感あふれる言葉を遮るように先輩の手を取って店内に足を踏み入れたとたんに先輩は俺の手を振り解いた。

「もう、待つて。これだけは言わせてもらっよ、ズルは絶対に駄目！　ここは行列が出来ることで有名な『スイーツ&カフェ Nero e bianco』なの。だからこの店で話したいんなら一緒に並ぼう」

静かな店内に先輩の声が響きお客さんやスタッフの視線が集まってしまった。

只でさえ行列の脇を通って店内に入ったのだ、ガラス越しに寒空の下で行列を成すお客さんも何事かと覗き込んでいる。

すると真っ白いシャツに黒いベストを着て、黒いスラックスに黒いロングエプロンをして胸元には凜々しい位の黒いネクタイを締めた

……

一言で言えばギャルソンの格好をして長い黒髪を後ろで一つに束ねている女性スタッフが俺達に近づいてきた。

「ほら、店の人が注意しに来たじゃない」

「チーフ、お疲れ様です」

「お疲れ様です、代理。今日は？」

「今日も上は空いているかな」

「大丈夫ですよ」

「ありがとう」

瞳が僅かに揺れながら俺と先輩を行き来しながら笑みが零れているチーフに会釈をして歩き出す。

そして忘れずに騒がせてしまったお客様にも声を掛けた。

「お騒がせして申し訳御座いませんでした。ごゆっくりどうぞ。先輩、鳳条先輩行きますよ」

「ふえ、待つて！」

深くお辞儀をしてから先輩の手を取って階段を上がりカフェの2階席に向う。

そして一番奥にあるガラス張りの部屋に入って椅子に座ると直ぐに他のギャルソンの格好をした女性のスタッフが水を運んで来てくれた。

「ありがとう、声を掛けるから」

「かしこまりました」

それだけを言うと満面の笑みを浮かべて部屋から出て行くのが見え
た。

すると直ぐに鳳条先輩が慌てふためいて詰め寄ってきた。

「この部屋ってVIP席でしょ、亀梨君。それにチーフとか代理と
かどう言う事なの？」

「この店は親父の店で親父が不在の時は俺が手伝ったりしているん
です。だから体面上オーナー代理と言う事になっているんです」

「お父さんがこのオーナー？ それじゃ海外で暮らしていたって」

「親父の修行に付き合わせられただけです。それに巷じゃここはV
IP席なんて呼ばれていますけどミーティングや試食会に使う目
的の部屋なんです。まあ、通常はお客さんは入れないし業者との打
ち合わせや俺が使っているからそう思われているのかもしれないで
すけどね」

「そうだったんだ。はあゝ もう格好の悪い事しちゃったな。それ
に亀梨君が使うって女の子でも連れてくるんでしょ」

「小動物の菜露しか連れて来たことなんかありませんよ。それに先
輩の曲がった事が嫌いな事が再確認できましたけどね」

「いつも酷いよ。先に言ってくれば良いじゃない」

「酷いのはお互い様なんじゃないですか？」

「それは……」

語尾が尻窄みになり俺から眼を逸らすように俯いて先輩は何も言わ
なくなってしまった。

今更どうこう言っても過ぎた事は仕方が無いのだけど、せめて理由
だけでも聞きだそうと思って店に連れて来たのだから聞かない訳に
はいかない。

しばらく沈黙が流れ俺から口を開こうとすると微かに先輩の声が聞
こえる。

「ゴメンなさい」

「どうして謝るんですか？」

「だって、私の所為で亀梨君が困っているのでしょ」

「それは俺が俺の意思で助けただけでそれだけで良いじゃないですか」

「良くないよ。ただ助けただけじゃないでしょ、私を助けた所為で亀梨君は人間じゃなくなっちゃったんだよ。私が亀梨君の命を貰っちゃったの。だから私は……」

「責任感から俺の恋人になろうと？ 俺は人間に見えませんか？」

「それじゃ、私は化け物だけど。今の私が化け物に見える？」

「……………」

鳳条先輩が自分自身を化け物だと言言葉に何も言えなくなってしまった。

確かクリスマスの夜もヴァンプなんかに見えなかった。

刀を突きつけられた時以外は、それでも先輩はヴァンパイアなんだ。「化け物はね、大概昼間は人の姿をしているの。夜でも力を発揮しなければ人と同じ。でも根本は変えられない化け物のまま」

「それじゃ、俺も夜になればヴァンプに？」

「それは判らない、だって亀梨君が初めてだったから」

「NGワードですよ」

「だって、本当の事だから」

再び沈黙が訪れた。それでも聞く選択しか無いと口を開いた。

「初めてだったから俺なんですか？」

「私は亀梨君の人生を壊しちゃったんだよ。それならせめて私が……」

……

「それが理由ですか」

「お願いだからそんな言い方しないで……本当にゴメンなさい」

「先輩？ 鳳条先輩？」

俺が名前を呼んでも決して顔を上げず俯いたままだった。

膝の上に付いた手に力がこもり握り拳になり小さく震え出した。

そして手の甲に光る物が落ちた。

「先輩、泣いているんですか？」

「もう！ 優しくしないで！」

それは鳳条先輩の心からの叫びだった。

「化け物の私なんか死んじやええ良かつたんだ！ こんな優しい人を巻き込んで…… 申し訳ない気持ち一杯で…… だけど……」

「俺は優しい人間なんかじゃないですよ。言い寄って来た女の子を利用するような人間ですから」

それは俺の心に深く突き刺さっていたものが抜け落ちた瞬間だった。

「やっぱり亀梨君は優しいね。大丈夫、人に戻してあげる」

俺の顔を見る鳳条先輩の頬には涙が流れた跡が残っているが、それは出会ってから一度も見えた事が無い程の笑顔だった。

一瞬、幼い少女の笑顔が頭に浮かび鳳条先輩の笑顔がダブった。

すると鳳条先輩が立ち上がり俺の目を真っ直ぐに見ている。

その瞳に宿る物に気づいて、その少女が誰だったのなんて考える余裕が無くなっていた。

「鳳条先輩、何を考えているんですか？ 人に戻す方法って何ですか？」

「今までどおり学校に言って東雲君達とお喋りして、恋に落ちて誰かを好きになつて。結婚して子どもが生まれてだよ」

「先輩？」

「この世に有ってはいけないものはやっぱり消えるべきなんだよ。

あの人が言っていた通りに」

「何を訳の判らない事を言っているんですか？」

「この話はこれでお終い。ゴメンね、せっかく美味しいケーキのお店に連れて来て貰ったのに今日はこれで帰るね」

「何処にですか？」

「何処って自分の家だよ」

「帰る前に教えてください。俺を人間に戻す方法って何ですか？」

「それは言えない。人間の世界にも言えない事がある様に私達の世

界にもあるの。だから言えない」

鳳条先輩は恐らく自ら散るつもりなのだろう。

これは俺の憶測でしかないが先輩のあの真っ直ぐな瞳が何かを覚悟した証拠だ。

自らの事を化け物だと言い切る先輩が、俺が人ではなくなる事と引き換えに命を救われた。

ならば俺を人に戻す為の対価は先輩の命に値するはずだ。

今の先輩の姿はあの時の俺の姿そのものだった。

責任感……

申し訳ない気持ち……

すると俺自身でも信じられないくらい自然に口を開いていた。

「学院での先輩の告白の返答を撤回します。先輩の恋人にしてください」

ガラスのドアに手を掛けていた先輩が驚いた様な顔をして振り返った。

その瞳が揺れている。

俺の言葉にどう対応したら良いのか迷っているのかもしれない。

ここは先輩の責任感の強さと曲がった事が大嫌いだという正義感に訴えかける事にした。

「とりあえず、座ってください」

「うん」

渋々と鳳条先輩は席に座り落ち着き無く俺の顔を見ている。

当然だろう、俺は教室ではつきりと先輩の告白を断った。

そんな俺が返事を撤回して恋人にしてくれと言いだしたのだから。とりあえず有無を言わせない様に核心を突く。

「もしも、このまま学院のアイドルの鳳条先輩が学校に来なくなったら俺の立場はどうなると思ってるんですか。俺が先輩の告白を無下に断ったのは既に明陽学院じゃ知らない生徒は1人も居ないはずです。それほど先輩の存在は絶大なんですよ。周りからどんな風に見られても構わないと思って居る俺でさえそんな状況に耐えられ

る自信はありません」

「でも、亀梨君にこれ以上……」

「これは仮契約です。俺は大切な人と酷い別れをしてそれ以来本気で女の子と向き合った事がありません。だからこれから先、鳳条先輩と本気で向き合えるか判りません。その時は煮るなり焼くなり先輩の自由にして構いません」

「恋人ごっこ？」

「そうですね、駄目ですか？」

「駄目じゃないけど……」

先輩の言葉が濁り、畳み掛けるように話を続ける。

「そうでしたね。いくら先輩でも嫌いな相手と責任感だけで恋人の振りをするのは堪えられませんよね」

「嫌いじゃない！ 助けてくれたのが亀梨君だったから驚いただけで。ありがと……」

先輩は再び俯いて泣き出してしまった。

「それじゃ、仮契約成立で良いですね」

先輩は何も言わず小さく頷いてくれた。

何とか先輩を引き止める事は出来たようだった。

これから先の事は誰にも判らない。

クリスマス夜の夜に段ボール箱を覗き込んだ時点で賽は投げられていたのだから。

ガラス張りの壁の向こうでは仕事しながらこちらを伺っているスタッフ達の姿が伺える。

先輩が泣きながら出て行けば学校はおるか店にも居られない羽目になる、そうすれば親父に何をされるか判ったものじゃない。

下手をすれば3年に進級する前に海外の何処かに……

席を立ちガラスのドアを開けて店内に出ると白々しくスタッフが何も無かった様に仕事を始めた。

俺と目が合ったスタッフの顔には苦笑いが浮かんでいる。

そして店内にはファンキーモンキーベイビーの『涙』が流れていた。この店は今でこそ人気が出て高級店みたいなイメージを持たれてしまっているが元々は親父が世界中の洋菓子を気軽に楽しんでもらうと始めた店でカジュアルな店を目指している。

その為にBGMも堅苦しくならないポップな音楽を耳障りじゃない程度に流すようにしていた。

スタッフに声を掛けてケーキと飲み物を用意してもらい自分で持っていく事を告げると手際よく準備してくれた。

先輩の居るガラス張りの部屋に戻ると先輩は泣き止んでいたが俯いたままスンスンと鼻を吸っている。

テーブルにケーキとホットミルクにブラックティーが載ったトレイを置き。

リコッタチーズのタルトを手に取り俯いている先輩の鼻先に近づける。

『ガッチン』

咄嗟にケーキを引くと指なんか食い千切られそうな音がして、クリスマスの夜の様に俺の顔を恨めしそうな瞳で鳳条先輩が見ている。

「意地悪」

「どうぞ、俺の奢りです」

大きな四角い真っ白な皿の上にはドルチェの定番・ティラミスや季節のフルーツが溢れんばかりのタルトにシヨコラッテなど鮮やかなスイーツがならんでいた。

「食べていいの？」

「俺の奢りと言ったはずですよ」

「ありがとう」

鳳条先輩は笑顔になり美味しそうにスイーツをフォークで小さな口に運んでいる。

先輩の言葉どおりスイーツは女の子にとって本当に大切な物らしい。

人狼

鳳条先輩と仮契約を結んだ夜遅く。

俺は小腹が空いてマンションの近くにあるコンビニで買い物をしていた。

「寒！　ちゃんと着替えてくれば良かったかな」

そんな独り言を言いながら改めて自分の格好をみた。

風呂上りで寝る前だったのでグレーのスエット上下に白いアメフト部のロゴ入りベンチコートを羽織っている。

夜空を見上げると都会では珍しく星が瞬いている。

普段より寒いわけた、放射冷却が起きているのだろう。

マンションは眼と鼻の先でコートのポケットに手をつ込んで足早にコンビニを飛び出して緩い坂道を小走りで駆け上がる。

するとクリスマスの夜に鳳条先輩を拾った粗大ゴミが置かれていた街灯の下に人影が見える。

気にせずに通り過ぎようとするといきなり声を掛けられた。

「明陽の亀梨晴海だな」

「誰だ？」

街灯の下に居たのは制服姿の女の子だった。

歳で言えば同じくらいかウルファットで切れ長の目をして整った顔つきをしているが、その瞳は獲物を狙うような光を放っている。

真冬の夜に寒くないのかコートなどは着ていない。

背丈は160と言った所か、しなやかそうなスレンダーな体に有名なデザイナーが手がけた制服を着ている。

今時の女の子らしくスカートを短くしてその下に黒いスパッツのような物を穿いている様だった。

彼女の顔には見覚えが無いがその制服には見覚えがあった。

確か東雲の彼女が通っている姫乃月学園女子の制服が……

そんな事を考えていると彼女がノーモーションでハイキックを放ってきた。

咄嗟に避けると前髪が蹴りの風圧で靡いた。

「うお、危ねえ。いきなり何なんだ？」

「こちらの質問に答える。貴様は明陽の亀梨か？」

躊躇せず人の頭に目掛けて蹴りを繰り出すような人間に教える名前など無いし義理も無い。

かと言ってこのままでは済みそうに無い。

ここは逃げるのがベストな方法だと思い、女の子にする事では無いと思うが持っていたコンビニの袋（中身入り）を彼女に投げつけて走り出した。

それでもアメフトで鍛えた体だ、そう簡単に女の子に追いつけないだろう。

マンションから少し離れた公園まで全力疾走して逃げてきた。

久しぶりに走ったので流石に息が上がる。

息を整えながら水飲み場に向おうとすると背後で砂利を踏みつけた様な音がして背筋に悪寒が走る。

恐る恐る振り返るとそこにはあり得ない事に息一つ上げていない彼女の姿があった。

「マジかよ」

「明陽の亀梨だな」

「だとしたら何なんだ」

「死んでもらう」

言い終わらない内に襲い掛かってきた。

女の子に暴力を振るうなんて事は出来ないが、死ぬ訳にもいかないしこれでも喧嘩に明け暮れた時もあった。

ノーモーションで蹴りを繰り出せるくらいだ、彼女が半端無く鍛えて居るのが判り油断は出来ない。

それに受け止める彼女の蹴りやパンチはどれも信じられないくらい

重かった。

しかし、所詮女の子の力だ、高が知れていた。

蹴り出してきた足首を掴み力任せに振り回すとバランスを崩し尻餅を付くように倒れた。

「誰なんだ。お前」

「死ぬ奴に名乗る名前は無い」

「そんな蹴りで散ると思っっているのか？」

「そうだな、それならば」

彼女から殺気が漲ってくる。

すると犬の様な耳と尻尾が現れ、彼女の両腕は灰色の毛に覆われ鋭い爪が出ていた。

「犬？」

「人狼だ」

鋭く伸びた犬歯が街灯に照らされて不気味に光った。

次の瞬間、内臓を抉られる様な激痛が腹部に走り口から血が噴き出した。

体がくの字に折れ曲がり彼女の拳が俺の腹にめり込んでいる。

彼女の顔には不気味なくらい笑みがこぼれるが息も出来ず指すら動かせない。

俺の体から拳を抜き、彼女が体を回転させ力任せに裏拳が俺の側頭部に叩き込まれた。

視界が歪み数メートルは吹き飛んだのだろう。

自分の体がどうなっているのかさえ判らないような状態だった。

常人だったら最初の一撃で散っていたはずだ。

アメフトで地獄の様な扱きを受けた賜物か、あるいは俺が既に人間では無い所為なのかそんな事はどうでも良い事に思えた。

今、言えることはあれだけの攻撃を受けても何とか息が出来て、首の骨すら折れていないと言う事だった。

しかし、現状は良くなる事は無く体の自由が全く利かず地べたを這いずっている。

そんな俺の髪の毛を掴み上げて彼女は俺の顔を持ち上げた。

「ほう、これでもまだ息があるか。流石、ヴァンプの眷属だな」

「そんなのは関係ねえよ。俺は亀梨晴海だ」

意識が朦朧としてくる。

鳳条先輩の笑顔が頭の中を過ぎった。

俺が散れば彼女は……

ここで散る訳にいかない。

何か得体の知れないものが体の奥から湧き上がって来る。

ドクンと鼓動が跳ね上がった。

片膝を立て立ち上がるうとする髪を引っ張られ前に倒れそうになる。

それを有らん限りの力で堪えると彼女の声が聞こえた。

「死ね！」

彼女が獣の様な右腕を振り上げた。

「ギャン！」

断末魔の様な叫び声を上げたのは俺ではなく彼女だった。

一瞬、何が起きたのか判らない。

判ることは彼女の顔が苦痛に歪み俺の髪をつかんでいた左腕を押えている。

押えている腕が折れているのか指先はだらつとして力がなかった。

「き、貴様。何者だ」

「何度も言わせるな、俺は亀梨晴海だ」

「許さん！ 死ね！」

彼女の右手には何処から取り出したのか親父が良く見ていた昔の映画『ランボー』も真っ青なくらいのサバイバルナイフが握られ、もの凄い形相で向ってくる。

しかし、俺には避ける気力も残っていなかった。

途切れそうな意識の中、自分の影が揺らいでいるのに気づいた。

「やべえ、眼まで掠れてきやがった」

すると影の中からまるで水面から飛び出すように日本刀の刃先が出てきて、人狼の彼女の喉元に切っ先が突きつけられ彼女の動きがピタリと止まった。

思わず顔を上げるとサバイバルナイフの刃先が目の前にあった。

「動くなよ。動けばこの紅雀が貴様を貫くぞ」

その声はクリスマス夜の夜に聞いた冷酷で冷徹な声だった。

影の中から制服姿の漆黒のウェーブが掛かったロングコートが現れる。

彼女だった。

鳳条美雨先輩の夜バージョンとも言うべきか先輩の本当の姿と言え
ばいいのか。

吸い込まれそうな青い瞳が人狼の彼女を見据えている。

「ち、力が増している何故」

「この場で散りたくなければ消えろ」

殺気立っていた人狼の彼女から闘気が消え、同時に風の様に彼女の
姿も消えた。

すると体から力が抜け地べたに倒れ込んだ。

「大丈夫か？」

「散ってはいないみたいですね」

「これを飲め」

そう言うのと黒い鳳条先輩は人差し指を口に含み直ぐに指を俺の口に
つけた。

温かい物が流れ込んでくる。

それが先輩の血である事に直ぐに気づいた。
すると体中の痛みが瞬時に消えるのが判る。

「どうして、痛みが」

「ヴァンプの血には高い治癒能力がある。ハルの体にも同じ力が宿
っているはずだが直接飲んだほうが早い」

「だから、あの攻撃でも散らなかったのか」

「まあ、ハルの身体能力は元々高いようだからな、その所為もある」

「ハル？ 俺の身体能力？ 鳳条先輩」

「おかしいか？ 俺の事はミウと呼べ」

黒い鳳条先輩に戸惑ってしまう。

昼間の鳳条先輩に比べ言葉も男言葉で性格も全く違うようだ。

そこで一つの疑問が浮かんできた。

「鳳条先輩。って痛！」

「ミウと呼べと言ったはずだが」

いきなり刀の柄頭で頭を小突きやがった。

どんなに痛いツツコミだよ、思わず頭を押さえる。

「判りましたミウ先輩」

「先輩はいらん」

再び小突かれた。

頭の形が悪くなる前に北風が吹き抜けている公園から暖房の効いている暖かいマンションに戻り、校舎の屋上で鳳条先輩に言われたとおり夜の鳳条先輩じゃなくミウに少しだけ話をする事にした。

「何か飲みますか？」

「蜂蜜入りホットミルク」

「判りました。直ぐにできますから適当にくつろいでいてください
ね」

あの晩と同じ様にカウンターキッチンでミルクパンに牛乳を入れ火にかける。

そしてポットでお湯を沸かす。

顔を上げるとミウはソファーに深々と腰を降ろしている。

ブラックティーと蜂蜜入りホットミルクが入った2つのマグカップを持ってホットミルクの方をミウの前に置きソファーに腰を降ろするとミウが両手でマグカップを持ちながら美味しそうに蜂蜜入りホットミルクを飲み始めた。

こうしてみると髪と瞳の色以外は鳳条先輩そのものだ。

まあ、どちらも本人なのだろうけど。

「ミウと鳳条先輩は同一人物だよな」

「解離性同一障害のような類ではない記憶も感覚も共有している。表裏一体だ、まあ別人に見えても仕方が無い。それは力を解放している所為だ」

「どうやって力を解放するんだ？」

「うむ、それは感覚だから説明しようがない。何かの拍子に判るようになる」

「曖昧だな。それじゃ力とは何だ」

「ヴァンプは力の大妖と呼ばれている。全ての力が飛躍的にアップする、それは治癒能力さえもだ」

「それでも血を失えば死んでしまうんだろ」

「血さえ失わなければ無敵に近いが弱点もある。ホワイトアッシュの杭を胸に打ち込まれたら終わりだ。それに銀で傷つけると治りが遅くなるし銀を傷つける事も出来ない」

「とりあえず苦手な物だけを聞いておく、俺は半ヴァンプらしいから。」

「で、あの人狼は何なんだ？」

「俺の命を狙う輩だ」

「何で命なんて狙われるんだ」

「俺が人側に居るのが面白くないんだろ」

「それってつまり人の味方と言う事か？」

「まあ、そうだ。現代では我々の様な闇の者は鳴りを潜めて静かに暮らしているが中には人に仇なす者もいる。そう言う輩を排除している」

「何でそんな事を？ 大人しく暮らしていれば襲われる様な事は無いのだろ」

「人間の中にも我々の様な者を排除しようとする人間がいる。そんな人間に幼い頃に捉えられて消される寸前に救ってくれた人間がいるんだ」

「まるで囚われのお姫様を助ける正義のヒーローみたいな奴も居るんだな」

「同い年ぐらいの男の子だった」

「男の子？」

「そうだ、牢屋から出してくれて自由にしてくれた。

「で、その男の子は？」

「その後の事は良く判らない名前も……」

「どうした？」

「いや、その男の子がハルと呼ばれていた気がする」

「まあ、世界中にハルなんて呼ばれる男は有り得ないくらい沢山存在する。それに……」

思わず声を上げながら笑ってしまった。

ミウはポカンとした顔で意味も判らず？マークを量産して俺の顔を見ている。

何で今まで気付かなかったのだろう。

それはクリスマス夜の夜に人ではなくなってから感じていた違和感の理由が判った瞬間だった。

「ハル！ 貴様、私を愚弄する気か？」

「悪い、悪い。そうじゃねえよ。実は俺の左目は光を感じないと言
うか義眼なんだよ」

「……義眼？」

「そう、俺がまだ男の子だった時に何かの爆発事故に巻き込まれて
左目の光を失ったんだ。そして光と共にそれ以前の記憶を無くした。
つまり幼い頃の記憶が無いんだ。でもヴァンプの高い治癒能力の所
為なのか左目に光が戻っている事に今の今気付いたんだ」

「しかし、ハルの左目が義眼だったなんて」

「霧華と菜露以外は誰も知らないよ。それに最先端の義眼だったか
らな光は感じないが普通に動いていたし。怪我の功名ってやつかな」
「そうか、それともう一つだけ私はハルの影に潜む事が出来る。言
い換えればハルの影さえあれば何処にでも現れる事が出来るからな
何かあれば名を呼ぶといい」

「まあ、何も無い事に越した事は無いよ。俺は平和を愛する人間な

んでね。それに鳳条先輩が風呂にでも入っている時に呼び出してみろ。あられもない姿で来られたって困るだろ」

「ば、馬鹿！」

ミウが顔を真っ赤にしている。表裏一体と言うのは本当の事のようだ。

「で、俺に聞いておきたい事は無いのか？」

「あ、そのだな……別に無い。帰る」

そう言いながら俺の影の中にミウは潜って行った。

濁した言葉が気になるが週明けの月曜日に鳳条先輩に聞けばいいくらいに思っていた。

インターセプト

週明けの月曜日。

午後からは晴れの天気予報だったが雲行きが怪しい。

泣き出しそうな雲が掛かり始めている。

駅から明陽学院に向かい歩いていると後ろから腕を掴まれた。

「菜露か？」

「おはよー、晴海」。

「なんでお前がこの時間に登校なんだ？」

「別に良いじゃん。これだけは言っておくけど晴海に会ったためじゃないからね」

そんな事を言うが菜露は真面目で一時限目から授業を取っている事が多い。

菜露の言葉の裏側を読めば俺の取っている講義を逐一チェックしているのだろう。

そうでもない限り俺の登校時に頻繁に出会う事なんて無いはずだ。

「まあいいか」

「ああ、疑っているでしょ。学院のアイドルを振ったろくでなしの癖に」

「あのな、あれは……マジで帰りたくなってきた」

登校中の周りにいる生徒の視線が突き刺さり、その視線には男女問わず今にも暴発しそうな殺気が込められている。

そして校門をくぐるとそこはまさに四面楚歌で陽明学院大学付属高校は一触即発の状態だった。

珍しく菜露が掴む腕に力が籠った。

俺が適当に付き合っていた女にどんなに嫌がらせをされても菜露は俺に纏わり付いてきた。

その度に付き合う振りをしていた女とは速攻で別れたが、そんな菜露が不安になっている。

「晴海、大丈夫なの？」

「菜露に俺に近づくなと言っても無理だろ」

「うん。絶対にそんなの嫌だ」

「それなら誤解を早く解かないとな」

「誤解？」

「ぶちやけると俺から鳳条先輩にお願いした」

「何を？」

「恋人にしてくれって」

俺の言葉を聞き終わらないうちに菜露の絶叫で余計な視線を集めてしまった。

菜露が驚くのも無理は無いだろう、菜露は俺が女の子に本気にならない理由を知っているのだから。

そんな俺が鳳条先輩に恋人にしてくれとお願いしたと言えば驚かない訳が無い。

が、事態はそう上手くいかなかった。

授業の合間に学園中を歩き回って鳳条先輩を探した。

何度と無く姿を見つけ声を掛けようとする俺に気付いたとたん逃げるように…… いや違う。

理由は判らないが完全に俺は俺から逃げている。

そして大教室で待ち伏せをしていると鳳条先輩の親しい友人なのだろうが、怒号の嵐の如く罵声を浴びせられて退散せざるを得なかった。

「マジ凹む。あんな事を言われたら普通の奴なら校舎の屋上から飛び降りるぞ。クソ」

「仕方が無いだろ。今までの酬いだ。で、亀梨は何がしたいんだ一体？」

「鳳条先輩に告った」

「はあ？ お前、俺の目の前で先輩の事を思いつきり振ったじゃないか。それで学院中が大騒ぎになっているんだろ」

「振った後でキスされたのは見ていたよな」

「まあ、衝撃の瞬間その2だな」

「嫌な言い方だがそうだな。その時に周りに聞こえないように呼び出された。それで親父の店に連れて行って話をして了承をもらえた筈だった」

「それなのにか？」

「ビンゴ！」

食事する気にもなれず教室で惚けていた俺を東雲は無理矢理学食に連れて来て、何故だか日替わりランチが目の前に置かれている。

「まあ、とりあえず喰え」

「……」

「喰え」

「わあっ、喰えば良いんだろ」

俺が日替わりランチに箸を着け始めるのを見届けてから東雲は続けた。

「で、どうする気だ？」

「携帯にもかけたが出ない。『放課後に講堂の前で待っている』とメールしても返事が来ない。お手上げだ」

「理由は何なんだ？」

「別れ際に雰囲気がおかしかったからそれを今日再確認しようとしたらこの有様だ。しかし東雲の昼飯は何だ？ カツ丼に天ぷらウドンって食い過ぎだろ」

「これだよ」

いきなり東雲が楕円形のボールを鷲掴みにして俺の目の前に突き出した。

「試合か？ 相変わらず試合前はボールと仲良しかよ」

「俺はワイドレシーバーだからな」

「まあいいや、今はそれどころじゃないし」

東雲は試合前になると験を担ぐ為か片時もアメフトのボールを離さなくなる癖がある。

そんな東雲と顔を突き合わせて食事をしていると悪友達が口々に茶を入れてくる。

立ち上がるうとする東雲に脛を蹴り飛ばされた。

「苛々すんな。自業自得だろう。それに本気なのか先輩の事」

「とりあえず仮契約だ。ちよつと色々あつてな」

「それは俺にも言えない事か？」

「悪い、親友だと思っているからこそ巻き込めない事だ」

「まあ、良い。お前が普通の男だつて判つたからな」

「どう言う意味だ？」

「そう言う意味だ。これ以上聞かない代わりに試合ぐらい見に来い」
曖昧な返事を返すと東雲はそれ以上聞いてこなかったが何故だか顔がにやけて見えた。

聞くなと言えはそれ以上絶対に聞いてこない。

だからこそ東雲だけとは腐れ縁の様に親友で居られるのだと思う。

すると俺のスマートフォンがメールの着信を告げた。

「やつと来たか……」

「どうした？」

鳳条先輩からのメールには曲が添付されていてそれを再生すると曲が始まった。

「nobの『Answer』かあ、絶妙だな」

「クソ！ ふざけるな。俺がインターセプトしてやる」

そう言つて曲を添付して鳳条先輩に送信した。

「おい、インターセプトつて何を送つたんだ？」

「スガシカオの『風なぎ』だ」

「それじゃ完全にタッチダウンだぞ、馬鹿が」

午後の授業が全て終わり溜息を付くと隣に座っていた東雲に首根っこを掴まれた。

「逃げるなよ」

「わあつた。行けばいいんだろ、見るだけだからな」

東雲と校舎を出て少し離れたグラウンドの近くにあるクラブハウスに向っていると東雲が脇を小突いてきた。

「何だ？」

「何だじゃねえよ、講堂の前」

見るとお決まりのナンパイイベントが……それも男3対女1つてあり得ないだろ。

「くだらない事を考えていないで何とかしろ。呼び出したのはお前だろ」

「今、俺があそこに出て行ったらどうなると思う？」

「姫を守る為にナイトが戦い3人を木っ端微塵にして。その後、竜ヶ崎に呼び出されて犠打のギネス記録を更新か」

「お前は菜露か！」

講堂の前でナンパをされているのは栗毛色と言うか不思議な色のウエーブがあるロングコートの鳳条先輩その人で。

先輩をナンパしている3人は明陽学院アメフト部の因縁相手の冥陰高校アメフト部の選手だった。

冥陰高校は悪の巣窟の様な高校と言う噂で有名で講堂の前にはかなりの人数の生徒達が居るが冥陰に恐れをなして遠巻きに見ているだけで、誰一人として鳳条先輩を助けようとする奴は居なかった。

そんな事にお構いなく東雲の持っているボールを奪い取り、足を踏み出してボールを耳の横から一直線に投げ飛ばした。

「散れ！」

「馬鹿、あれは冥陰のレギュラーだぞ」

「遅い！」

東雲が制したが、それより早くボールは鋭く回転しながらナンパをしている学ランの生徒の頭に命中した。

ボールが側頭部に直撃した学ランを着た生徒が頭を押さえながらこちらを伺ってから、3人連れ立って俺と東雲の方に凄い形相で向ってくる。

その後ろで鳳条先輩は今にも泣き出しそんな顔をして立ち尽くして

いた。

そして、様子を伺っていた明陽の生徒達の注目を集める結果になった。

「誰かと思えば明陽ホワイトエンジェルチュウのワイドレシーバーさんじゃないですか？ また、俺らに試合でフルボッコにされたい訳？ ああん？」

「相変わらず大口だけは変らねえな。冥陰ブラックアリゲーターズのワニさん達よ。ボールをぶつけたのはこの俺だ」

「はあ？ 誰かと思えば不幸を呼ぶ男。永久欠番の？ 13じゃねえか」

「へえ、脳みその小さなワニさんに覚えてもらったなんて光栄だな」

「おい、まるで俺達が馬鹿みたいな言い方じゃねえか」

「悪い、悪い。煩惱剥き出しだから煩惱で生きているのかと思っただぜ」

「舐めんなよ、テメエら全員ぶっ潰してやる」

「はぁん。皮剥いでなめしてお前らの墓標代わりにしてやんぜ！」

お互いの顔を突き合わせながら眼の飛ばし合い。

それは喧嘩そのものの挑発だった。

冥陰の3人が真っ赤に焼けた炭の様な顔をして明陽の生徒を蹴散らしながらグラウンドに向かい歩いて行った。

「おい、亀梨。てめえ、これから試合だって言うのに相手に喧嘩売ってどうする」

「どうもしねえよ。返り討ちにすりゃ良いだろうが」

「まさかお前……」

東雲がこの世の終わりの様な顔をして俺の顔を見ている。

「土下座してでも試合に出てやる」

「よっしゃ！ ホワイトエンジェルス完全復活だ！ 俺も一緒に土下座してやる。けど如何するんだ？ あれ」

「知るか！ 躓いて転んで怪我しただけで、逃げ回っている姫様なんか願ひ下げだ。時間が無い東雲行くぞ」

「おい、待てよ！」

鳳条先輩を見る事も無くグラウンドに向かい歩きだすと東雲が慌てて追い掛けてきた。

再始動

亀梨君の優しさがただ嬉しかった。

でもそれは私の覚悟を見抜いたからだと思う何故だか亀梨君には嘘が全く通用しない気がする。

私の覚悟に気付いた亀梨君は一度断った私からの告白を『先輩の恋人にしてください』と言う言葉で受け入れてくれた。

そして自分の気持ちをきちんと私に伝えてくれて、仮契約と言う形で良いのと言う条件付だったけれど。

あれは亀梨君の本心なんだと思う。

それなのに一步を踏み出す前に私の所為で亀梨君は私に瀕死の重傷を負わせた相手に襲われてしまった。

気づくのが早くて直ぐに助けに入る事が出来たけれどももう少し気づくのが遅ければ亀梨君はきっと……

それともう一つ不思議な事が、人狼の左腕が折れていた。

あれは誰が？

もしかして亀梨君が？

本当の事が聞きたい、後悔しないか聞きたい。

でも、出来ずに私はあの場にいるのが怖くなって逃げた。

そして明けなければと思っていた週が明けてしまった。

学院中の至る所で亀梨君が私の告白を断ったって言う話題で持ちきりになっている。

私の中ではどうして良いのか答えが出ないままだった。

亀梨君には嘘が通用しないと思うと彼に会うのが怖くて仕方がなく、携帯が掛かってきてもメールが来ても出る事すら出来ず返事を返す事も出来ないでいる。

それなのに亀梨君が私の事を探し回っているという話をしている友達がいいた。

どうしようもなく亀梨君の姿を見ただけで不安になりまた逃げてしまった。

昼休み。

空には今にも泣きそうな雲が掛かっている。寒い冬の季節には誰も居ない屋上に来ている。

ここは3学期の始業式の日、亀梨君と初めて話をした場所だ。

もう会ってこないよね……　そう思いメールに曲を添付して送ってしまった。

すると直ぐに返事が返って来て見るとメッセージは無く曲が添付されていた。

その曲はとても切ない曲だった。

確か亡くなった友人に送った曲だって聞いた事がある。
涙が溢れてきた。でもそれは哀しい涙じゃなくて……

迷いながらも最初のメールに『放課後に講堂の前で待っている』ってあったとおりに講堂の前に来てみるといきなり他校の生徒3人が声を掛けてきた。

見るからに柄が悪そうで体格も良く取り囲まれてしまい逃げ出す事が出来なくて困っていた。

助けてもらおうと周りを見ると周りに居る生徒達は怖いのか見てみない振りをして遠巻きに見ているだけだった。

用事があるからと言っても引き取ってもらえずに困り果てていると、何処からか凄い勢いで何かが飛んできて1人の男の側頭部に直撃して地面に転がった。

それはラグビーかアメリカンフットボールの楕円形のボールで飛んできたほうを見ると亀梨君と亀梨君の親友の東雲君の2人が立っていた。

「もしかして亀梨君が……」

そう思うと涙が再び溢れそうになる。

今ここで泣いてしまったら決定打になってしまう、そう思って必死

に我慢した。

私に声を掛けてきた3人の他校の生徒は亀梨君と東雲君の所にもの凄いい顔をして向っていき、まるで大リーグとかで審判と選手が顔を突き合わせて怒鳴りと合っている様に挑発し合っている。

「誰かと思えば明陽ホワイトエンジェルチュウのワイドレシーバーさんじゃないですか？ また、俺らにフルボッコにされたい訳？ ああん？」

「相変わらず大口だけは変らねえな。冥陰ブラックアリゲーターズのワニさん達よ。ボールをぶつけたのはこの俺だ」

「はあ？ 誰かと思えば不幸を呼ぶ永久欠番の？ 13じゃねえか」

「へえ、脳みその小さなワニさんに覚えてもらったなんて光栄だな」

「おい、まるで俺達が馬鹿みたいな言い方じゃねえか」

「悪い、悪い。煩惱剥き出しだから煩惱で生きているのかと思っただぜ」

「舐めんなよ、テメエら全員ぶっ潰してやる」

「はぁん。皮剥いでなめしてお前らの墓標代わりにしてやんぜ！」

どうも他校の3人はアメリカンフットボール部の選手だったみたい。真ッ赤になって怒りながらグラウンドの方に歩いていくと亀梨君が中指を立てている。

すると今度は東雲君が亀梨君に食って掛かっている。

「おい、亀梨。てめえ、これから試合だって言うのに相手に喧嘩売ってどうする」

「どうもしねえよ。返り討ちにすりゃ良いだろうが」

「まさかお前……」

「土下座してでも試合に出てやる」

「よっしゃ！ ホワイトエンジェルス完全復活だ！ 俺も一緒に土下座してやる。けど如何するんだ？ あれ」

「知るか！ 躓いて転んで怪我しただけで、逃げ回っている姫様なんか願い下げだ。時間が無い東雲行くぞ」

亀梨君の言葉に一喜一憂している自分がいた。

そして私は亀梨君の『躓いて転んで怪我しただけで、逃げ回っている姫様なんか願い下げだ』と言う言葉で再び戸惑ってしまった。あんなに酷い目に遭ったのにそれを躓いて転んだ怪我だって言うてくれる。

逃げ回っている私の事を姫様だつて言ってくれる。

でも語気は突き放すように荒っぽい。

動けないでいると亀梨君はグラウンドの方に大股で歩いて行ってしまう、その後を東雲君が追い掛けて行ってしまった。

「おい、聞いたか亀梨がアメフト復活だつてよ」

「ねえ、今のつてどう言う意味？」

「すげー、試合が見られるぞ」

「うわぁ、本人が居るじゃん！」

周りに居た生徒達は口々に色々な事を叫びながら、まるで蜘蛛の子を散らす様に慌てふためいて走り出している。

「どうしよう……」

「あれ？ 鳳条先輩。こんな所でどうしたんですか？」

そんな状況の中にひよつこりと茶髪でショートボブの3年生からも人気があるけど、竜ヶ崎先生の義理の妹と言っただけで誰も声をかける事すら出来ない。

亀梨君と仲が言い朝香菜露さんが見慣れないジャージ姿で声を掛けてきた。

「朝香さんこそどうしたの、そんな格好して？」

「えっ？ これですか実は私アメフト部のマネージャーをしているんです。今日は試合があるんですよ」

「らしいわね。亀梨君と東雲君がそんな話をしていたわ」

「ふええ、晴海に会ったんですか？ 先輩」

「会ったと言うか……」

「で、晴海とどうなったんですか？ 付き合うんですか？」

朝香さんとは始めて話をするけど皆から人気があるとおりとても可

愛らしい女の子だと思う、そんな事を考えているいきなり核心を突かれて戸惑ってしまった。

「その、まだ話出来なくなつて。亀梨君が試合に出てやるってグラウンドに向かつてしまつて」

「ふええええ！ 晴海が試合に出るって…… それで皆が大騒ぎしていたんだ。大変だ、今日の試合は大荒れになるか没収試合になつちゃう。急がなきゃ、先輩も一緒に来てください」

「ええ、どうして没収試合になってしまうの？」

「アメフト部の顧問は私のお義姉ちゃんの竜ヶ崎先生だからです」いきなり朝香さんに手を掴まれ、問答無用で朝香さんが慌てて走り出し私も一緒にグラウンドに行く羽目になつてしまった。

竜ヶ崎先生は亀梨君がお目付け役と言つていたけれどどう意味なのか判りかねていた。

親代わりに近いものだと思うんだけど。

それに竜ヶ崎先生は学院では超が付くほど厳しくって有名で曲がつた事が大嫌いな先生だった。

朝香さんに引き摺られる様にグラウンドに着くと黒地に白いナンバーがあるユニフォームを着た相手チームがウォームアップしている。明陽学院のベンチ前には竜ヶ崎先生がいつもの黒いスーツ姿で腕を組んで仁王立ちしていて。

その前で真っ白なユニフォームに空色に金色の縁取りで13と21のナンバーがある2人の選手が深々と頭を下げている。

ナンバー13が亀梨君で恐らく21が東雲君だ。

「遅れてすいませんでした」

「ナンバー13は永久欠番だ。絶対に試合には出さん！」

朝香さんが竜ヶ崎先生に向い頭を下げ遅れた事を謝ると、竜ヶ崎先生は気づいていないのか亀梨君と東雲君を怒鳴り飛ばす声がグラウンドにまで響き渡った。

そして先生は朝香さんを一瞥して横にいる私の事を真っ直ぐに見て

いる。

「また台風の目は亀梨か」

「竜ヶ崎先生、亀梨君は何も悪くありません」

「ほお、鳳条。と言う風風の吹き回しだ。お前、こいつに振られたんじゃないのか？」

「違います、ちよつと行き違いがあつて」

「まあいい。今回は特例だ。が負けは許さん、ワニ革の墓標をおつ立てて来い。いいな」

「「アイ・ショーティー！」」

不思議な事に私の顔を見た後の竜ヶ崎先生の顔から怒気は感じ取れず穏やかな瞳になっていた。

そして試合に出る事の下承を得た亀梨君と東雲君は拳を突き合わせヘルメットを被り、ウォームアップする為にグラウンドに駆け出した。

それを合図のように明陽ホワイトエンジェルの選手たちもグラウンドに走り出しオフENSEの選手は感覚を確かめながらボールを投げ合っている、ディフェンスの選手は柔軟をしてウォームアップを始めた。

朝香さんは既にベンチに座りクリップボードとファイルボードを見ながらメモを取るのに集中している。
すると竜ヶ崎先生が声を掛けてきた。

「まあ、鳳条も座れ」

「は、はい」

先生が朝香さんの横に少し離れて座り私も先生に促されて先生の隣に座ると先生は腕を組んで真っ直ぐグラウンドを見ながら口を開いた。

「お前、本当に亀梨と付き合う気なのか？」

「え？ どうして先生がそんな事を気にするんですか？」

「亀梨から俺とあいつの事をと言う風に聞いている」

「竜ヶ崎先生は亀梨君のお目付け役の様な人だつて」

「あいつの父親が不在の時の世話役の様なものだ。特に何をしてやる訳でもないからお目付け役と言われても仕方が無いがな」

「あの、亀梨君のお母さんつて」

「それは本人に聞いてくれ。俺の口から言えることは何も無いし本人に聞くのが一番良い事だと俺は思うが。菜露の事は少し話しておこう。菜露は俺の親友だった奴の娘だ、先の震災で孤児になってしまい俺が引き取った」

「そうだったんですか。それで義理の妹なんですね、それと亀梨君と……」

「菜露と亀梨は兄と妹の様な関係だ、恋愛感情は無いとは言わないが俺が認めん。それにあいつの噂は知っているだろう」

「知っています。女の子と真剣に付き合った事が無いって本人から聞きました」

「それでも付き合おうと？」

「亀梨君が言ってくれたんです。それでも良いなら付き合おうって」

「ほお、あいつがね」

私と話していても竜ヶ崎先生は無表情で淡々としている。

怒っている所は何度も見た事があるけれど笑った顔を見た事が一度も無い。

一瞬、先生の顔が驚いて私に視線を移して直ぐにグラウンドに視線を戻してしまった。

でも、そんな先生の顔を始めてみた。

グラウンドでは両校のウォームアップが終わったみたいだ。

審判が選手を集めているのが見えた。

「先生、始まりますよ」

「そうだな」

「あの、先生。もし負けた時はどうするんですか？」

「負ける理由が無い」

朝香さんが竜ヶ崎先生に声を掛け試合が始まる事を合図する。

負ける理由が無いと言い切ったその意味が知りたかった。

「なんで負けないんですか？」

「鳳条はホワイトエンジェルスとの試合を見た事が無いのか？」

「一度だけ見た事があります。確か亀梨君が試合に出ていた最後の試合です」

「天使の仮面をつけた悪魔や白き悪魔・ブリザード。それが亀梨の2つ名だ。アグレッシブなんて攻撃じゃない。一番敵に回したくないプレーヤーだ」

「だから負けないんですか？ でも私が見た試合は」

「その試合は追悼試合の様なものだったからな」

「追悼試合ですか？」

「そうだ。亀梨が出た最後の試合はあいつが1年の時の春季大会の予選だ。震災からちょうど1年目、菜露もあいつも震災で大切な人を失っている。そんな試合に怪我人を出す訳に行かないのでな、俺がハードなプレーは禁じた。が今日はどうか、久しぶりにあいつの冷酷な目を見た」

グラウンドではコイントスがおこなわれキックかレシーブとサイドを決めている。

竜ヶ崎先生が私に投げ込んだ爆弾で胸が締め付けられた。

亀梨君が震災で大切な人をなくしていたなんて、それじゃ亀梨君が言っていた『大切な人と酷い別れ』って……

再びグラウンドに目を向けるとありえない事が起きていた。

コイントスで選択権を勝ち取ったのにキックを選択している、レシーブつまり攻撃権を取るのが定石だと言うのに亀梨君が自陣35ヤードでキックの準備をしている。

「うわあ、先生」

「あの馬鹿、やる気だ」

「何をですか？」

「ガチで喧嘩だ。菜露、保険医に連絡して来い」

「は、はい！」

朝香さんが竜ヶ崎先生の指示で校舎に向かい走り出した。すると亀梨君がキックしたボールが天高く舞った。

ブラックアリゲーターズの選手がボールを自陣深くでキャッチして一気に敵陣に向かいリターンする。

あつという間にタックルされホイッスルがなりアリゲーターズのオフエンス（攻撃）が始まる。

アリゲーターズの選手が自陣でハドルを組んでいる。

エンジェルスはなんだか生き生きとして楽しそうだ。

そこに校医に連絡に行っていた朝香さんが息を切らしながら戻って来た。

「朝香、遅いぞ」

「すいません、皆に捕まってしまつて」

「それでこの祭り騒ぎなのか」

「うう、あれは私の責任じゃありません」

見るとフィールドの周りには明陽の生徒が沢山集まっていて中にはプラスバンドまでいる。

するとラインバッカーの位置に居る亀梨君が人差し指を突き出し天高く掲げる。

今にも泣き出しそうだった雲の隙間から日が指し天使の梯子が舞い降りる。

すると曲が流れ始めた。

「この曲、聞いた事がある」

「チャゲ&飛鳥の『Y a h Y a h Y a h ! !』だ。鳳条、亀梨と何があつた」

「あの、私が冥陰の選手に絡まれているのを亀梨君が……」

「鳳条絡みだと思っていたが早まつたか」

「どう言う意味ですか？」

「あの曲は相手に対しての宣戦布告の合図だ。可哀想に」

「可哀想？」

先生はそのまま何も言わずにフィールド上に冷たい視線を落としている、朝香さんは試合の流れを食い入る様に見ていて話しかけられる雰囲気じゃなかった。

フィールド上ではスクリメージラインを挟んで睨みあう様に両チームが陣形を組んでいる。

アリゲーターズの選手がスナップつまり地面に置いたボールをクォーターバックに渡して試合が始まる。

ライニングバックがクォーターバックからボールを受け取り走りだしオフエンシブラインとディフェンシブラインが激しくぶつかる。アイゲーターズのランニングバックが隙を突いて前へと突進する。

「嵌ったな」

竜ヶ崎先生の呟きと同時に歓声上がる。

フィールドでは3ヤードぐらい攻め込まれた場所でランニングバックがタックルされて倒れている。

タックルで止めたのは？13の亀梨君だった。

「先生、嵌ったって何にですか？」

「鳳条はアメフトをどのくらい知っているんだ」

「攻撃側は4回のプレーを行う権利つまりダウンを与えられて4回のダウンで10ヤード以上進めば再びファーストダウンを与えられ攻撃を続ける事が出来て、10ヤード進む事が出来なければ攻守交替になり4回のダウンをシリーズと言う。それと得点をしてでも攻守交替ですよね」

「そうだ。まあ百聞は一見にしかずだ」

セカンドダウンも同じ様に亀梨君がランニングバックを押さえ込んで止めている。

そしてサードダウンが始まりある事に気づいた。

相手のセンターがスナップした瞬間にエンジェルススのディフェンスが僅かにずれ隙が生まれる。

そこに相手のライニングバックが前へと隙を突くように走り出す。そして3ヤード弱進んだ所で亀梨君に止められている。

「もしかして罠……」

「気づいたか、相手チームも気づいている。次はパスで来るぞ」

竜ヶ崎先生の言うとおりフォースダウンはアリゲーターズのクォーターバックがワイドレシーバーにパスを出した。

少しだけボールが高い。

そこにいつの間にかアウトサイドに居た亀梨君が走りこむ。

「インターセプト？」

「違うな、そんな生易しい物じゃない」

先生の言葉どおりワイドレシーバーが全身を使いボールをキャッチした瞬間に吹き飛んだ。

もちろん吹き飛ばしたのは亀梨君だった。

「可哀想に」

「痛そう」

「アメフトは格闘技とは言え亀梨の当たりは防具なんて無意味だからな」

「それでもフォースダウンを奪われちゃったんですよ」

「裏を返せばもう4回、相手を叩きのめす事が出来るということだ。それに適度にヤードを稼がせてやればバントされることも無いからな」

バントとはフォースダウンで10ヤードまで届きそうに無い時にするプレーで、ボールを地面に付けることなく蹴ることで攻撃権を失う代償にボールを遠くに進める事ができ、相手チームの陣地深くからつまり攻撃に不利な位置から開始させる為におこなうプレーの一つだった。

第2クォーターもサイドが変わっただけで似た様な感じで両チームとも得点に結びつける事が出来ないでいる。

でもハーフタイムのベンチの雰囲気は全く違う物になっている。

アリゲーターズのベンチは意気消沈と言うか満身創痍といえは良いのだろうか、それでも負けじと眼光だけは鋭くこちらを伺っている。相対するエンジェルスは笑顔が零れるような事は無いが何処と無く

余裕が感じられる。

そして亀梨君に話しかけようと立ち上がると竜ヶ崎先生に腕をつかまれた。

「試合の邪魔をするな」

「でも、声を掛けるくらい」

「冷たい目で一瞥されるか無視されるかのどちらかだ」

朝香さんを見ると大きく頷いている。

試合が終わってから話しかけるしかなさそうだ。

大人しく腰を降ろして後半戦を見る事にする。

後半の第3クォーターはアリゲーターズのキックオフつまりエンジェルスの攻撃から始まる。

ボールが高く舞い上がり？21の東雲君がキャッチしてリターンするとあつという間に相手陣地に切れ込んでいく。

「凄い、東雲君もあんなに早いんだ」

「晴海が抜けた穴を東雲さんが埋めていたんだけど、そこをピンポイントで狙われて潰される事が多かったの。でも今日は晴海がいるから存分に東雲さんも暴れまわれるんだよ」

「そうだったんだ」

朝香さんの説明で冥陰ブラックアリゲーターズの人が東雲君に言っていた『フルボッコ』の言葉の意味が判った気がした。
でもそれって……

「もしかして冥陰ブラックアリゲーターズって」

「柄は悪いが試合に関しては基本に忠実で手本としているチームも多い。弱い所を突くのは常套手段だからな。だが亀梨の身体能力と計算高い頭脳プレー加わったエンジェルスの敵じゃない」

「でも、未だ点が」

「時間の問題だ」

竜ヶ崎先生の言うとおり時間の問題だった。

サイドダウンでクォーターバックからボールを受け取ったランニングバックの亀梨君が敵陣に切り込む。

それはまるで風の様だった。

相手のディフェンダーの間をすり抜け瞬く間にエンドゾーンにタッチダウンしている。

「速い！ 始めて見た」

「亀梨より足だけなら速い奴はいくらでもいる。中には光速のライニングバックなんて呼ばれている奴もな。だが亀梨のバランス感覚はずば抜けている。それにあの速さに鍛えぬいた体でタックルされてみる」

「骨までつて奴ですか？」

「体の芯まで震え上がるだろ。それ故に白き悪魔・ブリザードなんて呼ばれている。亀梨は全てにおいて計算高く何処までも腹黒いが、鳳条はそれでも付き合うつもりなのか」

「私は亀梨君に助けられたんです。計算高くって腹黒い人が何も考えずに人を助けたり出来るんですか？」

「敢えて言えばあいつは震災で地獄を見たからとしか言えないな。昨今では人が散りそうでも見てみない振りをする輩が多い。だがあれだけの地獄を見れば、もしくは持つて生まれた資質か」

「資質ですか？」

「この話はここまでだ。最後のプレーが始まるぞ」

竜ヶ崎先生はこれ以上話をする気は無いみたいだった。

それでも『資質』と言った竜ヶ崎先生の瞳は何処と無く遠くを見て哀しそうだった。

フィールドではエンジェルスの内陣でアリゲーターズが一矢報いようと攻撃についているけどあつという間だった。

体の芯まで響くタックルを繰り返されればその痛みを体が覚えていく。

そしてパスプレーに出ようと相手クォーターバックがボールを構えているけどエンジェルスのディフェンスは戸惑うワイドレシーバーを完璧にブロックしている。

クォーターバックの些細な躊躇いが仇となり、その隙を見逃さず亀

梨君のタツクルを受けて地面に転がった。

「わあ！ クォーターバックサックだ！」

「クォーターバックサック？」

「そうそう、やっぱり晴海は凄いや」

クォーターバックサックはパスプレーをしようとしたクォーターバックがディフェンスに潰される事を言うらしい。

何でも『アメフトには2種類のヒーローがいてクォーターバックとクォーターバックを叩きのめす奴だ』なんて言葉があるくらいにインターセプトと並んでディフェンスにとって勲章みたいなものでって朝香さんが説明してくれた。

「朝香さんもアメフトが好きなんだね」

「うん、アメフトをしている晴海を見るのが大好き。でも今はちょっと寂しいかな」

「何で亀梨君は辞めちゃったの？ それも永久欠番なんて」

「それは……」

朝香さんの瞳が大きく揺れて戸惑っているとき、竜ヶ崎先生が説明し始めた。

「一応、部に所属はしているがな。亀梨と東雲がアメフトを始めたのは東雲の幼馴染の夢だったからだ」

「東雲君の幼馴染ですか？」

ゆきみやつきね

「ああ、名を雪宮月音と言って。あいつ等2人と同じ年で同じ中学だった。その中学で東雲と亀梨と約束をした。高校に行ったらアメフト部に2人は入部して雪宮はマネージャーになる事を。だがその約束は果たせなかった。雪宮はあの震災で帰らない人になり、それでも東雲と亀梨は約束を守る為にアメフト部に入部した」

「もしかして」

「鳳条が考えている通り、亀梨の恋人になるはずだった。お前が見た最後の試合の後で雪宮の事を面白おかしく言われ亀梨はそいつ等を病院送りにした。試合に出せない理由が判るな」

「そうだったんですね。そんな事が」

「それと学院の近くにある、鳴らずの教会は亀梨にとって鬼門だ。近づかない事だな」

「それって」

「雪宮月音が眠っているんだ。俺は報告があるので、ここまでだ」それだけ言って竜ヶ崎先生は試合の結果を待たずに、ベンチから表情一つ変えずに校舎の方に歩いて行ってしまう。

鳴らずの教会はこの界限に住んでいれば知らない人はいないくらいの教会で、真つ白の壁に赤い屋根が良く似合っていて空まで届きそうな高い鐘楼があるとても綺麗な教会で、その鐘は音を奏でなかった。

鳴らない理由は知らないけれど鐘が鳴らないだけで不吉な場所として噂されていた。

何だか亀梨君と付き合うと言われていた気がする。

ただでさえ決められずに迷っている心の渦がさらに大きくなっている。

試合の方はワンサイドゲームで明陽ホワイต์エンジェルスの大勝で終わった。

ヘルメットを外して選手の皆がベンチに向って歩いてくる。

防具の上にユニフォームを着ているので皆が凄く大きく見える。

中でも亀梨君と東雲君は際立っている。

色々な事が頭の中を駆け巡り怖くなりこの場から離れようと立ち上がると朝香さんが私の手を掴んだ。

「鳳条先輩、逃げないで。お願いだから逃げないで、私じゃ閉ざしてしまつた晴海の心を開く事は出来ないの。だからお願い、逃げる様な事だけはしないで。私も2人を応援したいから」

「朝香さん？」

「ほら、晴海にお疲れ様つてタオルを渡してあげて。ね」

瞳に涙を浮かべて満面の笑みをして朝香さんが私の顔を見上げている。

竜ヶ崎先生が言っていた震災の地獄の中に朝香さん自身も居たんだ。

そう思うと逃げる事など出来なくなってしまった。

そんな彼女が自分の気持ちを押し殺してまで私を応援すると言ってくれた。

先ほどまで渦巻いていた心の海が静かになっていく。

すると亀梨君が真剣な顔で真っ直ぐに私の方に歩いてきた。

何かを射抜くような視線が怖くなり思わず俯いてしまう。

亀梨君が私の前に立っているのが判り声を掛けた。

「あの、タオ……」

勇気を振り絞って顔を上げると亀梨君の顔が降ってきて口を塞がれてしまった。

何が起こったのか判らずパニックになりタオルを握り締めた手で亀梨君の体を弾こうとすると、頭の後ろに亀梨君が手を回して身動きが取れなくなってしまう。

こ、これってキスされているの？

それも周りには明陽ホワイトエンジェルス of 圧勝に酔いしれているギャラリーが沢山いる目の前で。

全身から力が抜けて持っていたタオルが手から落ちると、同時に亀梨君が離れていく。

「うひょ！ 衝撃の瞬間その3か！」

「バーカ、行くぞ」

東雲君のそんな言葉がはるか彼方から聞こえてきて亀梨君は東雲君とクラブハウスの方に歩いていってしまった。驚きと悲鳴に似たどよめきがフィールドに響き渡り。

いつの間にか雲ひとつ無くなっている青空に吸い込まれていく。

私の耳元に『頂きました』の言葉を残して。

ホットケーキ

「何も変らないな」

「変っただろう。女子のみならず男子まで敵に回して、何故か1年の女子に人気が出たと」

「んな事をメモンな」

「ほら今日も来てるぞ」

外はうす曇で少し寒い、週の真ん中で中弛み。

特に月曜に何の準備もなくアメフトの試合に強行出場したので特に体がだるい。

そんな水曜日に学食で東雲と食事していると入り口からこちらを伺う1年生の女子の顔がいくつも交互に見える。

そして……

「不幸を呼ぶ男の所為で俺達には彼女が……」

一年生らしき男子の数人が急に泣きながら学食を飛び出して行く。

お前等に彼女が出来ないのはその性格の所為だと思う。

が言葉にはしない、何故なら平和を愛する人間は争いを好まないから。

「その争いを好まない平和主義者の亀梨君は愛しい先輩が絡まれているのを助け、相手を試合でフルボッコにする訳だ」

「ルール違反は一切していない、その証拠に試合はきちんと終わった。微妙な言葉があるがスルーする。ただのタツクルだろ」

「ただのタツクルね。あんなタツクルをまともに喰らったら腹が干切れるぞ」

「まあ、俺はあれ以上のパンチを受けた事があるけどね」

「はあ？ パンチ？」

「ああ、レバーやらマメやマルチョウにテツチャンがグチャグチャのミンチなりそうなパンチだ」

「亀梨、お前。俺が何を食べているか判っていて言っているだろう」

「あは、悪い。血が滴り落ちそうな焼肉定食か上手そうだな」

「鬼！ 悪魔！ 滴り落ちているのはタレだ。焼肉のタレ！ 気分が悪くなってきた」

「でも、食うんだろ」

「当然だ、『食べ物を粗末にするな』が我が東雲家の家訓だ」

アメフトの試合があつたのが何故か月曜日で東雲に後から聞いたが先方の都合だと言われた。

あんな事やそんな事、つまり俺がかなりの生徒の前で鳳条先輩にキスをして恋人宣言をしたにも拘らず。

俺を見る視線は相変わらずだった。

良い意味でも悪い意味でも注目を浴びてしまい、噂でしか俺の事を知らなかった1年の女子は興味津々で俺が何処に行っても必ず現れて閉口していた。

「何で俺なんだ？」

「久しぶりだからな。亀梨がアメフトの試合に出るの、だからだろう。あれだけ活躍すればヒーローだよ。それに試合に出た理由が理由だからな。学園のアイドルの貞操を守る為、噂でしか知らなかった1年にしてみれば目から鱗だろ」

「で、真実を知っている2年や3年からは目の敵で、1年の女子を奪われたと思っている男子は泣き出したと。俺の知る由もない事だな」

「お前が全てだろうが」

「ここ、空いているかしら」

「ご自由にどうぞって、うわぁ。鳳条先輩」

「東雲の横も空いていますよ」

「ハル君、酷い。恋人にそう言うこと言うんだ」

東雲が焼肉定食の載ったトレーをずらそうとして引っくり返しそうなくらい驚いている。

俺の横には栗毛色と言うか不思議な色のウェーブがあるロングコートの小動物もとい鳳条先輩が立っていて椅子を引いて俺の横に腰掛

けた。

変った事と言えば俺の呼び名がいつの間にか亀梨君からハル君に変わった。

「もう、いつの間にかじゃないもん。恋人宣言してからです」

「おっしやるとおりです」

「意地悪。でも何の話をしていたの？ 貞操をどうって」

「あはは、こいつが鳳条先輩の貞操を守る為にアメフトの試合に出たって言う話です」

「なあんだ。ハル君にならいつでも私の貞操なんてあげるのに、だって私の始めては全部ハル君だもの」

思わず食べかけていた日替わり定食のから揚げを喉に詰まらす寸前になった。

東雲に到っては完全にフリーズしている。

「NGワード連発だな」

「本当の事だからキスも……」

これ以上はNGワードじゃ済まないと思って、から揚げを鳳条先輩の小さな口に突っ込んで睨み付けた。

周りではただでさえ目立つ俺と東雲なのに先輩の登場で更に視線を集め聞き耳を立てている輩が周りを取り囲んでいる。

そんな状態で俺が辺りを見渡すと急に素知らぬ顔をして食事を再開したり話をし始めた。

「それ以上先輩が暴走するなら俺はどうすれば良いんだ？」

「モキュ、モキュ」

「あのかな、食べるか喋るかどちらかにしろ」

先輩が口を動かしゴックンとここまで聞こえそうな音がした。

「ハル君がから揚げを突っ込んだんでしょ。ハル君と2人の秘密の事なんて誰にも話しません」

「それが余計な事なんだ」

「それに未だに私の事を鳳条先輩って他人行儀な呼び名で呼ぶし」

「わあた。前向きに善処します」

どう足掻いても先輩に勝てる気などせず、それに俺に対する視線もある意味この先輩が原因だと言うのもあるのだろうが、そんな事を言えばどつぼにはまる事間違いないだろう。

早々に食事を済ませ退散する事にしよう。

「ご馳走様でした」

「うわぁ、女の子が食事しているのに先に行っちゃうんだ」
「……………」

再び突き刺さるような視線を浴びせられそんな事を言われ、仕方なく石像の様な東雲を放置して鳳条先輩が持参している小さな弁当を食べ終わるのを待つ事にする。

しばらくすると先輩が弁当箱と箸を可愛いポーチに仕舞い両手を合わせた。

「頂きました。そんなに私の顔を見ても何も面白くないでしょ」

「いや、可愛いなと思って」

瞬時に先輩の顔が真っ赤になる。

時々はこんな軽いジャブ程度の仕返しも許されるだろう。

そして待ちに待った金曜日が……

一通のメールで砕け散った。

『晴海 夕方 店』

って、それだけかよ。句読点すら無く何かの連想ゲームを彷彿とさせる。

クソ親父、理由なり経緯を書け、そして俺に敬意を持て。

今までの親父がしてきた事から考えると文面どおりに夕方に顔を出して何度となく酷い目にあつた事がある。

ここは早めに店に行った方が得策だと考える。

それに金曜はなるべく早い時間に帰れるように講義を取っているの
で午後の講義を飛ばせば昼には帰れる。

ここで問題が一つだけ、メールで解決する事にした。

『先輩、ゴメン。急用で、昼で抜けます。晴海』

昼飯は学食か購買で済ませている、購買で買ったにしても外は寒いので学食で食べる事になる。

すると必然的に鳳条先輩と会う事になるので連絡をしておかないと何をされるか判ったものじゃない。

メールを送信するとしばらくして返事が返ってきた。

『判ったわ。私に1人でお弁当を食べると言うのね』
判っていない様だった。

『今日は本当に申し訳ないが店を手伝いに行く。』

『了承しました。うふふ』

速攻で返事が返ってくる。『うふふ』の意味が知りたい。
嫌な予感がするが放置と決め込んだ。

東雲には一応声を掛けてから午前中最後の講義を受けて速やかに教室を後にする。

「ああ、またサボるんだ。お義姉ちゃんに言ってる」

「はあゝ 何で菜露がここに居るんだ？」

「だって今まで隣の教室で授業だったんだもん」

「そうか、それじゃ午後もお腹が一杯になって眠らないように授業を真面目に受けるんだぞ。俺は親父に呼び出されたから午後の授業は飛ばすからな」

「あつそ、鳳条先輩にはもちろん連絡済みなんですよ」

「そう言うことだ。急ぐからじゃな」

歩き始めて振り向くと菜露が拗ねた様な目をして小さな手を振っていた。

「で、何で2人がここに居るんだ？」

明陽学院大学付属高等学校の校門を急ぎ足で出た瞬間に両脇から飛び出してきた2匹の小動物によって腕をがっちりとホールドされてしまった。

これが黒ずくめの太男なら完全に拉致られていただろう。

ここで不思議な事が……

鳳条先輩は学食に向うのを飛ばして待ち構えていたのだろう。

しかし、菜露は俺と別れてどう言うルートで先回りしたのだろう。そのうえに息一つ切らしていない。

クリスマスから色々な事と出会いがあり一つの仮説が浮かんだが止めておこう。

そんなはずは無いのだから、多分。

そして小動物2匹に拉致られながら駅に向う羽目になった。

並木道沿いのガラス張りの『スイーツ&カフェ Nero e bianco』の前には、相変わらずの行列が夕方ほどではないが出来ている。

「出入り口の近くで待っていてくれ。スタッフに呼びに行かせるから」

「えっ、ハル君はどこに行くの？」

「裏口だよ、今日は仕事だからな」

そう二人に告げてガラス張りの店舗の脇にある通路に向かう。

着替えを済ませ店内に出るとチーフが俺の顔をみるなり声をかけてきた。

「代理、お二人をミーティングルームにご案内しておきました」

「ありがとう」

「駄目ですよ。寒空の下で女の子を待たせたら」

「女の子？ あれは二匹とも小動物のジャンガリアンみたいなもんですよ」

「もう、代理たら」

菜露はこの店の常連だし俺が時々連れてくるので（色々と手を打つ為）チーフとは仲がよかった。

それで菜露の姿を見かけてチーフが声をかけてミーティングルームに案内したことが容易に分かった。

先に親父が呼び出した理由を聞き判る範囲で指示を出す。

それが的確な指示なのかは自分自身では判断しづらけれど今まで

もこうして店を動かしてきた。

それはある程度の経験から言えることで親父の修行につき合わされていた俺にはそれなりの味覚が備わっていたし、基本的なことは親父から叩き込まれている。

その為にレシピを見ればパティシエと話をしながら話をして作業を進める事が可能だった。

高校生なんかには思うかもしれないが親父の店の皆は俺の事をとてても可愛がりそして信頼してくれている。

色々な話をしているとかれこれ1時間が過ぎていく。

話でこれならば試行錯誤を繰り返しながらしていたら直ぐに2〜3時間は過ぎてしまう。

それ故に早めに店に来ることが必要だった。

まあ、親父がきちんと店に居れば俺など必要も無く無駄な時間だといつも思う。

そして話が終わる頃合を見てチーフが親父の言付けを伝えてきた。

「……という事です。週末にお願いして宜しいのでしょうか？」

「はあ、この時期に何でもっと寒い所に……了承しました。行つて来ます」

身内である親父ならけんもほろろに蹴散らしていただろう。

それを判っていてチーフに伝言を頼んだのが良くわかる。

もしかして今日も……深読みはやめよう。

ジャンガリアンの2匹が頬を膨らませているのが直ぐに頭に浮かび、チーフにホットミルクを二つ頼んだ。

巷ではVIPルームなどと呼ばれているミーティングルームに行くと、2匹のジャンガリアンは退屈と待ち惚けを盛大に詰めた頬袋を膨らませていた。

「お二人のそのほっぺには何が入っているんですか？」

「晴海のおたんこなす。人でなし」

「だってハル君が」

「あの一言だけ言っておきます。勝手に付いて来たと言うか拉致してきたのはお二人ですからね」

菜露は俺の言葉に無言で頬を膨らませたまま眼で訴えてテーブルに顎を載せて力尽きたジャンガリアンその物だった。

「晴海、ケーキは？」

「ご自由にどうぞ」

「うう、今月はお小遣いがピンチなの」

「また、無駄遣いしたんだろ」

「だって、晴海が遊んでくれないんだもん」

「その腹いせに無駄遣いをしたと？」

「しょうがないじゃん。可愛い小物を見つけたんだから」

可愛い小物つまり自分と同じような可愛いファンシーグッズが菜露は大好きで、霧華からもらっている毎月の小遣いはほとんどがスイーツかファンシーグッズに化けていた。

「美雨先輩？ どうしたんですか？」

「ふええ！ み、美雨先輩って呼んだ？」

「前向きに善処してみましたがいけませんでしたか？」

フルフルと先輩ジャンガリアンが身震いする様に首を横に振っている。

「でも、その格好って……」

「あ、先輩は初めてなんだ。晴海のパティシエ姿見るの」

「う、うん。なんだか別人みたい」

「まあ、晴海は何を着せても似合うしね、ハーフだからかな」

「ハーフ？」

「あれ？ 晴海は話してないの？」

「話したぞ。イタリアで生まれたって。普段掛けていないメガネの所為にでもしておいてくれ」

店名の通り店内は白と黒を基調としたデザインになっていて、店内に入るとオープンキッチンになっていてお客さんがスイーツを作っている所を見られるようになっていた。

そしてホールの女性スタッフはモノトーンのギャルソン姿で、パティシエは黒のコックコートに黒いズボンで黒のロングエプロンをして頭には黒いバンダナキャップといったカラスの様な真っ黒な格好になっている。

そして俺はお客さんから高校生に見られない様に伊達メガネを掛けていた。

そこにスタッフが頼んでおいたホットミルクとブラックティーを持ってきてくれた。

「失礼します。代理、お持ちしました」

「ありがとうございます。後はこっちで適当にするから」

「今日は両手に花ですね」

「まあ、そういう事にしておいてください」

テーブルの上にスタッフが湯気の立っているマグカップとホットケーキに乗ったお皿を置いて部屋から出て行った。

もちろん含み笑いをしながら。

ホットケーキはチーフが気を利かせて持たせた物だと思う。

「うわぁ、美味しそう」

「ん、なんだか花の匂いがする」

「女の子には大切なものらしいので、って先輩？　俺の事は放置ですか」

「ん、素敵だよ」

そんな事を言いながら視線はホットミルクとホットケーキに釘付けになっている。

どうやら甘い物に負けたらしい……

「晴海……」

「ハル君……」

どう足掻いても勝てそうに無いので俺が引くことにした。

「どうぞ」

「「やったー」」

2人が眼を輝かせてホットミルクが入っているマグカップを手に取

って口につけた。

「うわあ、うわあ。メチャ美味しい」

「あれ？ ハル君。なんだか蜂蜜の香りがいつものと違うよ」

「ああ、蜂蜜が違うんです。いつも俺が使っているのは百花と言って色々な花から出来た蜂蜜で、これは厳選されたアカシアの蜂蜜なんです」

「ふうん、そうなんだ」

菜露はまるで子供の様にホットケーキに夢中で百歩譲っても高校生には見えないが、無理に話しかけると食べ物物の恨みは怖いのでこの際そつと放置しておく。

「今度、カフェでだすホットミルクに入れてみようと思っているんです」

「ハル君が選んだの？」

「まあ、今日はそれで呼び出された様なものですから。色々な蜂蜜がありますからね」

「どんな種類があるの？」

「日本だと東のアカシア、西のレンゲ。それに菜の花や栗にハゼ・蜜柑・林檎なんかですかね」

「それじゃこれはハル君スペシャルなんだね」

そんな事を言いながら美雨先輩もホットケーキとホットミルクを堪能し始めた。

しばらくするとスタッフに呼ばれお客様の相手をして店を後にする。美雨先輩は店の前で良いと言ったが駅まで菜露と一緒に3人で歩いた。

「晴海と先輩がね。変なの」

「何が変なんだ？」

「だって晴海はいつだって本気じゃなかったでしょ。適當って言うか」

「あれはあれ。今は今だ」

「でも良かった。なんだか今の晴海のほうが人間らしいもん」

「あのな、俺は一応人間だ」

美雨先輩と目が合い苦笑いをする。

「はいはい、ご馳走様」

リザイン

駅で美雨先輩と別れて来た道に戻る。

冬は日が短いとはいえ早め早めに昼過ぎから動き出したので、まだ日が傾きかけている時間だった。

菜露と霧華の住んでいるマンションは俺のマンションからすこし歩いたところにあつた。

「ねえ、晴海。何で先輩だったの？」

「何で、ってサントさんのプレゼントかな？」

「あのさあ、晴海。思いつき殴って良い？」

「菜露に殴られても痛くは無いが」

「それじゃ……」

菜露が徐に携帯を取り出した。

「それは困る。霧華に殴られたら原型が無くなる。2日ほど完徹で仕事をさせられたクリスマスの晩に、具合が悪くなって道端に蹲っていた美雨先輩を助けたんだ。それからかな」

「ふうん、それで新学期にあれか」

「まあ、そう言う事だ。クリスマスの晩は名前すら知らなかったけどな」

「でも、一晩泊めたんでしょ」

「何でかな、子供の頃に何処かで会った事がある様な気がしたからかもな」

「へえ、晴海がね」

閑静な住宅街を菜露のマンションに向かい歩いていた。

「今日も菜露はバイトか？」

「うん、お義姉ちゃん負担になりたくないもん」

「霧華はそんな事は気にしないよ」

菜露は親父の店から少し歩いた所にあるレストランバーでバイトを

していた。

理由は菜露が言っているとおりでバイト代はほとんど霧華に渡しているらしい、俺が親父の店を手伝っている時には霧華に言われ一緒に帰る事が多かった。

温かい飲み物で飲もうと自販機の前で立ち止まりブラックティーを買うと懷に北風が吹きすさぶ菜露が恨めしそうにしているのでココアを買って渡してやる。

そして道端の白いワゴン車の横を通り過ぎようとした瞬間にワゴン車のスライドドアが開き、数人のスーツ姿の男が出てきて菜露の口を塞ぎ後ろから抱きかかえる様に拘束した。

菜露を拘束している男に向かっていこうとすると腰の辺りに銃口の様な物を押し付けられた。

持っていたブラックティーの缶をコートのポケットに入れて仕方なく軽くホルドアップする。

「そいつには手荒なまねをするなよ。俺が後で酷い目に遭うから俺の背後にいる男が腰に押し付けている物を押し出し何も言わずに車に乗れと促した。

菜露は悲鳴を上げることも出来ずに怯えている。

従うしかない大人しくワゴン車に乗り込むと菜露を拘束していた男が菜露から静かに離れた。

用事があるのは俺だけらしい。

ここで菜露が騒げば菜露自身にも危険が及んでしまう。

咄嗟に大声を上げないのは霧華の義理の妹たる為か、あるいは恐怖で声が出ないのか。

「そんなに心配するな。ちょっと行ってくる。この事は誰にも言わないよ。いいな」

「う、うん」

菜露は今にも泣き出しそうな顔をしているが俺の言葉は100%信用していた。

そんな菜露を拘束していた男がスライドドアを閉めて助手席に乗り

込むとワゴン車はゆっくりと走り出した。

まだ空は青々としている。

日がある内からずいぶんと大胆な事をするものだ。

まあ、日が高いあの時間だったからあの近辺には人通りが無かったのだろう。

そこで疑問がひとつ浮かぶがそれはどうでも良く思えた。

何故なら目隠しもせず、車の窓には濃いスモークが張られているだけでここが何処なのか判る。

どうやらまともな体では帰れそうにないことが直ぐに理解できた。

ワゴン車はとある5階建てのビルの前で止まり車から降ろされた。

ビルの中にはサラリーマンや営業マンには見えないスーツ姿の男が数人待ち構えていた。

学校帰りに拉致されたので黒いコートを着て学校指定のカバンを背負ったままエレベーターに乘せられ後ろ手にロープか何かで縛られてしまった。

エレベーターが最下層に着き、無言のまま肩を押されて歩けと指示される。

廊下は所々にある電球も切れ切れで薄暗い奥まった場所にある重そうな鉄の扉の前まで歩かされ、1人の男が鍵を開け重そうに軋む音と共に扉が開けられた。

するといきなり蹴り飛ばされて真っ暗な部屋の中に前のめりに倒れ、頬に冷たい塩ビタイルの床を感じた。

「クソ！ 生ゴミじゃなんだぞ」

体を起こし床に胡坐をかく。

どうしたものか考えていると誰かが居る気配がして緊張が走る。

「真っ暗で何も……？」

部屋の中は蹴り飛ばされる寸前まで真っ暗だったと認識しているが不思議な事に明るいとはいえないが部屋の隅々まで良く見える。

部屋が明るくなった訳ではなく俺の目が暗闇でも見えるようになって

ているという事で。

理由はたった一つしか思い当たらなかった。

「ヴァンプになった所為か」

部屋を見渡すと唯の四角い箱の様な部屋で出入り口は俺が背にしているドアだけのようだ、部屋の左隅に何かが横たわる様に壁にもたれ掛かっている。

目を凝らしてみると何処かの学校の制服を着た女の子のようだった。

「あの制服はもしかして姫女か？」

姫女、つまり姫乃月学園女子高等学校・通称（姫女）の制服を着ている。

姫女の制服には苦い記憶があるので用心して近づくと、左腕は不自然に腫れ上がり顔や右腕と足には無数の痣が出来ている。

俺の気配を感じたのか虚ろな目を僅かに開けたウルファットの女の子は俺が美雨先輩と仮契約を結んだ夜に襲ってきた人狼の少女だった。

「お、お前はこの間の……」

「大丈夫か？」

「ひっ……助けて……」

彼女も人狼だ、俺の顔を見て怯えているという事は暗闇でも全く関係ないのだろう。

まあ、怯えるのも無理も無い。いきなり腕をへし折った相手が目の前に現れたのだから。

それにしてもあの夜と打って変わって殺気など微塵も感じず怯えきっている。

どうみても目の前に居るのは怪我をして怯える普通の女の子にしか見えない。

「お前も拉致されたのか？」

「ち、違う。壊れた道具は要らないって、私が馬鹿だったんだ」

ゆっくり彼女に近づくと左腕を押さえながら逃げようとしている。

「お願いだから殺さないで……」

「確かに君の腕を無意識だろうがへし折ったのは俺だ。信じろとは言わないがそんなに酷くは無かっただろう」

「あいつらが反抗できないようにって」

幾ら人で無いものだからって惨い事をして良い訳が無い。

沸々と怒りが心の奥底から溢れ出してくる。

縛られたままでは埒が明かないので手首の関節を外して縄抜けをすると床に縛られていたロープが落ちた。

関節を嵌め直して手首を回すと彼女が更に怯え始めた。

そしてこの状態で近づけば彼女は満身創痍の状態で無理にでも逃げ回り危険な状態になりかねない。

どんな言葉を使ってもこの状況で信じてくれと言うのは俺が逆の立場であっても信じるることなど出来ないだろう。

ここは強行策に出ることにした。

背負っているバッグを下ろし常に忍ばせているナイフを取り出すと思っていた通り、怯えきっている彼女は恐怖心からか息を呑むように気を失った。

ゆっくりと近づいても彼女は気を失ったままだった。

念には念を入れ、持っていたバンダナを捻りロープ状にして口に咥えさせる様にして後頭部で縛る。

人狼にしても人間にしても噛む力は非常に強く、例えばそれが女の子だろうと到底敵わないし万が一と言うこともあるがこの方が今の状況では最善だと判断する。

彼女の折れている左腕に触ると氷の様に冷たく冷え切っている。

どれだけの時間放置されていたのだろう。

どうやら親指に近い方のとう骨が折れているようだった。

「直接流し込むしかないのか」

自分自身の中にあるヴァンプの血にどれだけの治癒能力があるのかは判らないが今はミウの話を信じてやるしかない。

止血するために彼女の左前腕部の止血点をロープできつ目に縛り筋肉をなるべく傷付けない様に腕にナイフを這わす。

痛みで暴れるが力任せに押さえ込むと再び気を失ってしまった。
彼女の右腕をとって脈を調べると弱弱しいがはっきりと感ずることが出来る。

直ぐに折れている箇所が見えてきた、骨のずれを治しナイフで自分の左掌を切りつけると血が見る見るうちに蒸発して消えていく。
人ではないヴァンプになった事を再認識する。

掌を握り締め拳を傷口の上にして血を流し込むと瞬時に骨が繋がった。

繋がったと言うより元通りに戻ったと言うほうが正しいのか。

俺のヴァンプの血が流れ込んだ左腕の傷口が完全に元通りになり、直ぐに止血しているロープとバンダナを外して意識を確認する。

「おい、おい」

「う、う、うん……」

頬を少し強く叩くと虚ろな瞳を僅かに開いた。

腕や足にこれだけの痣があると言うことは全身に殴る蹴るの暴行を受けたことが容易に想像つく。

少し躊躇ったがミウが俺にした様に俺の血を口に流し込むとよほど喉が渴いていたのか必死になって飲み込んでいる。

荒く乱れていた呼吸が次第にゆっくりと規則正しくなっていく。

ナイフで切った掌の傷口を見ると既に傷は跡形も無く何処を切ったのかさえ判らなくなっている。

血を流し過ぎた所為なのか体が兎に角だるい。

今は体を休めるしかない。

冷え切った彼女の体を抱き寄せコートを掛けて眠る事にする。

ここに連れて来られた時はまだ日が高く夕方にはまだ早い時間だった。

幾ら冬で日が短いとは言えそんな早い時間に奴らが動き出すとは考え難い。

それに俺と彼女にも時を待ったほうが好都合だ、何故なら俺達は闇の世界の者だから。

俺の体を枕代わりにして彼女はまるで犬が丸くなる様な格好で小さな寝息を立てていた。
しばらくすると彼女の体温が上がり始め俺自身の体も温もりいつしか眠りに落ちていた。

彼女がモゾモゾと体を動かし眼が覚めた。

少し眠った所為で多少は良くなったが血を流し過ぎた為なのか体は不協和音を奏でだるく重いまだだった。

彼女の顔を除くと驚いたように目を覚ました彼女と視線が合う。

「起きたか？ 声を上げるなよ。気づかれる」

一瞬で殺気立った瞳になり飛び起きるように退くと彼女に掛けてあったコートが床に舞った。

「それだけ元気なら大丈夫な様だな」

「なっ……体が！」

余程驚いたのだろう彼女の体は人狼の姿に変化している。

そして折れていた左手の感覚を確かめるように指を動かしていた。

「何故、助けた？」

「理由なんてねえよ。どいつもこいつも同じ事を同じ様に聞きやがる。俺は生き地獄を見て来たんだ。だから目の前で散られるのが大嫌いなんだよ」

「情けを掛けたつもりか」

彼女が動いたと思った時には既に彼女の左手で喉元を押さえ込まれ、彼女の右腕が振り下ろされていた。

鋭い彼女の爪が俺の瞳の寸前で止まっている。

「殺す」

「やれよ。今の俺には成す術がない」

「そんなはずは無い。貴様が俺の左腕をへし折ったのだ。この化け物が」

「化け物か……そうだな。俺も化け物だったな」

幼い頃の事が脳裏に浮かぶ。

周りの大人達が畏怖の念にかられながらも俺の事を見下しながら化け物と小声で蔑んでいる。

人である事、頭のどこかで無意識に否定し続けた人で無い者になった事。

俺の中でグルグルと蠢いていた物が方向性を持って一気に動き出す。『ドクン』と鼓動が跳ね上がると俺の奥底から何かが物凄い勢いで湧き上がって来るのを感じる。

「これがヴァンプの力なのか？」

「そ、その瞳。貴様は何者だ？」

彼女が全身のばねを使って一瞬で後ろに引き下がり震えている。体のたるさも重さも不協和音もまったく感じない。

それどころか力が湧いてくる。

「俺はお前が散る寸前にしたミウの眷属だろ」

「あり得ない。あいつよりレベルが上がっている」

「レベル？ レベルって何の事を言っているんだ？」

「何も知らないのだな。まあ俺も聞いたただだから詳しくは無いがヴァンプは力の強さで瞳の色が変わる。紫から金に近い黄色になるほど力が強くなる。あの女の瞳はブルーだった、眷属のお前があの女以上のレベルになる事などあり得ないはずだ」

「それじゃ、俺の瞳は？」

「グリーンだ。それもエメラルドグリーンと言ったほうが良いのかもしれない。何故だ？」

「まあ、ミウ風に言わせてもらえば俺も初めて何でな。説明もできないし理由すら知らない」

「そんな馬鹿な」

「で、どうするつもりだ。俺はお前とやり合う気は無い。このまま散るのを待つか？ それとも」

「外にはどう足掻いても出られない。このドアは俺の力でも破る事ができなかった。結界が張ってあるか特殊な仕様になっているかだ。貴様でも同じことだ」

「なら簡単だ。化け物の力で無理なら人間の力なら開くのだろ」

「馬鹿げた事をほざくな。高校生の人間如きの力で何ができる」

「人間は非力だけどな、その代わりにいろんな事を考え発明し時には争いの道具を作ってきたんだ」

俺は普段使いの黒いタクティカルブーツの踵を外し中から白っぽい粘土の様な物を取り出し、バックからはペンケースを出してシルバーのペンを手に取った。

粘土状の物をドアの鍵穴に詰め込むように貼り付けてシルバーのペンを粘土に突き刺す。

「きちんと調べるもんだ。まあこんな物騒な物を持ち歩く高校生なんて日本じゃ俺位くらいだからな」

「貴様、何をしている？」

「この粘土状の物はC-4、可塑性爆薬つまりプラスチック爆弾と呼ばれる物でこのペンは起爆装置みたいなものが仕込まれているんだ」

「プラスチック爆弾？ 起爆装置？ 貴様は本当に何者なんだ？」

「お前やミウが闇の世界の者なら俺は人間で言う裏の世界の者だよ。今は闇と裏だから漆黒の世界と言ったほうが良いかもな。とりあえず無様にここで散る訳にはいかないんだ。逃げ出すまで邪魔だけはするな。もし邪魔をする様なら俺が情け容赦なく散らしてやる」

まっすぐに彼女を見ると静かに瞬きをした。

「あいつ等に怒り心頭だろうが無益な殺しはするなよ」

「よく言う漆黒の世界の者が」

スマートフォンを取り出し画面をスクロールするそして画面を押すと鈍い炸裂音がしてドアが静かに開いた。

俺の出る幕など全く無く、彼女が片っ端からフルボッコにしていく。そして社長室の様な最上階の部屋で彼女は白髪交じりの男の首を掴んで言葉どおり締め上げている。

男は宙に浮いた足をバタつかせ、顔は茹蛸の様に真っ赤になってい

た。

「こいつの所為で俺は……」

「その辺にしておけよ。制服が汚れるぞ」

「でも」

「俺に考えがある」

彼女の腕に手を当てると渋々だが男を椅子に下ろした。

苦々しい顔をしているが従ってくれるようだ、人狼の姿から人間の姿に戻っているのがその証拠なのだろう。

椅子に降ろされた男は首を擦りながら肩で息をしている。

重厚な作りの木の机に学校指定のバッグを置いて中からペンケースを取り出し少し太めの万年筆を取り出す。

そして分解すると中から両端がステンレスのキャップの様になっていて、中に黄色い蛍光色の液体が入った透明なカプセルが出てくる。そのカプセルを人差し指と親指ではさむ様にして男の目で前に見せた。

「これが何だか分かるかな？」

「そんな物、子供騙しの脅しのつもりか？」

「子供騙し？ これが」

白髪交じりの男は毅然とした態度で未だに眼光だけは鋭い。

それは裏でも表にしる人を束ね上に立つ人間の気質なのかもしれない。

カプセルを挟んでいた指の力を抜くと男の目の前からカプセルが落ちていく。

床に落ちたカプセルが爆発を引き起こし白い煙が上がり高級そうな絨毯に30センチ程の穴が開き、絨毯の下コンクリートの床が抉れた様になっている。

男の表情が強張り呼吸が荒くなっているのが判る。

バッグに視線を移すと机の上にある木製のフォトスタンドが目についていた。

手に取るとどうやら家族で旅行した時の写真らしい。

「家族写真か。イタリアだな、後ろの建物に見覚えがある」

「貴様には関係無い」

「関係無い？ 大有りだろう。それじゃ一体何をしようとしていたんだ？ 俺と彼女を消そうとしたんだろう。今度はお前が散る番だ」
「フォトフレームを男の頭の上に翳すと男が不思議そうな表情をする。」
「大事な家族写真なんだろ。ほら、両手でちゃんと持てよ」

「私に脅しは通用しない」

「そうか、それじゃこれならどうだ」

ポケットからブラックティーの缶を取り出し男の死角である耳の後ろで缶を振ると液体特有の音がした。

「これが何だか判るかな？」

「ま、まさか」

「正解かな。先ほどのカプセルの何十倍の液体になるかな」

缶をフォトフレームに載せて男の頭に置くと慌てて両手で掴もうとした。

その手を片手で払うと男の体が震え出した。

「やめろ、馬鹿なことをするな」

「ほら、ゆつくりとフレームを持てよ」

「わ、判った」

「不安定だから気をつけろよ」

ゆつくりと男から離れ机の上においてあったバッグを取り大きな机の前にあるソファアに腰を下ろすと人狼の少女が呆れ果てた顔をしている。

「落とすなよ。それが落ちたらこのビルの最上階は跡形も無く吹き飛ぶからな」

「それならば貴様達もろとも。そうすれば結果は同じこと」

「本気でそう思っているのか？ お前は彼女の正体を知っている筈だ。怪我が完治した彼女にそんな物が通用するとも思っているのか」

座っている俺の後ろに立っている彼女を見上げると一瞬だけ鬱陶し

そんな顔をしたが直ぐに人狼の姿になり男を睨み付けた。

「き、貴様は何者なのだ」

「ヴァンプ。つまりヴァンパイアだ。人狼が存在するならヴァンプが居てもおかしくないだろ」

「ふん、そんな事が信用できるとでも」

「これでもか？」

立ち上がり力を少しだけ解放すると男の後ろにあるガラスに映っている俺の瞳が宝石のエメラルドの様な光を発している。

「随分と手の込んだ手品だな」

「それならこうすれば信じられるかな」

机を挟んで座っている男と対峙して徐に左目に人差し指を突っ込み、眼球を取り出して男の目の前に突き出す。

するとまるで眼球は気化した様に蒸発していき眼球を抜き出した左目は瞬時に再生され元通りになっている。

男の顔を除き込むと冷や汗が噴出し震えが止まらないようだ。

「信じてもらえたかな」

「ば、化け物！」

「今後一切、俺達に関する様な事があれば百鬼夜行の如くお前の家族の前に現れるからな。化け物を甘く見た罰だ」

更に力を解放すると瞳がエメラルドから黄色味がかったペリドットの様に変化した。

「た、助けてくれ。何でもする。金か？金が欲しいのなら」

「何も要らないねえよ。それに助ける気も無くなった。それともお前達が彼女にした事を彼女にしてもらうか？爆発で散るか彼女にボコられて散るか選ばせてやる」

「わ、私が悪かった。許してくれ」

「どうする？許せと言っているが」

俺の言葉で彼女が牙を剥くとコトンと音を立ててフォトフレームに立ててあったブラックティーの缶が倒れる。

そして男の目の前を通り過ぎて床に向かい落ちていく。

恐らく男にはスローモーションの様に見えているのだろう。

男が白目を剥き体が崩れ落ち座ったまま糸の切れたマリオネットの様になった。

「さあ、帰るか」

「お、俺はどうすれば」

「好きにしろ。これだけは言っておく俺達に再び牙を剥けばその時は覚悟しておけよ」

「ふん。誰がお前みたいな腹黒い奴を相手にするか。それに助けて……」

彼女の言葉が尻すばみになり美雨先輩より大きな腹の虫が鳴った。

このまま帰るより菜露に会いに行き無事を確認させたほうが確実にだし、そうすれば菜露が霧華に話すことも無いだろう。

菜露は俺が言うなと言えば決して誰にも言わないが霧華だけは別次元で、霧華の耳に入れば色々と面倒な事になる。

時計を見ると未だ菜露のバイトが終わる時間までかなり余裕があった。

「飯を食いにいくぞ。嫌じゃなければついて来い」

「貴様とか？」

「嫌じゃなければと言った筈だ。飯ぐらい奢ってやる」

「まあ、奢ってやると言うのなら一緒に行ってやる」

最上階で糸が切れたマリオネットを放置して菜露のバイト先に向かうことにした。

菜露のバイト先は親父の店『Nero e bianco』のある並木道の先にあった。

味のある木のボードに『Night of Knight』の文字がライトで浮かび上がっている。

しっかりとした造りの木製のドアを開けるとそこには古い物好きなマスターが創り出した空間が目飛び込んでくる。

ヨーロッパの老舗のカフェと言うかバーと言ったほうが近いかもしれ

れない。

落ち着いた色になった木の床や壁が古き良き時代を思わせる。
ドアノブなどは真鍮製で使い込まれ良い味を出してまるでタイムス
リップしてしまったかのような感覚にさえなる。

カジュアル＆シンプルを全面に押し出した『N e r o e b i a
n c o 』とは全く正反對だが俺はこの雰囲気が好きだった。

お客は少ないが人気が無い訳でなくマスターの腕は確かで料理も力
クテルも美味しい。

まあ、高校生がカクテルの味が判ると言うのも変な話だが、俺が親
父に連れまわされ今でも時々海外を転々とさせられていたのが理由
だった。

天然木の一枚板で出来ているカウンターの向こうでは白いシャツに
黒いベストを着た寡黙なマスターが会釈をしている。

お客がいらない所為かカウンターの椅子に菜露が座って足をぶらぶら
させている。

俺の姿を見つけると驚いたような顔をして椅子から飛び降りて抱き
ついてきた。

「菜露、仕事中だろ」

「良いの。お客なんていないんだから。それに」

「少しだけ行つてくるって言っただろ。怪我なんてしてないよ」

「心配だったんだから」

「だから顔を見せに来たんだろ」

「で、誰？ その子？」

俺の顔を変な目で見ている菜露の格好は、黒を基調として所々に白
が差し色として使われている。

しかし、ギャルソンの格好とは対極のものかもしれない。

袖が膨らんだ黒いミニワンピースでスカートの部分にはフリルがあしら
われ白い控えめなパニエが裾から覗きスカートが少し膨らんでいる。
黒い厚底の編み上げブーツを履いて首には白いレースに黒いリボン
がついたチョーカーをしている。

いわゆるシンプルな？

ゴシック&ロリータと言われているファッションで、浮いているかと言えばそうではなくアンティークな店内に異様なほどマッチしている。

店長の趣味かと言えばそれは全否定された。

初出勤の時にシンプルな服装でと言ったらこの格好で菜露が現れたらしい。

それでもこの格好で寡黙なマスターが何も言わなかったのは、それなりに店に溶け込んでいて常連客からも好評らしい。

「で、誰なの？」

どう説明するべきか考えていたら菜露が再び聞き返してきた。

「その制服は姫女だよね。鳳条先輩という人が居るのに浮気？」

「あのな、菜露。俺がそんな事をすると思うか？」

「晴海は人でなしだもんね。女の子に言い寄られるのが面倒で適当に女の子と付き合っている振りをしていただけだもんね」

「だろう」

「でも今は違うでしょ。ちゃんと鳳条先輩に向き合っているんですよ」

「そうだ、だから浮気なんて七面倒くさい事はしない。俺と同じ様に連れて来られていたから連れて逃げ出してきただけだ」

「ふうん、逃げ出してきたね。どうせ晴海の事だから相手が誰でもろうと謝っても完膚無いくらいにしてきたんでしょ」

菜露に俺はどんな風に映っているのだろうと時々思う事がある。

霧華と暮らしている所為なのかそれとも……

「食事まだなんですよ」

「ああ」

「それと」

「判ってる、ちゃんと送ってやるよ」

「彼女もだよ」

「了承した」

通り沿いの窓際のテーブルに腰をおろすと彼女が店内を珍しそうに眺めている。

無理も無い隠れた名店と言うか人気はあるがそれは殆どが常連客で高校生などが気軽に入れる様な雰囲気じゃないのは確かだった。

とりあえず料理と言っても軽食の部類に入るものを菜露に注文する。俺と彼女が注文したのはスタンダードなチキンピラフだった。

「名前だけでも教えてくれないか。君は俺の事は知っているみたいだからな」

「麟堂 霞りんどろ かすみ。姫女の2年だ」

「俺と同じ年か。話したくなければ話さなくてもいいが。幾つか聞いておきたい事がある。なんだってあんな奴らと組んでいたんだ？」

「組んでいたんじゃない。仕方なく」

「仕方なくか。脅されてと言う奴か、でも君は」

俺が何を言おうとしたのか理解してあたりを見渡して警戒した。

「大丈夫だよ。俺を出迎えた菜露は血の繋がりは無いが妹の様な奴だから心配はない。それに俺達の話なんか聞こえてないよ」

「そうか、血の繋がりの無い妹か。俺は孤児なんだ。今はとても優しくしてくれる両親に引き取られて俺が人でない事を知らない。少し前に奴らに絡まれて人狼の姿を見られてしまったんだ」

「それを両親にばらすと脅された訳だ。直ぐに両親に連絡してあげた方がいいな。心配しているはずだ。優しい両親なんだろ」

「う、うん」

俺がそう諭すと彼女は安心したのか携帯をポケットから取り出して電話をし始めた。

僅かに声が漏れていて会話が所々聞こえる。

そして彼女の目には涙が溜まって今にも溢れ出しそうだった。

「あんな酷い事をしたのに。ありがとう。助けてくれて」

「礼はいらない。俺だって同じ立場なら同じ事をしていただろうしな。ミウにも俺にもあの程度の怪我は直ぐに治る。そうは言っても俺は新人だからな」

「でも、普通の高校生にしか見えないのに」

「裏の事は内緒にしておいてくれ。表の世界じゃ全く必要の無いことだ。俺も生まれた時には母親は既に居なかったし、親父ですら俺の前に現れたのは物心が付いた頃でそれまでは独りだった。そして母親の家と言うのが表では有名な名家だったが裏の顔はマフィアも真つ青な事を平気でやる家で俺にもその全てを叩き込んだんだ」

「そんな、子どもに」

「子どもも大人も関係ない。ただのチェスの手駒に過ぎないよ」

「チェス……あつ、チェスで思い出した。この店のマスターの顔をどこかで見た事があると思っていたんだ」

「ああ、そんな事が。マスターはチェスの達人だからな」

「知らないのか。あの人はサイレントエンペラーと呼ばれた凄い人なんだぞ」

「静かな皇帝ね。確かに無口でチェスはめっぽう強いけどな」

そこに菜露がピラフを運んできてくれた。

それも今日はサラダにコンソメスープ付だった。

「菜露、ピラフしか頼んでないぞ」

「マスターの驕りだって。それにこれ、マスターが載っている雑誌だよ」

それは少し古ぼけた冊子の様な雑誌だった。

「月刊チェス？ またマイナーな雑誌だな」

「仕方が無いよ。日本ではチェスはあまり人気が無いからね」

「そんな事はない。チェスはスポーツであり科学であり何より芸術だぞ」

菜露と俺の会話に突然割って入ってきた麟堂の顔が輝いて嬉しそうにしている。

初めて笑った顔を見た。

今までは脅されて人で無い者を襲ってきたのだから仕方が無いのかもしれない。

カウンターに目をやるとマスターが彼女の言葉にニヒルな笑みを浮

かべて親指を立てグッジョブのサインをしている。

「ただけチエスラブなんだよ。」

「そんな事を考えていると菜露が俺の肩を指で突つついた」

「ねえ、晴海。紹介くらいしてよ」

「そうだな、俺も名前はさっき教えてもらったんだ。名前は麟堂霞。姫女の2年だから菜露の先輩だな」

「へえ、晴海と同年か。綺麗な人だね、鳳条先輩とはタイプの違うクールって言うかツンデレ系で俺っ娘かあ」

「言っておくが俺は」

「はいはい。でも鳳条先輩はなんて言うかな。ヤンデレにならないければ良いけれどね」

「あのな、容易に想像が付く恐ろしい事を言わないでくれ。菜露はツンデレ系だろ」

「違うもん。私はブラコンだもん」

「シスコンじゃないんだな」

「それは無い。私はノーマルだから」

「ツンデレやヤンデレにブラコンやシスコンなんて言っている時点でノーマルじゃないと思うが放置しよう。」

「麟堂はピラフを頬張りながらまるで夢を見る乙女のような顔をしていると菜露が突っ込みを入れた。」

「麟堂先輩？ マスターに勝負を挑んでも相手にしてくれないよ。マスターは一見のお客さんとは手合わせしないからね」

「ええ、そんなあ。雲の上の人とチエスが出来ると思ったのに。シヨックだな」

「でも、晴海に勝てたら考えを変えてくれるかもね」
「本当に？」

「菜露と麟堂がカウンターに居るマスターの顔を伺うと寡黙なマスターがグラスを拭きながら小さく頷いた。」

「菜露もマスターも面倒な事をしてくれる。」

「俄然元気になり麟堂は男らしく？ 急いでピラフを口に放り込んで」

いる。

折角の美味しい料理もこうなると形無しで、それでもピラフを作ったのはマスターでこういう状況にしたのもまたマスター自身だった。そんな訳で菜露のバイトが終わる時間までと言う条件付で麟堂とチェスをする羽目になってしまった。

「リザイン……何で勝てないんだ？」

「そんな目で俺を見ても勝てないぞ。それに俺の子ども頃は遊び相手は大人しか居なかったからな。チェスやカードでしか遊んだ記憶が無いんだよ」

「くそ、もう一回だ」

持ち時間を15分に決めてラピッドと言う快速チェスをしている。

俺自身は一度もチェックメイトしていない。

いい筋はしていると思うが場数をこなしてきた違いなのだろう、日本ではチェスをする人は多くない。

麟堂自身も両親に教わったと言っている。

最後の試合もドローに終わってしまった。

「また、勝負だからな」

「暇なら相手をしてやるよ」

麟堂を駅まで送り届け昼間と同じ道を菜露と歩いて菜露をマンションまで送り届けた。

菜露はあの姿のまま帰るのかと思っていたら学院の制服に着替えている。

俺としてもその方が有難い、流石にゴスロリ姿の菜露と歩く勇氣は持ち合わせて居なかった。

転校生

拉致づくめの金曜が終わり。

土曜日は目覚めると何故だか俺の布団の中で美雨先輩が丸くなって眠っていた。

何でも土日と家の都合で出かける用事があって俺に会えないからって勝手に俺の布団に潜り込んでいい理由にはならないが俺の意思などとは何処にも存在しないようだった。

クリスマスの晩に美雨先輩を助けてから怒涛の激流下りの様な毎日が続いている気がするの俺だけだろうか？

月曜日に明陽学院に登校すると講堂の前にある掲示板に人だかりが出来ている。

講堂の前は校門をくぐり登校してきた生徒が必ず通る場所なので、そこに掲示板が設置され休講のお知らせや学校からの連絡事項が張り出されている。

特定のクラスを持たないスタイルだからなのだろう。

それでも学校行事などの時にはグループ分けされていて担当の教師も決まっている。

それが始業式の時などに分かれて説明を受けるグループになっていた。

あまり好んで受けない大教室の講義だが今日はそうは行かない。

人気がある講義なので必然と大教室になっているが幸いと言えば良いのか美雨先輩はこの講義を取っていなかった。

教室の真ん中にある出入り口から中を覗くと直ぐに東雲が手を上げて合図してくれる。

東雲は早い時間から遅い時間まで満遍なく効率的に授業を取っていた。

その為に俺と一緒に授業の時は東雲が先に来て後ろの席を確保して

くれていることが多かった。

「悪いな、いつも」

「気にするな。それよりも気づいたか」

「ああ、何だか学院中が騒々しいな」

席に着くと東雲が待ち構えていたかのように話を切り出してきた。

「それが、こんな時期に転校生らしんだ。それも飛び切りの美人らしいぞ」

「そんな事しかどういつもこいつも頭に無いのかね」

「そう言うな。高校生活をエンジョイするスパイスの様なものだよ。兎も角だ、とりあえず会って見たいと思わないか？」

「別に思わないな」

「まあ、鳳条先輩みたいな美人が彼女なら仕方が無いな」

「東雲にだって可愛らしい彼女が居るだろう」

「ああ、そうだな。お前も一度で良いから望スペシャルを受けてみる。年中お花見が出来るぞ、三途の川でな」

「まあ、俺はクリスマスの晩にそんな川は一足飛びにしたけどな」

「それにこんなイベントでもなければ楽しい高校生活は送れないぞ。転校生と運命の再会なんて男のロマンだ！ 可愛い転校生にいきなり指をさされて名前を呼ばれてみる。健全な男子なら確実にキyun死だぞ」

御バ力な東雲の会話に付き合っていると俄かに教室が騒がしくなった。

それは教室の外。つまり廊下から伝染して来ているらしい。

入り口にいた数人の生徒が慌てて教室に飛び込んでくると一人の女子が教室に現れ中を見渡している。

そして……

「ああ、居た！ 亀梨晴海！ 勝負だ！」

大教室に響き渡る大声で俺の名を呼び捨てにして指をさしやがった。160センチのスレンダーな体に明陽学院の制服を着てウルフカットに切れ長な目をしている。

左手にはご丁寧に半分に折り畳めるチェス盤を抱えている。

恐らく二つ折りにされたチェス盤の中には駒が綺麗に収納されているのだろう。

軽くステップを踏むように階段を上がってきて俺と東雲の座る机の横までやってきた。

俺はキュン死ならぬ急死の様に机に突っ伏した。

「おい、亀梨。どういう知り合いだよ」

「俺の名は麟堂^{りんどうかすみ}霞。亀梨晴海の犬だ。俺に用件がある時には主人である亀梨を通せ！」

麟堂とんでもない発言で一瞬教室が水を打ったようになり、サンダースコールが起きた。

？マークの突風が吹き荒れ。

転校生まで毒牙に、砕け散れ、などなど聞くに堪えない言葉が雷の様に飛び交っている。

「亀梨、こんな可愛い女の子を飼っているのか？　なんて素敵なプレイヤート空間なんだ。男の夢だ！　ロマンだ！　羨まし過ぎる！」

「東雲、お前に言い残したい事があるその辺にしておけ。先にお花畑の川原でお昼ねと洒落込むからな」

「何を言っているんだ、亀梨。俺の夢だぞ」

「へえ、こいつが望の彼氏か。どんな奴かと思ったらただの変態でヘタレじゃねえか」

麟堂の言葉に東雲がモアイ像の様になっている。

仕方なく東雲に引導を渡してやる。

「麟堂が通っていたのは姫女だ」

ゴトンと音がしてまるで落椿の様に東雲の頭が机に転がっている。先にお花見をしに川原に行ったのは東雲のようだ。

当分、戻ってくることは無いだろう。

東雲を連れ戻すことを諦めて麟堂の顔を見上げる。

「あのな、この学院で俺は諸悪の火種みたいに思われているんだ。無闇に酸素ボンベを火種に投げ込むような事をしないでくれ」

「すまない。俺はただ命を助けてもらっただけだし亀梨には何をしても勝てないのでつい」

「まあ、良いさ。漆黒はどんなに色を重ねても黒いままだからな。」

昼休みにならチェスの相手をしてやる。学食で待ってる」

「了承した」

慣れとは怖いものである。

針の筵のような高校生活に痛みすら感じなくなってきた自分に気づいた。

昼休みに学食に行くと人だかりが出来ていて、直ぐにその中心に麟堂が居るのが判り探す手間が省けた。

俺に対する発言は兎も角として、男女問わず裏表の無い性格から好感度がアップしているのだろう。

それに基本的に悪い奴じゃない。

男ばい性格も潔さを感じるほどサッパリしている。

俺に気づいた麟堂が嬉しそうに手を上げると周りに居た生徒達は潮が引くように居なくなった。

「先に飯を食おう」

「判った」

日替わり定食が載ったトレイをテーブルに置くと麟堂が美雨先輩の倍はある弁当箱を広げ始めた。

「弁当なんだな」

「ああ、これは母さんが毎日作ってくれるんだ。同い年の子と比べるとかなり量が多いから恥ずかしいのだが。俺にはこれくらいがちょうど良いんだ」

「別に良いんじゃないのか。お前はお前だ。俺は横並びして皆と同じである事に違和感を覚えるしな。それに気持ちが悪い、何で皆同じじゃないといけないんだ？ 理由が判らない」

「そうか。亀梨がそう言うなら俺は気にしない」

箸を持つと俺の耳も誰かに持たれ引っ張られた。

「何だ、菜露」

「随分と麟堂先輩と仲が良いじゃん。それにいつから先輩をペットにしたのかな」

「俺はくだらない噂を信じる菜露なんて知らないけどな」

「それじゃ、鳳条先輩になんて説明するの？」

「ありのままを話すだけだ。俺が恋人に相応しくないと美雨先輩が判断を下せばそれに従うしかない。まあ、余計な事を言われる前に言っておくけど。ありのままに話すと言っても話せない事も多かれ少なかれ人にはあるはずだ。その上で美雨先輩には判断してもらいたい」

麟堂が驚いたような顔をしているがスルーする。

菜露の影から顔を出した筈の美雨先輩は何も言わず、その代わり菜露が口を開いた。

「晴海の頭の後ろにはお化けみたいに目でも付いてるの？」

「そんなものは付いてない。状況を的確に判断すれば答えは出てくるだろ。転校生の噂などあつという間に学院中に広まる。その転校生が美雨先輩のおかげで知る人が居ないくらいに有名人になってしまった俺にあんな事を言っただ。尾鰭が付いて今頃は凄い話に膨らんでいるのだろう。そんな話を聞いた先輩はその与太話を確認するために学食に居るはずの俺を探しに来た。だが、転校生と一緒に飯を食おうとしていたから怖くなって声を掛けられない。そこに菜露が現れてここぞとばかりに菜露の後についてきた。この状況で菜露が俺に話しかけない訳はないからな。と言う事で菜露の後ろには美雨先輩が居ると答えがでる」

「うっ、見てきたみたいと言っただね」

「で、美雨先輩が叩き出した答えを聞いてみようか」

俺の言葉に周りの奴らも聞き耳を立てている。

ただでさえ目立つ転校生に、学園のアイドル、そして悪の権化が集まっている。

目立つなと言うほうが無理で下手をすれば鳳条先輩の時のように拷

問部屋にご案内されてしまうだろう。

美雨先輩が返事をするより先に麟堂が席を立ち上がった。

「鳳条先輩と呼ばばいいのか。許してはもらえないだろうが謝罪をしたい。先日はとんでもない無礼を働いてしまい大変申し訳なかった。理由は如何であれ許されることじゃない。いつその事、打ち首にしてもらって構わない。それとも俺がここで腹を」

「麟堂。お前は侍か？ 時代錯誤も甚だしい、そのくらいにしておけ。お前が言うのと冗談に聞こえない。美雨先輩は俺とこいつの間にどう答えるんだ？」

ミウが刀を振り上げる姿と麟堂がサバイバルナイフを逆手に掴んで腹に切っ先を当てている姿が生々しく浮かび、それを打ち消すかのように美雨先輩に答えを求めた。

「意地悪。もう良いよ、許します。麟堂さんのおかげでハル君と出会えて恋人になれたんだし。それに何か訳ありだったんでしょ」

「その訳は俺が後でゆつくりと話す。それで良いかな」

「う、うん」

「終わりでいいな。麟堂も余計な事を言おうとするな、馬鹿が」

納得は出来ないようだったが美雨先輩が俺の横に座り菜露は麟堂の横で弁当を広げ始めた。

はつきり言えば居心地が悪い何でこんなに視線を浴びながら食事をするしなければならんだ。

だが美雨先輩に合わせて食事をしていると早々と麟堂が弁当箱を片付けてチェス盤を広げ始めた。

昼休みに相手をしてやると約束したのは俺自身だった。

「ほら、食いながら相手をしてやる。先に差せ」

「良いのか。よし」

目を輝かせながらチェス盤を見ている。

余程好きなのだろう。そして別の意味で周りの視線を集める事になった。

日本で将棋をしている姿は見たこともあるかもしれないがチェスと

なれば話は別だ。

将棋も西洋将棋などと呼ばれるチェスもインドのチャトランガというボードゲームが源流だと言われている。

西に広がりチェスになり東は中国を経て日本に伝わったと言う説と東南アジアから伝わったとされる説がある。

しかし日本では認知度の違いが大きい、聞いたことはあるがチェスの試合を見た事がある高校生なんて皆無に等しいくらいだろう。

チェスと将棋の大きな違いは取った駒を使えない事でその為に消耗戦になり将棋にはないドロ―つまり引き分けがある。

そして勝負の多くは映画やテレビの様にチェックメイトではなくリザイン（投降）の方が多い。

チェスでは勝つ為ではなく負けない様にすることが重要になってくる。

「リザイン、どうしても勝てない」

「勝つんじやなく負けない試合をすれば良いんだ。ナイトナイトのマスターに教えてもらえ。早い時間は暇だから頼み込めば相手はしてくれないかもしれないが教えてくれるだろ」

「本当か？ 今度行ってみる」

「俺に進められたなんて言うなよ。純粋にチェスが好きですと言えばいいんだ」

嬉しそうに麟堂がチェス盤を片付け始めた。

「純粋にハル君の事が好きです」

「あんな、それをここで言うのか？ 鳳条先輩」

「意地悪。どうして苗字で呼ぶの」

「ほかの誰にも聞かせたくないからかな。美雨先輩」

弁当箱をポーチに入れている美雨先輩が真つ赤になって俯いた。

この小動物は寂しがり屋で時々構ってやらないと居なくなりかねないのが玉に瑕だった。

それは建前で先輩の反応を見るのが楽しいなんて事は決して口には出さない。

その夜、約束どおり話をする為にミウを呼び出した。
場所は俺が襲われたマンシヨンの近くの公園だ。

あの時の様に影の中から現れるかと思っただろうやら違っらしい。

ゆっくりと俺が座っているベンチに向かって歩いてくる人影が見える。

学校に着てくる白いコートを着ているところを見ると制服のままなのだろう、黒い髪の毛が北風に揺れている。

力を抑えているのか瞳は青く光っていない。

俺の前まで来るとその冷たい瞳で俺を見下ろした。

「何故、あいつがハルの近くに居る」

「実は金曜日にミウと別れてから菜露の目の前で拉致られたんだ。そしてビルの地下に閉じ込められた。消すつもりだったのだろう」

「何故、私を呼ばなかった」

「呼べなかったが正しいかな。その地下室には麟堂も閉じ込められていたからな」

「閉じ込められていた？ 人狼なら地下室から逃げ出すなんて造作もないだろう」

「それが出来る状態じゃなかったんだ。もしあの場にミウを呼び出せば怒りに飲まれ蹴散らすだろう」

「当たり前だ。俺は殺されかけたんだぞ」

「だからだよ。彼女は回復が出来ないくらいまで衰弱していた。俺がへし折った腕さえ腫れ上がり全身には蹴り飛ばされ痣だらけだった。放っておけば良かったなんて言うなよ、そんな事を言えばこの場で仮契約を解約するからな」

「解約すれば良いだろう。俺はあいつを許せない」

「それは美雨先輩としてか？ それとも」

「どちらもだ！ 表裏一体だと言った筈だぞ」

「そうだな。もう一度だけ聞いて良いか、何でミウは人の味方をし

ている？」

「それは……」

「人間の男の子が命を救ってくれたから。その男の子はもしかしてミウがヴァンプだったのを知っていたんじゃないのか？」

「何でそんな事を」

「推測だ。美雨先輩は俺に『この世に有ってはいけないものはやっぱり消えるべきなんだよ』と言った。それは恐らく牢に閉じ込められていた時に言われた言葉なんだろう。それならばミウは幼い頃から自分がヴァンプだと言う事を知っていた。だから消される理由を少年に話したんじゃないかと」

「その通りだ。俺は男の子に理由を話した。それでも少年は」

「助けてくれた。だからこそなんじゃないか？ 弱いものを助けるのは力あるものが行うべきだと。でも、これだけは知っておいて欲しい。どんなに力を持っても死んでしまったものは救えないんだ」

体から力が引いていく。まるで地面に吸い取られていくように。

そして失う事の怖さを再び思い知らされた。

「ハル、お前……」

「気づいていたんですね。俺は『死』と言う言葉が苦手なんです。

雪宮月音の話は」

「竜ヶ崎からアメフトの試合の時に聞いた。ハルの恋人になるはずだったとそして震災で」

「そうですね。あいつが大好きだったアメフトの試合を見に行く約束をしていたんです。春季の高校の大会でした。当日になって親父の仕事の都合で俺が後から会場で合流する事になってしまったんです。そして震災が起きてしまった。俺はこっちの駅で大きな揺れを感じました。電車は全く動かずニュースでは大騒ぎになっている。どうする事も出来ずに情報が欲しくって駅を飛び出してテレビが見られる場所に行くとともにでもない状況になっている。そんな中で俺が選ぶべき道は唯一つだった」

「まさか、探しに行ったのか？ でもどうやって」

「中学生の未成年の俺にできる事なんて何もありません。霧華に頼み込みました。俺の母親の家はイタリアでも有数の名家なんです。母親と言っても顔や声すら知りません。自分の命と引き換えに俺に命を与えてくれたんです。そして霧華はそんな母に仕えていた。頼れるものは何でも頼りたかった」

「良く力を貸してくれたな」

「不幸中の幸いと言えいいのか霧華自身も被災地に向かうつもりで居たので、多少の対価を支払う事を条件にですけどね。直ぐに月音がいた場所に向かいました。そこはこの世の地獄だった。建物は殆ど倒壊していて瓦礫の山で、津波による被害も酷く未だに行方不明のままの人が沢山居ます。恐らく見つかる事は無いでしょう」

「それで月音さんは……」

「俺が見つけました。待ち合わせをしていた高校でね、崩れ落ちた鉄筋コンクリートの校舎の中から助けを求めるように腕だけが。その指には俺がプレゼントしたおもちゃの様な指輪があって」

「しかし指輪だけじゃ」

「DNA鑑定しましたから間違いないです」

「DNA鑑定？」

「ええ、形が残っていたのは腕だけです。骨は碎け、肉は引き千切られ」

「もういい！ もう止めてくれ」

ミウの姿が美雨先輩の姿に戻り美雨先輩の瞳から大粒の涙が零れそうになっていた。

「そうですね。この話は止めましょう。仮契約の話ですが白紙にしてください」

「何でそんな事を。今更……」

「確信がある訳じゃないのですが気になる事があるんです。これは俺自身の問題で美雨先輩には関係ないことなので巻き込みたくないです。今の俺にはそれを確かめるだけの術もない。だからです」

「気になる事って何なの？」

「やっぱり聞いてくるんですね」

「当たり前でしょ。関係ないとか巻き込みたくないなんて言わないで。ハル君を闇の世界に巻き込んだのは私なんだから」

大粒の涙が地面に落ち吸い込まれていく。

全てを話せば美雨先輩いやミウの性格から言えば勝手に動くだろう、そんな事になれば確実に返り討ちに会うことは目に見えている。

何処まで話せば言いのか躊躇いが先に立つ。

何故、俺を連れ去る為に待ち伏せが出来たのか。

人狼の麟堂がどうしてあそこまでボロボロにされ衰弱していたのか。それにドアに施されていた結界か封印。

そしてあのイタリアで撮られた家族写真。

点が少しずつ繋がっていき失われていたパズルのピースが揃っていき、くがどれも美雨先輩に話せる内容ではなかった。

「美雨先輩、聞いてください。実は亀梨という苗字は鬼が無いと書いて鬼無だったんです。先祖が鬼よりめでたい亀と言う字をあてて亀梨になったんです。そして昔話の話のように鬼退治をしていた一族だと冗談交じりで聞いたことがあるんです。実際に日本には鬼の付く地名や苗字はたくさんありそんな土地には必ずと言っていいほど鬼の話が伝承されています。四国には鬼無と言う地名が実際にあり桃太郎伝説と結びついています。中にはスサノオは鬼だったんじゃないかなんて言う人も居ます」

「スサノオってヤマタノオロチを退治した。そんな神話の話なんて」

「でも本当に居るじゃないですか鬼の力で鬼を退治している人が」

美雨先輩を見ると顔がほんのり赤くなっている。

「私はただ。でもハル君は」

「俺だって先輩が現れるまで半信半疑でした。鬼は元々『悪い者』

『恐ろしい者』『強い者』を差し異形の者の総称だった。ミウの言う闇の者そのものです。あくまで推測にしかすぎないですけどね」

「だからってハル君が闇の者だった確証はないでしょ」

「そうですね。でも一つだけ確証があることです。俺は闇の者ではないかもしれないけれど裏の世界の人間です」

美雨先輩の瞳が一瞬だけ泳ぎ息を呑んだ。

「俺の母親の家はイタリアの名家です。しかし裏ではマフィアでさえ逃げ出すような事を平気でしていました。そして子どもの頃はその家で英才教育を受けていました。殺戮マシーンになるための」

「でもハル君は」

「優しいですか？」

「うん、優しいよ。だからハル君には決して人殺しなんか出来ない。だって私の事を命まで投げ出して救ってくれた。それに力は使い道さえ間違わなければ良いんだよ、闇の力だって人を助ける事が出来るんだもん」

「美雨先輩には敵いませんね。麟堂は孤児だったそうです。でも今は優しい両親と暮らしています。両親は彼女の闇の顔を知りません」

「もしかして、脅されてあんな事をさせられていたの？」

「はい、本人から直接聞きました。それと美雨先輩」

「もうこの話は終わり。私は仮契約だろうがハル君から離れる気はないからね」

「散るまでですか？」

「うん、ヴァンプは散らないもん。永久に」

黒

雪の様な人だと思った。

何処までも白く全てを包み込んでくれる。

触ると冷たいかもしれないけれど雪の中はとても温かい。

穢してはいけないと思った。

闇黒の人間が触れれば儚くも薄汚れていく。

全てを断ち切るために。

まずは己を繋いでいたものを断ち切る。

肉体に埋め込まれていた超小型の発信機のような物を噛み潰すと。

そいつはすぐさま現れた。

「やはり黒幕は身内か」

「こんな夜中の公園で何をしている家に帰れ」

「試合に出したのは確かめる為だな」

「何の話だ」

「左目 封印 記憶」

それだけを言うと俺の目の前に立っている漆黒の刃の様な女は口を噤んだ。

「まだ、しらを切りとおすか？」

「やはりそうか」

「随分と手の込んだ事をするもんだな。まあ、あいつに感づかれな
い為か」

「何が言いたい」

「そのまんまだよ。で、どうするんだ。この場で消すか？」

「私にはそんな力は無い」

「嘘をつけ。アリアの眷属の癖に」

「牙を折りカルマになったのだ。もう昔の話だ」

「一緒に散ったという事か」

「散つてはいない、歩き続ける為だ」

カルマとは時を止めた者を意味するらしい。

ヴァンプは牙を失えば力の大半を失い、人と変わらなくなるが流れ続ける血液はヴァンプのそれで治癒能力は衰えなので血液を補充しなくて良いらしい。

それ以外は何も変わらない、限りなく人間に近いヴァンプ。

ホワイトアッシュの杭でも打ち込まれない限り永遠に生き続ける事になる。

そして孤独との戦いが永遠に始まる。

「こんな事をしてどうする気だ。直ぐにアソシエーションは気づくぞ」

「その為にお前を呼んだんだろ」

「何をする気だ。アソシエーションに刃向かうつもりじゃ。奴らにとつてそれは神への冒瀆にも等しい行為だぞ」

「だからどうした。アリアは何をして来たんだ？」

「それは……ふっ、貴様如きに何が出来るというんだ。ディオを蹴散らすと？ 若造の貴様にそんな事はできやしない」

『ディオ・アソシエーション』自らを世界の秩序を守る神だと信じている者の集まり。

その本拠地はイタリアのシチリアにある。

シチリアはマフィアの巣窟の様な土地で色々と都合が良いらしい。ブラウン神父曰く。

『賢い人は葉をどこへ隠す？ 森の中だ。森がない時は、自分で森を作る。一枚の枯れ葉を隠したいと願う者は、枯れ葉の林をこしらえあげるだろう。死体を隠したいと思う者は、死体の山をこしらえてそれを隠すだろう』と言う事らしい。

ブラウン神父の言葉を借りればディオは己を隠すためにマフィアを作り上げたのかもしれない。

「今から報告するか？ それならば俺もこの場に呼び出すまでだ」スマートフォンを取り出し画面をスクロールする。

「本気か？」

「あいつが真実を知ればどうなるかな？」

「貴様、この私を脅すというのか」

「結果は見えている。俺の特異体質を知らないはずないよな」

「結果は見えているか。だがな、切り札は最後まで伏せておくべきだ」

横に寝かすように倒されたベレッタP x 4 Stormの銃口がいつの間にか俺の額に当てられていた。

大半の力を失ってもこんな事を平然と顔色一つ変えずに行ってしまう。

失う前のことを考えただけでぞっとする。

「撃てよ」

「確実に散るぞ。この弾頭にはデイト特製の特殊なウィルスが仕込まれている、闇の者の体内に入れば瞬時に灰になる」

「この瞳を散らせるならな。切り札は最後まで伏せておくのがセオリーなんだろ」

体の中に流れるアリアの血が俺の瞳の色を変える。

俺の額に銃口を当てている彼女の顔色が瞬時に変わり、銃口が音も力も無く下がっていく。

「私に何をしろと？」

「出来もしない事を頼むつもりは無い、ただ指示に従って行動してもらおう。簡単な事さ、絡んだ系の大本を断ち切るだけだ」

これから行おうとしている事を時系列に従いながら説明していく。話を進めるうちに段々と目の前の顔が険しくなっていく。

「本気で言っているのか？」

「何の為に前を呼び出したと思っている。大本を断ち切れば自由になれる。その対価として失う物もあるけどな。それはこの計画に関わる者全てに言える、いわゆる痛み分けて奴だ。だが計画はあくまでも計画で全て思い通りに動くなんて考えていない。その時はエンディングまで一気に飛ばせば良い」

「仕方が無い協力してやる。ただしこれだけは言っておく。デイトを碎き散らして来い、それが唯一つの条件だ」

鬼が出るか蛇が出るか運命のブラックボックスかパンドラの箱が開けられた瞬間だった。

そして俺が唯一危惧する鼻の効く奴にも釘を刺しておく『手出し無用』と。

北海道

今年の冬は例年以上に寒かった。

そんな寒い週末に氷点下の世界に行かなきゃならないんだ。

憂鬱な気分を更に陥れるように空は鉛色一色に染まっている。

「亀梨、元氣ないな」

「ああ、毎日が激流くだりしている気分だからな」

「気持ちいいだろうな。筏で激流下り」

「能天気で良いな。俺は木の葉の気分だよ」

午後最後の授業が終わる頃にそんな事を東雲と話しているとポケットの中でスマートフォンがブルブルと着信を告げた。

取り出してみるとディスプレイには『N e r o e b i a n c o』の文字が浮かんでいる。

直ぐにホールボタンを押した。

店から？ 親父は午後から不在のはずだけど呼び出しは受けていない。

トラブルか何かか？ スタッフで処理しきれないトラブルなど起きるはずも無く、とりあえず授業が終わってから折り返し電話してみた。

「代理、申し訳ございません。お客様がどうしても代表者にお会いしたいとお待ちなのですけれど」

「オーナーは？」

「連絡が取れないのです」

「判った。直ぐに行くから時間に余裕があるのなら待っていてもらって」

「本当にありがとうございます」

俺が高校に入学する頃までは親父の自由奔放さにスタッフは神経を磨り減らして疲弊しきっていた。

当然のように中には不平不満を漏らす者も現れ店は軋み始めていた。

そんな状況で時々店に顔を出していた俺に白羽の矢が立ち投げ所にされてしまった。

オーナー不在の時は特に顔を出さないわけにも行かず、東雲と久しぶりに駅前で遊ぶ約束をキャンセルして店に向かった。

「で、代表者に是非とも会いたいお客様がジャンガリアン2匹と犬な訳？」

「ジャンガリアンじゃないもん」

「ジャンガリアンじゃないです」

「ワン！」

怒気を頼に詰め膨らませる小動物が2匹と嬉しそうに尻尾を振る犬が一匹店内にいた。

「お客様。ペットのお持込はご遠慮願いますか？」

「晴海、酷いよ。今日はちゃんと並んできたんだから」

「で、何も注文せずに客だと？」

「うっ、意地悪」

裏口から走り込んできて着替える前に店内を確認すると3人が満面の笑顔で手を振っていた。

首謀者はどう考えても菜露で参謀が美雨先輩になり誘われたのが麟堂と言う事になる。

全身から力が抜けていく。

お昼に学食で色々な意味合いの視線をあたり一面から浴びながら4人で食事をしたのが嘘のようだった。

「東雲との約束を反故にしてきたのに友情にヒビが入ったらどうするつもりだ」

「それじゃ晴海は、私達の心にささくれが出来てもいいの」

「それは俺の責任の範疇を超えている」

「やさぐれてやる」

「ご自由にどうぞ」

「なあ、亀梨。この店がお前の店って本当か？」

「あんな、俺の店のわけが無いだろ。親父の店だ」

麟堂が我関せずと嬉しそうに質問を浴びせてきた。

「噂には聞いた人気店なんだが、中々並んでまで買いに来られないのでな。今日は両親に是非とも買って帰ろうと思う」

「とりあえず、ありがとうと言っておく」

「ああ、何を買おうか楽しみだなあ」

「で、今日も何用なんだ？」

「あの、ハル君。嘘ついたみたいでゴメン」

「もう良いよ。いつもの3つとブラックを1つ持ってきて」

スタッフに声を掛けると笑顔で答えてくれる。

とても有り難い事だと思う、後でスタッフに一応説明だけはしておこうと心に誓った。

目の前では蜂蜜入りホットミルクを飲みながらワイワイと華やかに差し入れの焼き菓子の盛り合わせに舌鼓を打っている可愛い部類に入るであろう3人の女の子がおしゃべりをしている。

差し入れの焼き菓子は焼きムラが出来たり形が崩れたりした力ヌレや今人気の焼きドーナツにマドレーヌそれにチョコブラウニーやクッキーだった。

「ねえ、ハル君。週末の予定は？」

「悪いが、仕事で出掛ける」

「うう、デート出来ないんだ。でも仕事じゃ仕方が無いよね。はあ」

美雨先輩ががつくりと肩を落とした。

「でも晴海、お店に来れば会えるんでしょ」

「出掛けると言っただけだ」

「土日の2日間も？」

「3日だ。金曜日から出掛ける」

「ええ、金曜日もハル君に会えないの……寂しいよ」

「仕方が無いと言っただけは美雨先輩だけだな」

「ううう……」

そんな顔をされても困るのだが毎年この時期には親父が俺が必ず出向いて行く場所なので外す訳にはいかなかった。

「亀梨、何処に行くんだ？」

「北海道だ。スタッフから親父の伝言で頼まれてな」

「『北海道？』」

美雨先輩と麟堂は嬉々として楽しそうに答え、菜露だけが意気消沈して答えた。

「どうした、菜露」

「うっん、別に」

「行きたいのか？」

俺の問いかけに菜露は首を振るだけだった。

菜露は俺に対して遠慮が無いように見えるが決してそうではない。どこか必ず一線を引いている兄妹のよう接していてもやはり本物ではないからかもしれない。

そして霧華に対しては決して我侭も言わず。生活費もバイトをして霧華に渡している。

それに対して霧華は何も言わないが何かを待ち続ける姿勢を崩さない。

何を待ち続けているかと言われれば言わずも知れた菜露が自然に姉妹の様に何でも言ってくれる事なのだが、膠着状態のまま今に至ってしまっている。

二人の中間に俺がいて緩衝材の役割をしていた。

温くなってしまったブラックティーに口をつけスマートフォンを取り出して霧華に電話を掛ける。

2コールもしないうちに霧華が電話に出た。

「悪いが金曜から3日間、菜露を借りるぞ」

「何をするつもりだ」

「北海道に連れて行く、良いかな？」

「対価は何だ？」

「あのな、そんな事を言うから菜露が遠慮するんだ。白い」

「赤い蟹だ」

霧華がそれだけ言い切って携帯も切った。

北海道といえば『恋人たち』なのに却下されたが了承は取れたようだった。

「そんな顔をするな。金曜の朝に迎えに行くから準備しておけ。荷物是最小限だぞ」

「うん！」

菜露の頭をなでると喜色満面の顔で答え。

美雨先輩と麟堂は何故か嬉しそうな顔をしてそっぽを向いていた。

翌朝、霧華のマンションの下に行くとまん丸になったジャンガリアンが立っていた。

「ジャンガリアンじゃないもん」

「冬毛か？」

「ぶう、晴海の馬鹿」

「霧華はどれだけ過保護なんだよ」

ファー付のモッズコートを脱がして重ね着している物を数枚脱がせると、やっぱりジャンガリアンだった。

「変わらないか」

「酷い、変わった。動きやすいもん」

「だったら霧華にそう言え。遠慮なんかするな、霧華は菜露が我侬を言うのを待っているんだ」

「う、うん。晴海がそう言うならそうする」

「少しは自分で考えろ」

「晴海が怒った」

「当たり前だ。菜露だから本気で怒るんだ」

「好き？」

「……の次だな」

「言っちゃお」

「置いていく」

「北海道！ 行くもん」

羽田からジャンボで1時間半のフライトで新千歳空港に到着した。待ち合わせの場所に向かい自動ドアを出ると身が引き締まり途端に吐く息が白くなる。

うす曇だが雪は降りそうにない。

辺りを見渡すと直ぐに声を掛けられた。

「おい、ハル坊。こっちだ」

「ご無沙汰しています、小次郎さん。ハル坊は止めてくださいよ」

「何を言う。まだケツの青いガキが」

「本当に敵わないな」

夜中に出会えば確実にヒグマに間違われそうな体格にひげ面で、デニムのオーバーオールに厚手の紺色のコートを着て防寒用の長靴を履いている。

夏場はコートが薄手のジャンパーになり長靴が防寒用になっていないだけで基本的に一年中この格好のままで、流石に親父の店にこの姿で現れた時はスタッフ一同度肝を抜かれた事がある。

親父の旧知の間柄で名前を和泉小次郎さんいずみこじろうと言う。

本人曰くこの格好が正装らしい。店では熊さんで通っている事など本人は知らない。

「晴海、この人がもしかして熊さん？」

「それは内緒だぞ」

「おお、もしかして妹（仮）の菜露ちゃんかな？」

「ぶう、妹（仮）じゃないもん。一応、恋人候補（？）だよ」

「どのみち括弧・括弧綴じなんだな。こいつが朝香菜露だ、霧華の義理の妹だ」

「ああ、あの網走みたいな姉さんか」

例えが微妙だ……

道東では温暖な方だといわれているが網走と言われて直ぐに思いつくのがオホーツク海の流氷と刑務所だろっ、だからってそんな場所

を例えにしくてもと思う。

菜露は俺の後ろに隠れるようにして小次郎さんの顔を覗いていた。

「あのな、喰われたりしないよ。味噌ラーメンのような人だ。濃ゆくて温かい」

「微妙……」

小次郎さんは豪快に笑い飛ばしながらグローブの様な手で俺の肩を叩いている。

「で、本命は何処だ？」

「仕方ない、呼んでみます。霞！」

「呼んだのか？ 俺の事を呼んだのか？」

「早！」

狼の気高さや気品なんて微塵も感じられない、まるで飼い主に名前を呼ばれた子犬と言った方がぴったりの表現だろう。

目をまん丸にして輝かせ尻尾を千切れんばかりにブンブンとこれでもかと言くらい振っている。

そして左手には……

全身から力が抜けてしゃがみ込んでしまった。

「がははは。お譲ちゃんは修学旅行かな？」

そこには明陽学院大学付属高等学校の制服に白いコートを着て指定の力バンを持つている美雨先輩が困惑顔で立っている。

もちろん足元はこげ茶色のローファーだった。

麟堂は襟元にファーが付いたキャメル色のレザーコートを着て細身のジーンズに茶色いレースアップブーツを履いている。

もちろん雪仕様になっているのだろう。そして小さなバッグを肩に掛けている。

小次郎さんは腹を抱えながら豪快に笑い続けた。

「おっさん。何がそんなに可笑しいんだよ」

「おお、すまん。すまん。あんまりにハル坊がヘタレなんだな。その成りじゃ寒いだろう、車に乗った、乗った」

麟堂が小次郎さんに噛み付くと直ぐに小次郎さんが3人を車に案内

した。

「うわあ、綺麗だな」

「温かいよ。晴海早く」

麟堂と菜露が後部座席に飛び込み車の中を見渡している。

仕方なく美雨先輩を先に乗せて俺も乗り込んだ。

真っ黒なボディのデリカは圧巻だったインチアップされホイールも黒で統一されている。

そしてルーフには4灯のルーフランプが付いていてキャリアまで組んである。

車内は純正の落ち着いた感じのベージュのシートで2・3・3の8人乗りの仕様になっていた。

「しかし、ハル坊にも制服までは判らなかったか」

「おっさん。どう言う意味だ？」

「あんな、おっさんは勘弁してくれ。俺は和泉小次郎だ、ハル坊の親父の親友とでも言っておこう」

「俺は麟堂 霞だ。亀梨の下僕だ」

「ほほう、それじゃ霞ちゃんがハル坊の彼女じゃないんだな」

「それは全く違うな。亀梨は命の恩人だからな」

「そうか恩人か。ハル坊は凄く勘が良いんだよ。だから人の先を読む事が出来るんだ」

「それは予知みたいなものか？」

「第六感の様なものだが、予知みたいに未来が見えるとかじゃなくて勘が良いと言った方が正しいかもな。その勘で俺にバンで迎えに来てくれと言ったんだ、君ら二人が来るのを恐らく判っていたのだろっ」

「へえ、凄いな」

小次郎さんの言葉に麟堂はとても感心して目を輝かせている。

「そんな凄いもんじゃねえよ。誰だってあの思惑顔をみれば直ぐに想像が付くだろ。それに菜露を連れてくる事は決まっていたからケツが痛くなるジープで迎えに来られるよりましだからな。で、美雨

先輩は何で制服なんだ？」

「だって、北海道に行くなんて言ったら大変な事になるし。お父さんがそんな事許してくれないもん。だから麟堂さんの家に泊まるって……」

「嘘をついて出てきたと学校に行く振りをして。で、小次郎さんは何でこんな車なんだ。白いバンがあっただろ」

「あんな、ハル坊。あれは自家用といっても牧場で作業に使ってるんだ。そんな車でお前がはじめて連れてくる彼女を出迎えに来られるか。あほが」

「計算づくか」

「お前ほどじゃないがな」

「クチュン！」

可愛らしいくしゃみが隣から聞こえてくる。

黒のダウンジャケットで美雨先輩の体を包み込むように抱きかかえると小次郎さんがルームミラーで俺と美雨先輩を見ている。

「ハル、お前の彼女もちゃんと紹介しろ」

「美雨先輩だ。鳳条美雨、一つ年上だ」

「鳳条？ まあ良いか。とりあえず服を買わんとな」

新千歳空港から程近い大きなアウトレットモールに連れて来てもらっていた。

理由はただ一つ、美雨先輩の洋服を買う為だけに。

「うう、そんなに強調して言わないで……よ」

言葉がフェードアウトしている、反省はしているようだ。

が、制服姿の美雨先輩を連れて歩くと言うか冬の北海道でローファ―を履いて歩くのは危険すぎる。

広い吹き抜けのドームで待ち合わせをして菜露と霞に美雨先輩の買い物頼む。

女の子の買い物は女の子同士のほうが判るから俺と一緒に行っても仕方が無いだろう。

この際言っておくがナンパイイベントなんて起きない方が無難だと思う。

時間が無い事を告げると俺からカードを受け取った菜露と霞に引き摺られる様にしながら美雨先輩が助けを求めるように俺を見ていたがここは見えない振りをした。

菜露は俺のカードで使いを頼む事があるので任せておけば安心だ、小次郎さんも用事があると言って買い物に行ってしまった。

ベンチにでも腰掛けて待つ事にする。

サザンやスピッツのバラードが流れている。

今は松任谷由美のリフレインが叫んでいるがBGMで流れていた。

「晴海！」

「亀梨！」

菜露と霞に呼ばれて振り返ると美雨先輩が恥ずかしそうに立っている。

白いニット坊を被りベージュ色のファーが付いた白いダウンを着ている。

ダウンの裾からはモコモコのスカートの裾が見える白いワンピースか何かだろう、デニレギに足元はイエローヌバックのショートブーツを履いている。

先輩の栗毛色と言うか不思議な色のウエーブがあるロングコートが際立って見える。

「で、菜露も着替えたのか？」

「うん！」

いつの間にか菜露は上着のコートは変わらないがパニエで黒いスカートが少しだけ広がっていて、黒いニット帽を目深にかぶっていた。

「あの、亀梨」

「何だ？ 菜露に何か買ってもらったんだろ。構わないさ」

「本当か？ ありがとう」

茶色い耳あて付のスポーツキャップを霞が嬉しそうに頭に被った。

「うう、放置プレーなんだ」

「NGワードです。美雨先輩」

そこに小次郎さんが白い買い物袋を提げて大またで戻ってきた。

「おお、皆揃ってるな。へえ、可愛いな。ハルの彼女はまるで雪の妖精だな」

「いつの間にハル坊から成長したんだ？」

「あん、守るべき女が出来たら坊じゃなく男だろ。そう言うこった」
「まあ、良いや」

雪の妖精ね。言い得て妙だな、確かに雪の様な人だとは思うけど教えて口にしない。

仮契約……近すぎず遠すぎず曖昧な距離で恋愛には不向きな契約だな。

白銀の世界

車で北海道の内陸をひた走る。

白一色の世界。

木々も原野も真っ白に染まり、色々な動物注意の標識が立っている。美雨先輩や菜露に霞は小次郎さんが買ってきてくれたタコ焼きを美味しそうに頬張っている。

綺麗なデリカの車内にたこ焼きのソースの香りが立ち込めている。

「ハル君の分もちゃんとあるよ」

「俺は良いよ。皆で分けて食べたらいい」

「ハルは相変わらずストイックだな。もう仕事モードか、あん？」

「その為に北海道まで来たんだし、それがメインだろ」

「うう、何だかゴメンね。仕事の邪魔しに来ちゃったみたいで」

「ハル、ちゃんとフォローしてやれよ。男だろ」

「俺が呼び寄せたようなものだからな。来て欲しくなかったら北海道に行くなんて言わねえよ。それにこんな思い出も良いだろ」

「ハル？ おもいつきし殴っていいか」

「仕事は済んだらって、わったよ。俺が悪かった。ゴメン」

デリカが信号も無いまっすぐな一本道でゆっくり減速していく。

美雨先輩の切なさうにうな垂れる姿を見て小次郎さんがルームミラーの中で俺の事を真顔で怒っている。

車から降りた瞬間に細切れにされてトドやアザラシの餌にされそうな雰囲気だ。

俺が右手を美雨先輩の左手に重ねると驚いたように手を引っ込めようとすると、逃げられないように手を掴むと諦めたのか美雨先輩の手から力が抜けた。

そして指を絡めるようにすると美雨先輩の顔が赤くなり手に力がこもった。

「これで良いんだろ」

「なあ、亀梨。もう着くのか？」

「ただだよ、霞はそれだけじゃ足りないだろ。俺の分も食べて良いぞ」

「ほ、本当か。遠慮なく頂くぞ」

後ろの席から顔を除かせた霞の目の前にタコ焼きの箱を出すと嬉しそうに受け取り顔を引っ込めた。

小次郎さんは握った手を見せるとため息を付いて車を加速させた。しばらくすると3人は朝が早かった為か静かになり寝息を立て始めた、俺の右腕に美雨先輩の重みを感じる。

俺は窓の外の白銀の世界に目をやった。

相変わらず北海道はでかいを実感する。

かれこれ2時間はデリカで走り続けている。

東京なら関越・軽井沢・館山あたりだろうが、でもここは北海道…

：

美雨先輩・菜露・霞の3人はタコ焼きを食べて満足したのかぐつぐつと寝ている。

コンポからはスローバラードが流れ、流石に白一色の世界にも飽きてきた。

すると小次郎さんが静かに口を開いた。

「ハルは美雨ちゃんの事は本気なのか？」

「本気と聞かれればそうなんだろう。今までの様にいい加減な気持ちではないのは確かだ」

「随分と曖昧な答えだな」

そう小次郎さんに言われるまでも無く曖昧だ。

これから先の事を考えるとこれ以上近づけばその反動は大きい。それでも俺は……

「手遅れだな。ハルが何を考えているのか俺には判らねえ。でも一つだけ言える事がある恋愛なんてな気付いた時には手遅れなんだよ。知らねえ間に堕ちているもんなんだ。だがな、手前の心を偽るよう

な事だけはするなよ、相手が一番傷つく事だかな。それにハルになら判るはずだ、誰にも先の事なんて判らねえからこそ今を一生懸命に歩いているんだよ」

「手遅れか。そうかもな。最近になって失っていた幼い頃の記憶を取り戻してきているんだ。それは美雨に出会ったからかもしれないんだ」

「それって子どもの頃に出会っていたと言う意味か？」

「はつきりと思い出せた訳じゃないけどな。そう言うこつた、絶対に言うなよ」

「やつと男の顔になつてきたな。そろそろ着くぞ」

道の向こうに道を挟むように小高い丘の上に横に広がるように裸になった樹木が立ち並びその先にやがて牧場の看板が見えてくる。

小次郎さんが駆るデリカが『まほろ牧場』と書かれた看板の前を左折すると前方に大きなログハウスの母屋と従業員用のログハウスに牛舎が目飛び込んでくる。

それ以外の世界は枝だけの木々と雪だけしか見えない。

空はいつの間にか青空に変わっていた。

「着いたぞ。起きろ！」

「ふあゝ」

「んゝ」

「むにゃ？」

3人3様の寝起き顔から一瞬で目を輝かせて外の世界に釘付けになっている。

車から降りると目の前の牧草地にはフカフカの新雪が積もっている。先陣を切って俺に向かってきたのは……霞だった。

血が騒ぐのか走り回りたくてウズウズする様に瞳が揺れている。

正しく犬のそれだ。

「好きにしる」

「おう！」

拳を突き出し一目散に新雪が積もる牧草地に全身でダイブしている。

霞につられて菜露も美雨先輩もパウダースノーを舞い上げながらはしゃぎまわっている。

そこに黒い影が突進していき3人と1匹？

「ん」 どこからどう見ても親犬と子犬が3匹にしか見えないな」

「小次郎、お客さんなん？ コラ！ スラッシュって……ハルちゃんやあ！ よう来たなあ」

声が出た次の瞬間に腰に軽い衝撃を受ける。

母屋のログハウスから顔をだし愛犬の黒ラブに声を上げ、鮮やかな紫のダウンコートを着てスラッシュ以上の勢いで俺に向かって突進してきて、タックルを喰らわしたのは小次郎さんの奥さんであるまほろさんだ。

ちなみに牧場の名前は奥さんの名前の『まほろ』と住みやすい場所や素晴らしい場所を意味する日本の古語である『真秀場』まほろばをかけている。

長い黒髪を一つに纏め目鼻立ちがはっきりとした綺麗と言うか可愛い部類に入る人だろう。

天然系の大和撫子といった方が判り易いかもしれない。

クールな霧華とはある意味対極をなす人だと思う。

でも見かけに騙されてはいけない。

まほろさんは夏になれば北海道の夕陽の様なカラーリングのフルチューンされたカワサキ Ninja ZX-10を駆り、サバゲーにおいては道内では知らない人がいないくらいの有名人で。

小次郎さんともサバゲーを通じて知り合い結婚した兵だ。

「おいおい、相変わらずハルラブだな」

「ええ、小次郎。どうしてハル坊じゃないの？」

「ほれ、あそこでスラッシュとじゃれている子犬の1人はハルの彼女だよ」

「……彼女？ ハルちゃんの？ 嘘」

まほろさんがこの世の終りの様な顔をしている。

俺のイメージってまほろさんの中ではどんな風にとち狂っているの

だろう。

仕方なく3人を呼び戻すことにする。

「美雨！ 菜露！ 霞！」

「晴海、呼んだ？」

「亀梨、呼びか？」

「ほら、2人とも雪を払えよ。真っ白だぞ」

菜露と霞が息を切らして走って慌てて体中の雪を払い落としている。その向こうで雪の上にしゃがみ込んで真っ赤になり俯いている雪の妖精が……

仕方なく迎えにいくと黒ラブのスラッシュがじゃれ付いてきた。

「スラッシュ、お前。でかくなったなあ」

「ワン！」

「スラッシュ。ハウスだ」

「ワン！」

嬉しそうにスラッシュがまほろさんの元に駆け出していく。

「行きますよ」

「ハル君が呼び捨てにした」

「それじゃ」

「嫌だ」

先輩と言おうとすると口を尖らせて拗ねているのに手は俺のほうに突き出している。

ため息を付きながら手を取らずに小脇に抱えると手足をばたつかせている。

「お前もハウスだ」

「私は犬じゃないもん。ジャンガリアンでもないからね」

「ああ、美雨は静かにしろ」

「うう、意地悪」

皆が待っている場所ではスラッシュがまほろさんに雪を払ってもらっている。

その横で小次郎さんが相変わらず豪快に笑っていた。美女と野獣の

カップルそのまんまだった。

「彼女がハルちゃんの恋人さんなん？」

「鳳条美雨。ひとつ上の先輩です」

「ひゃく可愛い子やね」

美雨先輩はまほろさんにスラッシュと同じように雪を払ってもらっている。

犬と変わらないと言うか小動物だしな。

「なんで先輩に戻るの？」

「美雨」

名を呼びながら顔を近づけると火山が噴火した様に真っ赤になってフラフラしている。

ダウンの襟を掴み上げて母屋に向かう。

「寒かったでしょ。ストーブで暖まりましょい」

「「はい」」

菜露と霞がログハウスの母屋に駆け込んでいく。

「うう、やっぱりジャンガリアン扱いなんだ」

「何か言いましたか。美雨先輩」

「ハル君の意地悪！」

まほろさんに促されて母屋へ向かう。

母屋のログハウスには薪ストーブがあり床はムク材なのに低温式の床暖房が入っていて春の様に暖かい。

上着を脱いでリビングに案内される木の温もりが心地いい。

いつ来ても癒される空間だった。

ソファに体を埋めていると3人は家の中を見渡していた。

「うわぁ、ログハウスなんて始めて」

「憧れちゃうね、こんな生活」

「俺はこう言う所に住むのが夢なんだ」

そこにまほろさんと小次郎さんが温かい飲み物を持ってきてくれた。トレーの上ではマグカップがいくつも湯気を立てている。

「そんなに沢山どうするんですか？」

「あのな、ハル。とつとお前の言う仕事を終わらせるぞ。彼女達が可愛そうだろ、それにお前も親父に言われて来たただけだろうが」

「まあ、そうですね。俺はここに来るのは嫌いじゃないですからね」

木のテーブルの上には色々なホットミルクが並んでいる。

スタンダードなホットミルクやシナモンスティックが入れられたものやチョコミルクまで。

「それにお客様の変わりにね」

「まあ、そうですね」

小次郎さんとまほろさんに説明を受けながら味見をしていく。

「うわぁ、この牛乳ってそのままでも美味しい」

「菜露ちゃん。うちの牛乳は生乳だからね。絞りたてなんよ」

「凄い、初めて飲んだ」

「日本でも数少ないんだよ、生乳は管理が難しいからね。でも本当の牛乳の味を知ってほしいからね。それにこんな笑顔が見られるなら何も苦にならないよな」

「そうやね」

中でも一番人気があったのがアカシアの蜂蜜を入れたホットミルクだった。

この蜂蜜も100%北海道で採取されたものでとても良い香りが立ち上がってくる。

「でも、あんまりホットミルクってメニューに出しているお店は少ないよね」

「インパクトが少ないし家で手軽に楽しめるからな」

「そうだね、もう少し捻りがあっても良いかな」

「ちよつとキッチンを借りますね」

「ええけど、何をするん？」

「フワフワにしてみようかと」

「ええ、そんな事が出来るん」

まほろさんとキッチンに向かうと霞は腰に手を当てて瓶入りの生乳を飲んでいる。

「ぷっはあゝ やっぱり牛乳は瓶だな」

まるで風呂上りの親父の姿そのものだった。

生乳をミルクパンに入れて60 程度に温める。

出来れば加工乳は避けたい、温めすぎると泡立たないので泡だて器で泡立ててから再加熱をすると泡が安定してフワフワになる。

少しだけコツを使えばエスプレッソマシンのスチームを使わなくても作ることが出来る。

飲む前に砂糖や蜂蜜を加えればさらに優しい味になる。

「ハル君、フワフワで美味しいよ」

「ハルちゃん。使ってもええかなあ」

「どうぞ、まほろさんなら美味しく作れると思いますよ」

「で、ハル君。お仕事って？」

「牛乳の出来とこの蜂蜜の味見かな。それとお店で春からだす新メニューにミルク系を更にラインアップしてケーキにも使いたいんだ。プリンなんか良いかもしれないな。それにイチゴと生乳のムースとかな。帰ってすぐに新メニューの試食会もあるからな」

「うわあ、美味しそう」

小次郎さんが感心する様にまるで我が子を見るように目を細めている。

小次郎さんとまほろさんには子どもがいない、それは世間によくある理由で本人たちも気にせずに2人と1匹の生活を楽しんでいる。

それにこの牧場には各地からアルバイトが来ていて、俺も親父に言われて手伝いに来ていた時期もあった。

そして2人は分け隔てなくアルバイトも俺の事も我が子のように可愛がってくれる。

ここが心地よく感じる理由だとおもっ。

夕飯はジンギスカンや美味しい牛乳を使った鮭や北海道の海の幸が

具沢山のシチューがメインで美味しい料理でもてなしてくれた。

寝室は一部屋で川の字状態だったがどれだけ信用されているのか、まだ子どもだと思われるのかそんな事を考えていたら一言で片付けられてしまった。

「ハルちゃんだからやん」

つてどっちなのだろう……

牧場の朝は早い。

それはどこの牧場でも同じことで多少の手順が違っただけでかなり大変な仕事だ。

餌をやり朝の搾乳をして寝床の藁を交換して牛舎の掃除をする。

一通り終わると運動の為に牛たちを除雪した牧草地に放牧する。

放牧すると搾乳できる量は減るがストレスのない健康な牛でいられる。

だからこそ牛乳が美味しいく頂ける。

搾乳した生乳はすぐに瓶づめにされたり加工されてプリンになったりする。

生乳には厳しい基準がありクリアする事が難しい。

それ故に生乳を販売している所が少ない。

そして基準も厳しければ罰則も厳しい、並々ならぬ努力を日々小次郎さんとまほろさんはしている。

尊敬に値する人たちだと思うし、親父も俺と同じ気持ちなのだろう。それも毎年ここに来る理由なのだろう。

「ハルは仕事が速いな」

「まあ、アメフトで霧華に扱われましたからね。体力なら負けませんよ」

「でも、何だか雰囲気が変わったやんね」

「そうですか？」

「うん、柔らかくなっただっていうか」

「美雨に出会ったからですかね」

「まあ、男なら女を泣かすような真似はするなよ」

「今は無いですね」

「今はなのか？」

「小次郎さんは気づいていますよね」

「まあな」

「そう言う事です。先の事は判らない、だから今はです」

小次郎さんは込み入った事はこちらが話さない限り踏み込んでこない。

それでも何かあれば全力で手を差し伸べてくれるだろう。

不思議な事に俺の周りには何故かそんな人が多い気がする。

「ハルの役得だ」

「そやね、ハルちゃんの人柄かな」

そんな事を言われても俺にはピンと来ない。

俺は裏と闇の世界を彷徨っている黒き者だから。

トラウマ

朝食を済ませて小次郎さんに今日の宿泊先の札幌まで車で送ってもらった。

昼前には着く事が出来るだろう。

まほろさんから小次郎さんは買い物を買われていたようだった。

札幌駅前で車から降りて小次郎さんに礼を言い別れた。

時計を見ると昼には少し早い。

寒い路上で思案しても仕方がなく歩き始めると3人はキョロキョロと札幌の景色を楽しんでいる。

「なあ、亀梨。どこに行くんだ？ こんな住宅街の中を」

「晴海、時計台は？」

「ハル君、迷子になったの？」

質問に答えようとすると前方に不思議な物が見え隠れしている。

なんと言えば良いのか中国の無意味に頭のでかい被り物と言え判るだろうか、たしか『かぶり面』という名前だと思う。

そして俺達を見るなり電柱の影に隠れるがかぶり面が大きすぎではみ出している。

「無視しろ」

そう3人に告げて電柱の脇を通り過ぎようとすると俺達の前に飛び出してきた。

面だけなら驚かないがこの真冬の札幌でミニのチャイナドレスを着ている、もちろん肩出しで素足にパンプスを履いている。

「寒くないのか？」

質問に答えずに顔を両手で押さえながら首を振った。

「馬鹿だろ」

返答は同じだった。

徐に頭のとっぺんを掴んで勢いに任せて被り物を回すと少しずれて体も回転して電柱にぶつかり鈍い音がして道端に転がった。

「ハル君」

「晴海」

「亀梨」

「無視だ、無視しろ。何も見えてないからな」

3人の縋る様な瞳を一瞥して歩き出す。

すぐに何の店だか全く判らない店の無地の真つ白な暖簾をくぐり引き戸を開けた。

店の中はカウンターしかなくカウンターの向こうには白髪を後ろで一括りにした頑固そうな親父が座っている。

俺達を一瞥すると険しい顔が綻んだ。

「おお、ハル坊。やっと来たか。待ちくたびれたぞ」

「久しぶりって貸切じゃないよな」

「まあ、似たもんだ。小次郎から電話を貰った時は腰を抜かしそうになったがな」

「一見さんお断りは健在なんだな」

「もちろんだ。で、未奈和を見なかったか？ さっきまで裏に居やがったのに」

「その先でみょうちくりんなお面を被ったチャイナドレス姿の馬鹿が転がっていたけどな」

「あの馬鹿が」

重い腰をゆっくりと上げてカウンターを潜り白髪の親父は店の外に出て行ってしまった。

するとすぐに美雨先輩が声をかけてきた。

「ハル君、ここは何の店なの？」

「ラーメン屋だ。少し変わっているがな」

「でも晴海、一見さんお断りって」

「だから少し変わっているって言っただろ。だからこそ常連になる価値のある店なんだよ」

「亀梨、店の名前もメニューも無いぞ」

「店の名前は『白龍』でメニューは正油ラーメンのみだからな」

「へえ」

「ふうん」

「なるほど」

3人とも感心しきりだ。

それもそうだ高級料亭でもあるまいしラーメン屋が一見さんお断りで店が成り立つかと言えば、この店は成り立っている。

行列も出来ないし看板もない。あるのは無地の白い暖簾だけ。

普通の人なら怖くて暖簾を潜ろうなんて思わないだろう。

勇気をだして潜ってもあの無愛想の塊の様な親父に一瞥されて終いだ。

椅子に座ってもメニューすら無いのだから何を注文して良いのか判らない。

それでも美味しいと評判を聞けば常連に誘ってもらうしか味わえないラーメンなのだから客が途絶える事はほとんど無いに等しい。

今日が特別なだけだ。

しばらくすると北風が舞う外で親父の怒鳴り声が聞こえてくる。

あまりにも可哀想なので風邪を引くぞと声を掛けてやった。

俺達の目の前には4杯の正油ラーメンが湯気を立てている。

そしてカウンターの向こうには白髪の親父と女の子がしょんぼりうな垂れていた。

「頂きます」

手を合わせ、目を閉じ食べ物に感謝する。

白龍の作法の様なもので先ほどいきなり食べ始めようとした霞が親父にお玉で小突かれ涙目になったばかりだった。

スープはこってりしているのに後を引かず、麺は北海道のほとんどのラーメン屋がそうであるように製麺会社の麺を使っているが親父が選り抜いた麺だけの事はある。

そして具は自家製チャーシューが口の中で蕩け、季節の野菜が彩りを添えている。

札幌に来たら必ず食べたい一品になっていた。
カウンターの中から小さくしゃみが聞こえ、女の子が鼻を吸っている。

「未奈和は本当に馬鹿だろ。この寒い中であんな格好をして」

「だってハルが一人で来ると思ったんだよ」

「聞いてなかったのか？」

「どの子が彼女なの？」

「当てたら今度東京に招待してやるよ」

俺の言葉に未奈和が真剣な目で品定めをしている。

未奈和の父親は東京に出稼ぎに行っていて母親も仕事をしているために、祖父である白龍の親父の店に居ることが多い。

手伝い兼マスコットの存在になっている。

そして未奈和の回答は外れ、再度のチャンスにも外し美雨先輩を盛大に凹ませた。

「亀梨、この子は誰なんだ？」

「安西未奈和。今度中学3年になる。霞を小突いた親父の孫だよ」

「ふうん、未奈和ね。でこのおっさんは？」

「近江 優。未奈和の爺さんだよ」

「優と言うより優一郎だな」

霞の意味の判らない発言はスルーして美味しいラーメンを堪能する。他じゃ決して味わえないラーメンだから。

今を有意義に過ごす為に。

白龍を後にして菜露リクエストの時計台を見に行く。

正式名称は『旧札幌農学校演武場』と言い小次郎さんと別れた札幌駅の近くにある。

「うわあ、何だかもいいや。公園の中にあるのかと思った」

「満足か？」

「ちよつと興ざめかな」

菜露の感想どおり周りは森や公園ではなくオフィスビルに囲まれて

いて初めて見た人は小さく感じてしまう。

そしてその足で国内最大級のショッピングモールに来た。カフェを見て回るのが目的だが色々な全天候型の館内で、色々なフロアーが連絡通路で結ばれているのがあるがたい。

休憩を挟みながら広い館内を歩き回る。

揃わない物は無いと言えるくらいバラエティーに富んでいて見て回っていてもぜんぜん飽きずに時間さえも忘れてしまいそうだった。

美雨先輩に菜露と霞はアクセサリーショップに釘付けになっていた。甘い物の次あたりに女の子の大好きなものだ。

毎日の様にこの3人に振り回されている気がするが、段々と嫌じゃなくなってきた。自分に気づく。

最初に俺を呼んだのは菜露だった。

「晴海、見てみてイニシャルのネックレス。可愛いよ」

「菜露なら少し大人ぽいホワイトゴールドが良いかな」

「欲しい！」

「良いんじゃないか」

「本当に？」

「まあ、菜露の我侭なら聞いてやる」

「ありがとう」

「で、霞は欲しいものはないのか？」

「お、俺は無い。アクセサリーなんて付けた事がないから」

霞には珍しく慌てて首をブンブンと音がするくらい振っている。

そんな霞の為に菜露が見立てたのはイエローゴールドとホワイトゴールドのコンビになったブレスレットだった。

「これで良いのか？」

「う、うん。良いのか帽子まで買ってもらったのに」

「構わないさ、らしくないぞ」

「あ、うん。ありがとう」

後は美雨先輩だけだが、どうするか悩んでいると菜露と霞の視線が突き刺さった。

「なんだ」

「まさかピアスなんて言わないよね」

「そうだな、恋人同士だもんな」

「「ペアだよね。な」」

二人にハモる様に言われてますます考えてしまう。

すると菜露にケツを叩かれてしまった。

「もう、グズグズするな。男たる晴海は」

「はあゝ わったよ」

渋々と美雨先輩の側に行く。

美雨先輩は食い入る様にガラスのショーケースの中を品定めしている。

そつと視線を読むとその先にはペアリングが並んでいた。

「まだ早いな」

「ひい！」

俺の一言で美雨先輩が悲鳴に近い声を上げて周りの視線を集めてしまう。

菜露と霞に至っては呆れた顔をして天を仰いでいる。

「あのな、そんなに驚く事はねえだろ」

「だ、だって急にハル君が声を掛けるからでしょ。もう」

「もうつてな」

軽い言い合いに発展しそうになり次の言葉を飲み込んで変換した。

「ゴメン。あんまり真剣なんで、何を見ているのかと思ってな」

「こつちこそゴメン。ちよつと驚いたからだよ」

美雨先輩に出会ってから一ヶ月ほどなのに色々な自分に気づかされている。

これが小次郎さんの言っていた手遅れと言うやつなのだろう。

先が見えないし結末は判らないがこれから先は予定がぎっしり詰まっている。

一線を越えなければ良しとしてって、ある意味もうとっくに一線は越えてしまっているのかもしれない。

今は今なんだと考えを改める事が最優先事項なのだろう。

「記念にペアで何か買おうか」

「へえ？ 今なんて言ったの？」

「二度は言わないからな。ペアで何かを買おうかと言ったのだが」

「うん！」

先輩が極上の笑顔を俺に向け。

そして涙を零した。

「泣くな。まるで俺が苛めているみたいだろうが」

「らって嬉しいんらもん」

親指でぶつきら棒に涙を拭いてやるとすぐに笑顔に変わった。

2人で何を買うか選んでいる。

その姿はどこから見ても幸せそうな恋人に見えているのだろうか…

：

リングは俺の言葉どおりまだ早い気がする。

ブレスレットは俺も美雨先輩もあまり好きじゃない事が判った。

そして選んだのは医療用ステンレスであるサージカルステンレスを使ったペアのペンダントだった。

メンズにはブラックダイヤがレディースにはダイヤモンドがそれぞれ小粒だが埋め込まれている。

そして二つを合わせると時計の文字盤が現れる様にレディースには1～6の数字が、メンズには7～12の数字がローマ数字で刻まれているシンプルなものだった。

「ありがとう、大好きだよ」

「あんな、こんな所で言うな」

「それじゃ二人つきりならハル君の気持ちも伝えてくれるの？」

「気が向いたらな」

「ずるいよ」

「飯でも食いに行くぞ」

「待ってよ！」

走って追いかけてくる美雨先輩の胸元には買ったばかりのペンダ

トが揺れていた。

アクセサリーショップを後にする頃には辺りは暗くなっていた。何が食べたいかを聞くとお寿司という返事が返ってきたのでアトリウムの地下にある気軽に入れる回転寿司のお店に行くことにした。トイレに寄りたかったので先に下で待つように伝えトイレに向かう。アトリウムは吹き抜けの広場になっていて天井はガラス張りのアーチ型になっている。

天井の向こうには星空が出ているのだろうか。

そんな事を考えながら3人の待つ所に広場に行こうと階段を一段降りた時にそれは起こった。

突き上げる様な揺れの後に大きな横揺れが起きる。

北海道も火山が多く地震が多い、その為に震源地が近い為だろう。周りから悲鳴が上がった時には勝手に体が動いていた。

周囲に居るはずの人の動きがスローモーションの様に感じられる、それは自分自身が人ではない動きをしている為だった。

瞳の色も変わっているのだろう事がすぐに理解できるが思うように力をセーブできない。

それは己が動揺している所为で、その理由は菜露にあった。

瞬時に菜露を抱きしめる。

菜露は震災に遭ってから地震に対して過剰に反応してしまう。

一種のトラウマと言うか心的外傷後ストレス障害（PTSD）と言った方が良いかもしれない。

月日経ちだいたい症状は治まったとは言え大きな揺れを感じるとフラッシュバックを起こしパニックを起こしてしまう。

それは仕方が無い事なのかもしれない。

大切な家族を目の前で失ってしまったのだから。

「菜露、大丈夫だ。俺だ。晴海だ、判るな」

「嫌だ、嫌だよ。晴海、助けてよ」

俺の腕の中で菜露が泣きじゃくっている。

この状況の時が俺も一番辛い。

ただ抱きしめてやる事しか出来ない不甲斐無さに打ちのめされる。

地震の揺れは当におさまっているのに俺と菜露の居る場所だけが時を止めたような感覚に陥る。

それを救ってくれたのは美雨先輩だった。

「ハル君、大丈夫？」

「ああ、俺は平気だ」

「んん、ハル君も泣きそうな顔をしているよ」

そう言いながら俺の頭を優しく抱きしめてくれた。

別れ道

大型ショッピングモールに併設されている今日の宿泊先のホテルに向かう。

ここを買い物に選んだのもその為だ。

そして今ほど良かったと……

思っていたが、チェックインの為にフロントに行くとんでもない事を言われた。

オーバーブッキングで一部屋しか空いていないと言うのだ。

今から他のホテルを案内すると言われても菜露の状況から判断しても移動は無理だ。

それにここでごねても状況が良くなる訳じゃない。

判つていても黒いものが湧き上がってくる。

「ふざ……」

「この状況では2人分しか支払えませんよ。それでも構いませんか？ エキストラベッドなんて今から運んでもらっても時間がかかるだけで迷惑です。連れの気分が悪くなり直ぐにでも休ませようと思つているのにどう言う事なんですか？」

俺の怒りを遮るように美雨先輩がフロントのスタッフに詰め寄っていた。

スタッフは平身低頭して誤りながら誠心誠意対応をしている。

話し合いは決着がつき一部屋しか空いていないと言うデラックスツインに普通のツインのそれも2人分の料金で宿泊出来る事になったようだ。

部屋に案内される頃には菜露は普段どおりに戻っていた。

「ゴメン」

「菜露が悪い訳じゃねえだろ」

「うん」

「菜露はもう大丈夫なのか？」

「うん、霞ちゃん。ありがとう。それと美雨先輩も」

「それじゃ、順番にお風呂に入っちゃお」

「はい」

3人ともいつの間にかコインロッカーに預けていた荷物を持っている。

ワイワイと部屋中を見渡して楽しんでいるようだ。少しだけ気が楽になる。

俺は2泊程度なら着替えなど持ち歩かない現地で調達すれば良いだけの事だ。

で、ここで一つ問題が……

「どうやって寝るんだ？」

確かにデラックスツインの部屋だけあって部屋もベッドも広い、が所詮ツインでエキストラベッドなんて物は最初に美雨先輩がつき返してしまった。

まあ、ソファアーもある事だし部屋は暖房が効いている。

そんな事を考えていると大きなバスルームではしゃいでいた3人が出てきて、入れ違いで俺がバスルームに向かう。

バスルームでのんびりと湯船に浸かり寒さで強張った体と疲れをほぐす。

部屋からは3人の声が聞こえてくる。

「どうやって寝るの？」

「やっぱり、菜露ちゃんがハル君と……」

「俺はお前となんて真っ平ゴメンだぞ」

「それじゃ、どうすれば納得できる訳？」

「そつだ、美雨先輩と晴海が一緒に」

「そつだな。それが一番収まりが良いかもしれないな」

「無理だよ！」

「それじゃ、晴海争奪じゃんけん大会！」

髪の毛をバスタオルで拭きながら出てくると菜露と霞がベッドに倒れこんでいた。

「何をしているんだ？」

「ひゃう！ は、ハル君」

美雨先輩が驚いたような顔で俺を見ている。

その向こう側で菜露と霞が口々に何かを呟いている。

「な、何で勝てないんだ」

「おかしいよ。だってあんなに嫌がってたのに」

「あ、愛の力なのか」

「それじゃ無理に決まってるじゃん」

「ちよつと美雨先輩を借りるからな」

菜露と霞は無言のまま片手を突き上げ返事をしている。

美雨先輩に至っては言葉の意味がわからないのかポカンとしていた。

「行くぞ。みう」

「え、うん」

どちらとも取れる名を呼んでホテルを後にする。

ロビーを通り表に出た瞬間に瞳の色は変わらずに、栗毛色と言つか不思議な色のウエーブがあるロングコートが黒く変わっていく。

流石と言っべきか力の加減が絶妙だ。

ホテルを出て札幌駅に向かい札幌駅前通を駅とは反対方向に向かい大通公園に向かう。

駅前通の木々にもイルミネーションが飾られ綺麗に光り舞っている。

「ハル、何処に行くんだ？」

「俺に聞きたいことがあるんだろ」

「こんな人の多いところか？」

「だからだろ。イルミネーションの光が瞳に映りこんでいるから判りはしないよ」

1丁目から8丁目の会場ではそれぞれのテーマに沿ったイルミネーションで彩られている。

「ハル、覚醒したのか？」

「覚醒と言っか力の使い方を覚え始めたと言っのが正しいだろう」

「単刀直入に聞く、あの瞳の色は何でだ？」

ミウはやはり力のレベルの事を知っている。

知っていて当然なのだろうミウの一族は代々ヴァンプの血を受け継いできたのだから。

でも、俺にはその理由を口に出すことは出来なかった。

「俺が鬼無の一族だからかな」

「また、そんな曖昧な話か」

「他に思いつく理由が」

「嘘をつくな」

「嘘だと思うなら仮契約を解除すれば良いだろ」

言いたくも無い事を言う事がこんなにも身に沁みるとは思わなかった。

これが今までいい加減に他の女の子と付き合ってきたツケなのだろうか。

欺き通す為にミウ（美雨先輩）が絶対にそれだけはしない事を知っていてそれを言葉にする。

「話を変える。力を使ってみろ」

「そうだな」

自身の中で力をコントロールしながら力を放出すると瞳の色が僅かに変わる。

ターコイズブルーと言えば良いだろうかエメラルドやペリドットではなくあくまでブルーに近い色に。

「何故、菜露を助けた時と色違う」

「それは咄嗟だったからだろう。人間の言う火事場のクソ力と言う奴じゃないか」

「本当にハルは食えない奴の様だな」

「菜露に言わせれば人でなしだからな」

「帰る」

ミウが踵を返しホテルに向かおうとする。すぐにミウの手をとって引っ張った。

「もう少しだけ良いだろ。ミウとのデートも新鮮だ」

「な、何を」

掴んだミウの手をダウンジャケットのポケットに強引に押し込むと大人しくなった。

「今は今しか無いんだ。たとえこの身が永久の物になろうともな」

「ハル……」

何処かでBGMに使っているのか松任谷由実の『春よ、来い』が流れていた。

翌朝は豪快な熊の笑い声で起こされた。

部屋の電話を取り耳に当てるとその向こうから小次郎さんの声が聞こえてきた。

「ハル、グズグズしないで早くチェックアウトして出て来い。ロビーで待っているからな」

「相変わらず、突拍子も無く早いな……」

昨日の晩は誰が誰と寝るかもめて結局俺が強引に美雨先輩の手を取ってベッドに潜り込んだ。

そして目を擦りながら起き上がろうと。

「重い、暑い。起きろ！」

「ふえい」

「おう？」

「おはお」

広いとは言えどうやって一つのベッドで4人も寝ていたのだろう。

菜露なんて俺の上で寝てやがった。

有り得ないだろ。

すると直ぐに俺のスマホが着信を告げている。

「はいはい、もし」

「ハルちゃん、朝食なんて食べないで出てきなさいさもないと小次郎と襲撃に行くわよ」

物騒極まりないまほろさんの声がする。

結構、このホテルの朝食も嫌いじゃないが襲撃を受ける訳に行かず。
2匹のジャンガリアン小動物と犬を引き摺る様にロビーに行くと野獣と美少女が待ち受けていた。

「美少女なんて嫌やわ」

「全然、嫌そうに見えませんが」

「急いで出るぞ」

「は、はい？」

小次郎さんはいつもの正装姿でその傍にはノルディック柄の温かそうなワンピースの裾が紫色のダウンコートから見え隠れしたまほろさんが立っている。

小次郎さんは問答無用で2匹の小動物と犬をデリカに放り込みデリカを走らせた。

向かった先は札幌市中央卸売札幌場外市場だった。

ここには60店舗ほどが犇めき合い卸したての海の幸や山の幸を格安で取り扱っている。

行く先々で声を掛けられ小次郎さんは体だけでなく顔も広く人気者だった。

いろいろな店で試食と言いながらいろいろな物を食べさせてくれる。まほろさんが朝食なんて食べないでと言った意味が理解できる。

新鮮な海産物や乾物でお腹が膨らんできた。

霧華に支払う対価を見繕っていると小次郎さんが声を掛けてきた。

「網走の姉さんに土産か？」

「まあ、菜露を借りた貸しっというか」

「お前も苦労人だな」

そう言いながら小次郎さんが次々に指差していく。

タラバ・毛蟹・花咲ガニ・ズワイ・帆立貝・真ツブ……

店の人が「あいよ」と言いながら箱に詰めている。

「小次郎さん、そんなに沢山どうするんですか？」

「はあ？ あの姉さんに送るんだろ」

「でも、多すぎじゃ」

「良いんだよ。少ないと文句言われるよりましだろう。俺の奢りだ。
なあ、菜露ちゃん」

「……」

あまりの量の多さに菜露は開いた口が塞がらない様だ。

それもその筈で菜露と霧華は二人暮しでそんなに食べられないと文句を言ってもしょうがない。

ここは小次郎さんに甘えることにする。

市場を後にして小次郎さんのデリ力で市内にあるパティスリーを回る。

情報収集と味見が目的でついでに『N e r o e b i a n c o』
のスタッフにお土産を買う為に。

こちらでも親父の名前が知られている事に驚いた。

そして行く先々で歓迎され1匹増えた小動物3人と犬一人は大喜び
をして試食と言うもてなしを受けている。

何処の店でも『早速、新商品の方をお店に送らせて頂きます』と言
われてしまった。

恐るべし情報社会と言うべきか2、3店舗を訪ねただけで他のお店
にも親父の代理が来ていると知られていた。

思った以上に親父の代理の責任は果たせたようだ。

午後一便の飛行機で東京に戻る。

別れはまほろさんの涙まで見せてもらえた。小次郎さんに何かを聞
いたのだろう。

羽田に着き到着口をでるとそこは異様な世界になっていた。

ダークスーツを着た明らかに一般人ではない厳つい男が待ち構え、
それを遠巻きに警備委員や警察官が見守っている。

美雨先輩が掴んでいる俺の手に痛みが走り、菜露は俺の後ろに身を
潜め霞が前に出ようとすることを諫めた。

「お嬢様。旦那様がお待ちです」

「こんな迎えなどせずとも、家には直ぐに戻ります。それからでも

「お話は良いでしょう」

凜とした表情で美雨先輩が言っても男達は動じなかった。

「ほら、迎えに来てくれたんだ。また学院で会えるだろ」

「ハル君。もしかして」

厳つい男のなかから一人が近づいてくる。

直ぐに美雨先輩が制した。

「この方達に指一本でも触れたら承知しませんよ。また、明日ね」

「ああ、そうだな」

名残惜しそくに美雨先輩が俺の手を離れ男達と共に到着口を後にする。

俺と菜露に霞はただ見送るだけだった。

婚約者

カレンダーは2月に変わり寒い日が続いた。

北海道以来、美雨先輩は学院に姿を見せる事が無くなった。

その代わりに美雨先輩の実家の噂話が学院中に広まっている。

「なあ、亀梨は知っていたのか？」

「何がだ？ 東雲は藪から棒に」

「鳳条先輩の実家の話だよ。それに先輩は最近姿を見せないだろ」

「まあ、そうだな」

「何を暢気な事を言っているんだよ。お前の大切な人なんだろ」

「それなら一緒に迎えに行くか？ 街から少しはずれにある大名屋敷みたいな家に」

「そ、それは無理だな。そんな度胸は無い」

「美雨先輩は美雨先輩だ。実家は実家だろ。俺がそう言う世界の間だったからって東雲は俺との付き合いを変えるのか？」

「まあ、そうだな。亀梨は何かあっても親友だ」

「だろ、学院に来ないのは家の事情かもしれないけどな」

「でも、何で？」

「やっぱり北海道が原因かなあ」

「北海道？」

学食の端で東雲と話をしていると菜露の一言で東雲が声を上げ注目を浴びてしまう。

それは美雨先輩の事を知りたがる輩は多いが、一番事情を知っているのが俺で俺には怖くて聞けないからだろう。

その後で東雲に北海道に行っていた事を洗いざらい白状させられてしまった。

そんな事があって数日経ち。

学院でも巷同様にお祭り騒ぎに仕立て上げられた2月の一大イベント

トが迫っていた。

久しぶりに大教室で講義を受けるために移動をしているいつもの面子が集まり始める。

「ご主人様！」

「霞、ご主人様は止める。俺はお前の飼い主じゃない」

「ああ、晴海だ！」

「菜露、俺は物か？」

「んゝ。パラダイスだね。俺っ娘の下僕属性に妹属性に先輩属性か」

「東雲はオタク属性だな。霞、報告しておけよ」

「す、すまん。ご主人様それだけのご勘弁を」

「冗談だよ。それより2人は何処に行くんだ？」

「えっ？ A棟の3―1教室だよ」

「それじゃ、東雲。俺は帰るからな」

「亀梨、俺達と講義は受けられないと」

明陽学院大学付属高等学校は複数の校舎からなっていて、生徒が普段使用するのはA・B・C棟の3棟でC棟は特別教室が集められA棟とB棟が普通教室になっているそして3階の第一教室と言うように割り振られている。

何が悲しくて小動物に囲まれて突き刺さるような視線を浴びながら授業を受けたい奴がいるのか聞いてみたいものだ。

「行くぞ、亀梨」

東雲に連れられて渋々大教室の後ろの席に陣取る。

3学期も後半が迫り遅れを取り戻そうとこの時期の大教室は大入り満員になる事が多くなってきている。

そんな大教室に講師の先生と見慣れない長身の男に見覚えのある小動物と一緒に大教室に現れた。

見慣れない男はクラシコ・イタリアンと呼ばれるオーダーメイドのスーツを着ている。

グレーのピンストラップの3ピースタイプのスーツを身にまとい白

いシャツにシルバーのネクタイを締め手入れの行き届いた黒い革靴を履いている。

軽くウェーブのかかった黒髪を後ろになびかせて彫が深くヘーゼル色の瞳をしていた。

周りの女子が落ち着きを無くすくらい美男子なのだがスーツの色と相まってとても冷たい印象を受ける。

そして隣に立つ美雨先輩は俯いたままで顔を上げようとしなかった。すると講師が口を開いた。

「ええ、鳳条さんはご実家の事情でしばらくお休みしていましたが今日から戻ってこられました。それと新しい英語の講師を紹介します。では自己紹介を」

「私はディーノ・オルコと言います。生まれはイタリアです。これから英語の担当になります。よろしく。それと直ぐに判ってしまう事になると思うのでこの場を借りて皆さんに伝えておきます。私は鳳条美雨さんの婚約者です」

流暢な日本語で喋っているオルコ先生の言葉に一瞬静寂が訪れ大教室が絶叫に包まれた。

それもその筈で散々俺に絡んできていた美雨先輩の婚約者が突然現れたのだから。

「それじゃ、鳳条さん。席について」

美雨先輩は何も言わずに頷き空いている席に腰を下ろした。

すると俺の脇腹に東雲と菜露が肘鉄砲を撃ち込み、霞は教科書を丸めて俺の後頭部に突きを叩き込んだ。

溜息を付いてどうしたものかと頭を掻くと数倍の力で再び同じ攻撃を受ける。

授業中だと言うのに酷い仕打ちだ。

俺に今すぐに駆け出して行き美雨先輩を抱きしめるとでも言いたいのか。

授業が終わった途端に俺は東雲に・

そして俯きながらこちらに向って来ようとしていた美雨先輩は裏のプロも真っ青な早業で菜露と霞によって人気の無い屋上に拉致されていた。

「ハル君、私……」

「家の事情なんだろ」

俺にいきなり抱きついてきた美雨先輩の泣き声だけが屋上に響いている。

北海道から帰った晩にあの男に会わされて婚約者だと父親に言われたらしい。

そしてそれに反発して部屋に鍵をかけ食事も摂らずに閉じ籠っていたと説明してくれた。

今の俺には慰めてやる言葉も無くただ抱きしめる事しか出来なかった。

「お迎えが来たぞ」

「嫌だ！」

屋上のドアが開いてオルコが現れた。

「美雨、次の授業に行きましょう」

「勝手に行けば良いでしょ。私は私の足で歩いていく。あなたなんか指図されたくない」

「判りました。それならば」

「やって御覧なさい。覚悟は出来ています」

「あんな、美雨。こんな所で覚悟だなんだは勘弁してくれ。俺達も授業に戻るからそれで良いだろ」

「う、うん。ゴメン」

美雨先輩の耳元で『影』と一言だけ言うとハッとした表情になり校舎に戻っていった。

その晩、俺はマンションのキッチンでバレンタインに向けての試作を繰り返していた。

「居るんだろ」

「う、うん」

独り言を呟くように言っていると俺の影から頭が徐々に見えてくる。

「あのな、気味が悪い事をするな。とつと出て来い」

「うん」

直ぐに俺の背後に小柄な美雨先輩が申し訳なさそうに所存なさげに佇んでいる。

流石に心が僅かに揺らぐ、それでも前に進めないといけない。

振り返るとそこには初めて出会った時と同じ格好の美雨先輩が俯いて立っている。

そして床には光るものがポタポタと落ちていた。

「美雨、俺があの子の事を気にしているとも？」

「……」

首を振るだけで返事はしてくれない。

「それじゃ」

「ハル君は優し過ぎるんだよ。私は」

「白鷺会鳳組・組長の娘だから？」

「えっ？」

「言った筈だ。俺も裏の人間だって、それを知っても美雨は言ってくれたじゃないか？ 力は使いようだって俺から永久に離れる気はないって。小次郎さんに言われたよ、本気かって。恋愛なんて気づいた時には手遅れなんだって。俺自身もそう思う」

「それって……」

「多分、出会った時には堕ちていたんだ」

そんな事は最初から判っていた手遅れだって、それでも俺自身が拒んでいた。

色々と理由付けをして、仮契約だってそう言わなければあの場は収まらないと思ったから。

今は今しかない。

それは一瞬の事で儚い事なのかもしれない。

一瞬、一瞬が連続して時が流れていく。

ほんの一瞬でも良いから本気で目の前に居る女の子を抱きしめたく
なった。

例えばそれが最初で最後になろうとも。

「ハル君？」

「ゴメン」

「なんで？ ハル君が謝るの？」

「……が大好きだから」

マンションのキッチンに今まで聞いたことも無い様な美雨の泣き声
が響いた。

オープンの電子音が鳴り焼き上がり知らせる。
キッチンにはシヨコラの香りが立ち込めている。
一頻り泣いた美雨は満面の笑顔で俺の隣に居る。
その笑顔が俺の心を揺さぶる。

踏み込めば踏み込むほど傷は深くなる。
それが俺に課せられた対価なのだろう。

「出来た？」

「まあ、まあかな。これで中から出てくれば成功かな」

オープンから取り出し一つを皿に載せフォークで半分にとすると中か
ら熱々のチヨコレートが流れ出てきた。

「うわぁ、美味しそう」

「明後日に試食会があるから菜露達と『N e r o e b i a n c
o 』に来ると良い」

「本当に行つていいの？」

「婚約者は並ばないと入れないけどな」

「ぶう、意地悪」

美雨と作ったフォンダンシヨコラは大成功でレシピをこと細かく書
いていたメモを大事そうに持って『皆に作ってあげるんだ』と嬉し
そうに俺の影を通して美雨は帰っていった。

そして俺はスマホで連絡を付けた。

『明後日、決行』と。

ラスト・バレンタイン

バレンタインが数日後に控えた日に俺は親父の店であるスイーツ＆カフェ『Nero e bianco』に来ていた。

午前中にスタッフでの試食会を終わらせ午後のプライベートな試食会の為に準備をしている。

基本は押さえ創作したものを組み合わせる。

周りではスタッフ達が興味津々で覗き込んでいる。

3人が到着してミーティングルームに案内したと連絡を受けてから仕上げる作業に取り掛かる。

白い取っ手付きのスーパークップに入った蕩けるプリンやアレンジのパンプキンプリンに、小皿には薄く丸く固めたパンナコッタの中央にはアプリコットの半割が収まり目玉焼きを模している。

それにコース料理のメイン皿に盛られたドルチェを運んでもらう。ミーティングルームに向かうと楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

「ハル君、お疲れ様」

「マジで疲れた。朝からずっとだからな」

「それで、これがあのフォンダンショコラなの？」

「型を薄い小判型にしてあるんだ」

大きなメイン皿にはガルニ（付け合せ）の代わりにマンゴとバナナアイスに皮を剥いたマスカットが盛られて小ぶりのフォンダンショコラに生クリームがメインとして盛られている。

ナイフでフォンダンショコラを切ると中から熱々のチョコレートが出てきて生クリームを絡めながら食べる。

「うわぁ、美味しい」

「だろ、今回のバレンタインのメインに出そうと思うんだ」

「凄いなあ」

「亀梨、こっちのは何だ？」

霞の目の前にある皿にはガルニにオレンジの実の部分とバニラアイスにキウイフルーツが乗っている。

そしてメインには茶色い焼き菓子と濃いオレンジ色のソースが掛けられている。

「それはサバランのアレンジだ。中に生クリームと季節のフルーツがサンドされていて、そのソースはブラッドオレンジのソースだよ」「うおお、ラム酒が効いていて美味い。それにこのオレンジのソースの酸味がまたいい感じた」

「それとこのカラメルが絡めてあるパンも美味いぞ」

「シューブレッドだよ。『N e r o e b i a n c o』のオリジナルレシピだから」

菜露はお皿に盛ってある黄色い楕円形のケーキを不思議そうな顔をして指で突いていた。

「柔らかいよ。晴海」

「ナイフで切ってごらん」

菜露が恐る恐るナイフで切ると中からカスタードクリームとフルーツが出てきた。

「オムレツだ」

「クレープ生地に生クリームを塗ってスポンジケーキを重ねて中にフルーッグラタンを仕込んで巻き上げると出来上がりだよ。型を整えるのにコツがいるけどな。熱いから気をつけて食べるよ」

「うん。それにこのソースが美味しい」

「ブラッドオレンジのソースに生クリームを混ぜた物だよ」

いつものブラクテイーを飲みながら質問に答え説明を一通りしていく。

すると菜露と霞が俺の顔を見ているのに気がついた。

「2人とも俺の顔に何か着いているのか？」

「いや、なんとなく普段と違うと言うか」

「美雨先輩を見ている晴海の顔が真剣に見えて」

「まあ、良いだろそんな事は。今は女の子にとって大切なスイーツ

を堪能してくれ」

普段とは違つか付き合いが長い菜露ならともかく霞にまで判つてしまつくらい今日の俺は美雨先輩を愛しそうに見ているのかもしれない。

付き合いが短くても毎日の様に今日までは一緒に過ごしてきたからかもしれないな。

駅前で霞と菜露と別れ、美雨先輩は駅で良いよと言つたが今日はもう少し一緒にいたかつた。

電車と一緒に乗り家の近所まで送ることにする。

『N e r o e b i a n c o』を出るともうあたりは暗くなり街にはネオンが輝いている。

美雨先輩の家には行つた事はないが大体の場所は把握している。

住宅街を歩いていると俺が住んでいるマンションの近くにある公園と同じくらいの公園があつた。

「ハル君、少しだけ寄り道しても良いかな」

「構わないけど」

「それじゃ」

そう言いながら美雨先輩に手を引かれて公園に歩いていく。

ベンチに座ると二人の間に沈黙が流れた。

「あのね、ハル君。なんでハル君は私に対して一線を引いているの」

「そんなつもりは無いよ」

「嘘つき、だってハル君はキスもしてくれないじゃない」

「しただろ」

「アメフトの試合の時だけだよね」

本当にこの人には適わないと思う。

それとも俺が未熟なのか徹してきていないのが原因なのだろう。しかし、ここまで来たらもう引き返すことは出来ないエンディングは目の前に来ている。

「戸惑つていると言うのが本心です。俺は美雨先輩と出会い幼い頃

に無くした筈の記憶を取り戻せたから」

「それって……」

「俺は……」

「俺達は無用な者を排除する為に存在する」

俺の言葉に冷血な男の声が重ねられた。

顔を上げると冷たい眼差しが突き刺さる。

切り裂かれそうなと言った方が判りやすいかもしれない。

俺と美雨先輩が座るベンチから少し離れた所にスーツ姿の長身の男が立っている。

「やはり来たか、デイーノ・オルコ。俺達と同じヴァンプの一族だよな、あんたも」

「答える必要は無い。無用な邪魔者は排除する」

「な、何を言っているの？」

「君には忠告したはずだ、この男と関わるなど。婚約者がおりながらどう言う事なのかな？」

「私の恋人はハル君だけ。あなたは父が決めた婚約者であって私は認めない」

「手遅れだ、これは決定事項なのだよ。私が婚約者なのも、その男がこの世から消え去ることも」

「止めて！」

美雨先輩が立ち上がりオルコに向かおうとするのを制した瞬間に俺の体は数メートル吹き飛んでいた。

その速さは人狼である霞を軽く凌駕している。

それでも何とか耐える事が出来るのはパンチの重さの違いだろう。立ち上がると既に目の前に男が現れかわす間もなく吹き飛ばされる。

「あなたは一体、何者なの？」

「私はあなたの婚約者であり。あなたの一族の力を高める為に選ばれた金色の瞳の者ですよ」

「そんな」

男の瞳が黄色く光っている美雨先輩は瞬時にこの状態を理解したのだろう。

どう足掻いても絶対的な力を持つ金色の瞳の者には適うわけがなく、為す術が無い事を、俺が力を放出するまでも無く力を根こそぎ奪われていく。

体を治癒していくスピードが追いつかないくらいオルコは攻撃の手を緩めない。

すると公園に低い声がした。

「もう、良からう。連れて行け」

「畏まりました」

意識が朦朧とする視線の先に白髪交じりの髪の毛を後ろに流した枯茶色の着物に羽織を羽織った、40代後半くらいの男の姿が見え美雨先輩が詰め寄っていき若い衆に車に押し込まれてしまう。

そこで俺の意識が途絶えた。

眷属

あまりにも突然の事でどうして良いのか判らなかった。

北海道から帰つてくると空港には若い衆が詰め掛けていて、皆に迷惑を掛けてはいけなひと思ひ従ふ事しか出来なかつた。

屋敷に着くと一人の外国の男が父と待っていた。

そして父の言葉に啞然とし従うことなんて到底出来ずに部屋に籠って抵抗した。

部屋に籠り続けるのも限界で皆に迷惑を掛けない事を条件に譲歩した。

父に逆らう事など私には出来ない。

それでも唯一の救いはハル君だった。

ヒントをくれてそして私の事を始めて好きだと言ってくれた。

美味しいスイーツをご馳走してくれた帰りにどうしても聞いておきたいことがあった。

それなのにあんな事になってしまい、私は強制的に屋敷に連れ戻されてしまった。

自分の部屋でベッドに突っ伏していると窓に何かが当たりコツンと音がする。

襖を開けて廊下に出るとガラス戸の向こうに人影が見える。

雲に隠れていた月が庭を照らすとそこには人狼の麟堂さんが立っていた。

「どうしたの？」

「どうしたのだ？　それは俺が聞く台詞だ。亀梨と連絡が取れないと菜露から電話があつたんだ。不思議に思つてマンションを覗いたが居なかつた。そして亀梨の匂いを辿つて来てみたらこの先の公園に亀梨の血の匂いが強く残つていた。亀梨はどうした？」

「それは……」

「それにこの屋敷からはお前の気配しか感じない」

「そんな。でも何で霞ちゃんが」

「あいつは何かを企んでいる。俺が嗅ぎ回らない様に釘を刺しやがった、手出しは無用だと。それに菜露の話ではいつもなら家にいる筈の竜ヶ崎も居ないらしい」

「私には何も出来ないもの」

「そうか、一生そこで泣いている。俺は亀梨を探す。あいつは命を投げ出してまで俺達の事を助けてくれたからな。俺はその恩に報いたい。例え到底適わない相手でもな。眷属の一人も見捨てるようなヴァンプなら杭でも自分で突き刺して散ってしまえ」

「私は……」

「俺が亀梨を襲った時のお前は何処に行った。何故、俺が手を引いたと思う」

「それは腕を折られて」

「違うね、貴様の力が飛躍的に上がっていたからだ」

霞ちゃんの言葉に鼓動が跳ね上がる。

どうして私の力が飛躍的に上がるの？

その理由はなんなの？

ハル君は確かに何かを企んでいると言うか何かを意図的に隠している。

イタリアの名家で生まれた。

裏の人間。

マフィアでも逃げ出すような事。

もしかしてハル君は……

「霞ちゃんは何かを知っているのね」

「亀梨が覚醒した時に瞳を見て驚いた。青い瞳の眷属にはありえないエメララルドグリーンの瞳だった。そして次に力を放出した時にはペリドットのような明るい色に上がっていた。亀梨は生まれ持っていたんだと思う。それがあいつの出生の秘密で恐らくそれは貴様に

言えないことだったのだろう」

「そんな」

「どうするんだ？ 時間は無いぞ」

「影さえあれば」

「無理だな。おそらく結界の中に監禁されているはずだ。何かとてつもなく大きな物がバックで蠢いている」

「助けたい、でも」

「ふざけるな！ ヴァンプが血を吸うのは眷族を作る為だけか？ 力が飛躍的に上がった理由はなんだ？ それに亀梨の力はそれだけじゃねえだろ。あいつはな、考えも無く誰かを守ろうとするんだ！

自分の事なんて二の次で。だからあいつは強いんだ」

霞ちゃんの言葉で気づかされた。

ヴァンプが血を吸う理由は一つだけじゃない。

強き物の力を得る為に。

そして守りたいと思う気持ちは誰にも負けない。

そう思っただけでスイッチが入ったように力が湧き出てきた。

「顔つきも瞳の色も変わったな。いくぞ背中に乗れ」

「えっ」

「えっ、じゃねえよ。人狼は普段も力をセーブしているんだ」

そう言うのと目の前には大きな狼の姿になった霞ちゃんがいた。

背中にしがみ付くと風の様に駆け出した。

消失

気がつくとも目の前にあるガラスの向こうには眼下に街明かりが広がっている。

ここは高層ビルの最上階といった所か。

電気は全て消され下界の街の明かりが僅かに差し込んでいる。

結界を張らなくても影さえ消せばミウは現れることが出来ないと言う事なのだろう。

両腕には手錠が嵌められ天井から宙吊りにされている。

手首には手錠で出来た傷が治らずに血が滲み出しては消えていく。どうやらご丁寧に銀で作られているらしい。

ミウの言葉が蘇る。

銀で傷つくと治りが遅く銀を傷付ける事も出来ない。

これでホワイトアッシュの杭でも胸に打ち込まれれば確実に灰になるのだろう。

辺りの様子を伺うとあの男が冷たい目で俺を監視している。

デイーノ・オルコかあの人の好きそうな名前だ。

俺の事を見渡せる左よりのガラスに腕を組んでもたれている。

そして右の方にはエレベーターがあるようだ。

しばらくするとモーターの音がしてエレベーターが上がってきて美雨先輩の父親と側近だろうか数人のスーツ姿の男を従えて現れた。

「さて、どうやって消えてもらうかな」

「そう簡単にいくかな」

「いかせるさ。わし等はヴァンパイアの事を知り尽くしているからな。それに貴様に消えてもらわないと困るのだな」

「闇の世界を知り尽くしていても表の世界じゃ役に立たないぜ。まあ、あんたらのやっている事に口出しはしないよ。悪い事じゃない、震災の時も率先して炊き出しをしていたもんな」

「何故、そんな事を」

「知っているか？ 俺も裏の人間なんでね。噂ぐらいは知っている。一人娘の為に表に這い出す為に融資をしてくれる所を探し回っていたんだろ」

「そこまで知っているのなら生かしておく訳にもいかないな。そもそも生かしておくと言う言葉自体間違っているがな」

「それを、後ろにいる自分の娘に言えるか？ まあ、もう言ったも同然だがな」

着物の男が振り返ると人狼の姿の霞に連れられて、ペリドットの様な瞳から涙をこぼすミウの姿があった。

男は明らかに動揺していた。

「な、何故お前がここに」

「そんな事をしてもらっても何も嬉しくない。ハルを返してもらおう」
「もう、遅いんだ。融資は決まった。その為にはこいつを」

「私に身内を手には掛けると？」

すると霞が動こうとした。

「霞、動くなよ。人狼がどんなに速く動けてもディーノには適わない。こいつは金色の瞳から力を受け継いだ奴だ。それに目の前で女の子が殴られるのを見たくないからな」

「クソ！ そんな手錠何とかならねえのか？」

「ご丁寧に純銀製の。貴金属の買取商に持って行ったら案外いい金になるぞ」

「お前、本当に助かる気があるのか？」

「この状況でか？ 難しいな」

「それなら俺が」

ミウがいつの間にか大太刀の紅雀を構えている。するとミウの父親が重い口を開いた。

「この男は本当に助ける価値があるのか？」

「な、何を。ハルは私を」

「助けたか。でもこれだけは知っていてくれ。この男が生まれ育つ

た家は、お前が幼い頃に拉致し消そうとした家の人間だぞ」

「でも、私はここに居る。その屋敷から私を助けてくれたのは」

「こいつかもしれないと？」

「そこまで判つていて何故？」

「お前を守る為だよ」

ミウの表情が強張り刀を持つ手が震えている。

そして瞳の輝きが怒りで増し始めている。

「娘を守る為に、娘が愛する男を殺すのか！」

「ミウ、止めておけ」

「は、ハル。貴様何と言った！」

「止めておけと言ったんだ。今のお前ならオルコだけなら問題ないだろう。だが二人相手じゃ無茶だ。出て来いよ、黒幕のレベッカ・ドラゴネッティ。いや竜ヶ崎霧華と言ったほうが良いかな」

俺の言葉にミウも霞さえも身動きすら出来ないくらいに驚いている。窓に寄りかかっていたオルコを従えるように黒いスーツ姿の霧華が氷のような表情で姿を表した。

そしてその瞳は金色の光を放っている。

「どうしてあなたが……」

「デイトだからと言えば判るかしら」

「まさかデリオ・アソシエーション」

「知っているのね、なら話は早い。世界の秩序の為に大きな力を持ち覚醒してしまった亀梨には散つてもらふ簡単な事でしょ」

「させるか！」

「動かないで。この銃の弾丸は闇の者を瞬時に灰にするウィルスが仕込んであるの。一溜まりも無いわよ」

霧華の手にはベレッタPx4 Stormが握られ銃口はミウに向けられている。

ミウの後ろにいる霞が僅かに体を動かし室内灯のスイッチに手を伸ばした。

室内灯が点き一瞬だけ目が眩む。

それをミウが見逃すはずもなく紅雀で霧華の手からベレッタP x 4 Stormを弾き飛ばして俺に向かってきた。

「ミウ。来るな！」

「鳳条、危ない！」

俺と霞の声が重なりミウが殺気を感じて振り返った時には霧華が懷から別の銃を取り出している。

「チェックメイト！」

「させるか！」

腕時計に仕込んであった起爆ボタンを押すと手首から先が吹き飛び体が自由になる。

手首から先が瞬時に再生するが間に合いそうに無い。

ミウの体に体当たりして突き飛ばした瞬間に乾いた炸裂音が響いた。

春遠からじ

あの日から私の人生は味気の無いものになり果ててしまった。本当に短い間だったけれど私にとって掛替えの無いものになった。た。

それを失ってしまった代償は大きく取り戻す為の対価も思いつかない……

まるで機械仕掛けの人形のように過ごしている。

機械仕掛けの人形の方がましなのかも知れない。

人形なら何も考えられないのだから。

世界から色が失せてまるで白黒の世界に佇んでいるようで。

それでもバレンタインデーには彼から教わったフォンダンシヨコラを作ってみた。

作ってみたが捨てる事も出来ずに屋敷の皆に渡すと複雑そうな表情でありがとうと言ってくれた。

彼と二人で過ごした最後の思い出の甘くほろ苦いフォンダンシヨコラ……

思い出になんてなっていない、まるで昨日の事のように蘇ってくる。でも彼はもうこの世に存在しない。

私を庇い私の目の前からまるで煙の様に消えてしまった。

竜ヶ崎霧華も彼が消えた直後に姿を晦まし消息は掴めていない。

あの日以来、父とは一言も口を利いていない。

巨額の融資を受けられ会社が急成長して忙しく顔を合わす事もほとんど無いのも理由かもしれない。

そして父の代わりにオルコが常に屋敷にいて私を監視している。

庭にある大きな桜の木も花を咲かせ散り始めている。

学院には数回顔を出したけれど私はとても不安定で感情をコントロール

ール出来ずに、誰かの携帯の着ウタでメイズの『君に届け』が流れそれを聞いただけで泣き出してしまい。

皆に迷惑が掛かると思い学院には行かなくなってしまう。進学や卒業なんてどうでもいい事に思えてしまう。

時々、霞ちゃんが菜露ちゃんを連れて屋敷に顔を出してくれて学院の事を話してくれる。

二人は決して彼の名前を口に出さなかった。

特に菜露ちゃんは彼を慕って時には兄妹の様に接していたのだから辛くない筈は無いのに、私に気を使ってくれているのだろうか。

春の日差しが温かい。

寒さが薄まるにつれて私の心は冷え切っていく。自分でも何をしているのか判らない状態になり。

気がつくと屋敷の中で紅雀を無意識に取り出していた。

突然、人影が視界に入り紅雀を払い除けられてしまった。

驚いて顔を上げるとオルコが傍にいて手から血を流している、どうやら紅雀を素手で触った……

血が流れている？

何処からか着信音が聞こえ、オルコが携帯を取り出し聞きなれない言葉で会話をしている。

私が顔を上げると腕を掴まれた。

「一緒に来い」

冷たい言葉で言われ力なく引き摺られる様にオルコに従うことしか出来ない。

何処をどう歩いたのか辺りを見渡すとそこは鳴らずの教会の前だった。

ブラックティー

「遅い、遅すぎる」

高い鐘楼のある真つ白な教会の前で黒い少し控えめなゴスロリの格好をした小動物が頬を膨らませている。

立ち枯れた様になっていた周りの木々には若葉が彩りを添え優しい色に包まれている。

これで青空でも出ていればいいのだが生憎の花曇だった。

「悪いな、待たせて。こいつを探すのに手間取ってな」

「綺麗だね、まるでチョコレート細工みたい」

「行こうか」

「うん」

教会の裏手にある木々たちが大量生産した若葉色の下を抜けると石のプレートが綺麗に規則正しく並んでいる。

御影石が多いが石の種類もまちまちだ。

そして石の下には愛する人たちが眠っている。

その中のひとつの前に二人で立っている。

プレートには『In Loving Memory of』『Tsukine Yukimiy』と赤茶色の墓石に刻まれている。
持ってきた薔薇を供える。

「月音さん好きだったもんね。チョコレート細工みたいなブラックティー」

「そつだな、白でも赤でもなくこの色だったよな」

「ねえ、なんでアメフトのボールが供えてあるの？」

「東雲だろ。あいつなりに何かを感じたんだろ、『In Loving Memory of』愛する思い出の中と言う事なんだろ」
「行こう。あれ雪？」

「違うな、桜の花びらだ」

一陣の風に吹かれ白い物が舞っている。

それは近くの桜から飛ばされてきた花びらだった。

「バイバイって言っているのかな」

「思い出の中にだよ」

「そうだね」

教会に戻るとそこは静寂に包まれていた。

大通りからも少しはずれ木々に囲まれているからかもしれない。
手に持ったアメフトのボールを天高く蹴り上げる。

鈍色の空に吸い込まれる様に楕円形のボールが消え。

鐘が優しい音色を奏で始めた。

「何をグズグズしているの？」

「そうだな、一步を踏み出さないと。でも……」

「怖いのか？ 大丈夫だよ、あの人を信じられないのか？」

「菜露の言葉を信じるよ」

「うん！」

菜露が名の通り。

穢れの無い朝日に照らされた朝露の様な笑顔を俺に向けた。
ゆっくりと踏みしめるかのように一步を踏み出す。

「ここで待っているからね」

返事の代わりに片腕を軽く上げる。

雪解け

18年間の人生が意味の無い物になってしまった様な気がする。木々には若葉が茂る季節になっていた。

枯れ木だったのに今は色鮮やかな生まれたての緑に包まれている。真つ白な教会の建物とのコントラストが見る者を惹きつける。

だけど今日の空はあいにくの曇天。

それは多分、雨女の私の所為。

オルコに連れられて教会のドアに手を掛けて重厚な木のドアを開けるとそこにはそれほど広くは無いが吹き抜けの空間が広がっていた。中に入るまでは判らなかったけれど天井はドーム型になっていた。質素と言いか素朴な感じのする木製の長椅子が真ん中の通路を挟むようにして並んでいる。

両側の壁には青や紫を基調とした大きなステンドグラスがありマリア様が優しく微笑みかけている。

祭壇の方に目を向けると鼓動が跳ね上がり何かに弾かれたように全身の毛が逆立った。

全く気配を感じられなかった。

スレンダーな体に真つ黒なスーツを纏った竜ヶ崎霧華が祭壇を背にしながら腕を組んで、全ての物を貫き通すかの様な冷たい視線で真つ直ぐに私を見据えていた。

「鳳条さん、お久しぶりね」

事もあるつか未だに私を生徒扱いしている。

心が乱れる、ここで飲み込まれてしまう訳にいかない。

そんな私の事など感知せず竜ヶ崎霧華は話を続けた。

「あなたと話がしたくって呼び出したの」

「やはりあなただったんですね」

「そうよ。オルコは私に使役する者だもの」

「私にはあなたと話す事など一切ありません」

「そう？　晴海についての話は聞きたいでしょ」

彼の名前を出され思わず心が大きく揺れてしまう。

信用は出来ないけど竜ヶ崎霧華からは殺気が全く感じられず話を聞いてからでもなんとか怒りを押し殺した。

時間はいくらでもあるのだから。

私が返事をしないうちに彼女は勝手に口を開いた。

「晴海には不思議な力があるの。それは裏でも闇の力でもなく生まれ持った物なのかもしれない。それに気づいた晴海はその力を使って面白おかしく生きてきた。でも晴海の実験的な力に気づいた少女が居た。その少女に出会ってから晴海は変わったの」

「その少女って」

「そう、あなたも知っている東雲君の幼馴染の雪宮月音よ。本当に毎日が輝いて楽しそうだった。でもあの日、歯車が大きく外れてしまった。そして晴海は自分の実験的な力を呪ったの。でも見えてしまっのね」

「それってやはり予知って事ですか？」

「やはり？　誰からか聞いたことがあるようね。第六感が鋭いと言えば良いかしら。予知と言っても差し支えないものかもね。ほんの僅か先の事が100%判ってしまう。数分から次の瞬間まで。だから人を思った通りに動かす事も出来てしまうし、その人に目の前に迫る危機があれば回避させる事も出来る」

「でも、救えなかった」

「そう。だからこそ同じ事を2度と繰り返したくなかった」

竜ヶ崎霧華の言葉に引っ掛かるものがある。

同じ事？

繰り返したくない？

「私には言っている意味が判りません」

「そうかしら、あなたの父親のカンパニーは晴海を消すことに加担して大口の融資を受けて表の世界で躍進しようとしている。失った対価は娘の信頼。まあ、あなたの命を守るために半分脅されていうところかしらね。そして私は菜露と暮らす為にこうして日本に帰って来られた。お互いに失った物は大きいけど痛み分けよ」

「痛み分け？ あなたは何を失ったというの？」

「私が失ったのは祖国と仕える者。そしてあなたは命を救われ、対価として大切なものを失い心に大きな傷を負った」

「それじゃハル君は何を失ったの？ 全て失ってしまったじゃない」「そうね、一番辛いのはあいつかもね」

そんな事を軽々しく言う、手を下した張本人の竜ヶ崎霧華の言葉に血が滾る。

呼吸が荒々しくなり。

どす黒い物が心の奥底から一気に体を突き抜けた。体が闇と光の間を不安定に行き来している。

形振り構わずに一気に間合いを詰めた。

「貴様が！ ハルを！」

紅椿の切っ先が一直線に竜ヶ崎霧華の顔を貫く。

激しい金属音がして微動だにしていないう竜ヶ崎の黒髪が数本だけ舞い散った。

「麟堂 霞！ 邪魔するな！」

「相変わらず直情的で直線的な攻撃だな。無茶をするな。心も刀もか」

不意に現れた人狼の姿になっている麟堂 霞の右腕には大きなサバイバルナイフが握られ。

紅椿は脆くも切っ先から3分の1の所で折れていた。

「何故、犬がここに居る？」

「いい加減にしろ。そんな状態でこの女に勝てると思っているのか。俺は晴海の匂いを追っていたらここに辿り着いたんだ」

「そんな筈無いじゃない。ハル君はもう……」

枯れ果てた涙が再び溢れ出し全身から力が抜けその場に崩れ落ちた。すると鳴るはずの無い鐘の音が聞こえてくる。

「どうして鐘が？」

私と霞がドーム型の天井を見上げると鐘の音が聖堂にも響いている。そして重厚な木のドアが開く音がした。

「遅い！ 女の髪のお価は命に等しいのだぞ」

「そんなものこのカメオでチャラだ」

ドア越しに立つ男が竜ヶ崎先生に向けて何かを投げ、先生は難なく片手で掴んだ。

それは綺麗な女の人の肖像が浮き彫りにされたカメオの付いたネックレスだった。

「アリア様のカメオ……」

「お前が持っていた方が良いだろ。それと俺のスマートフォンを返せ、無いと何かと困る」

「アソシエーションはどうなった」

「ギャーギャー喚き散らす爺達の目の前でディオの肖像を粉々に碎き散らしてやったら大人しくなったよ」

「馬鹿が無茶苦茶をしゃがって」

「黙らす為にやれと言ったのは霧華だろ」

有り得ない鐘の音に有り得ない人の声がする。

私の目の前で消えてしまったこの世で一番大切だった人の声が聞こえる。

それなのに私には何も言ってくれず、見てもくれない……そして。

「じゃな」

そう一言だけ告げると私に見向きもせずに踵を返した。

落ちていた折れた紅椿を持ち、振り返ると同時に低い姿勢から有らん限りの力で足を蹴り出した。

一瞬にして男の背後から喉元に折れた刀を突きつけた。

「久しぶり。美雨先輩かな？ それともミウかな？」

「ふざけるな！」

「好きにしろ。その前にこれを返しておく」

男がポケットから取り出し手にしていたのは金色で月の形をした口
ケットペンダントだった。

それはママの写真が入っているロケットだった。

「お前を騙し悲しませた対価は計り知れない。覚悟はとうに出来て
いる、煮るなり焼くなり好きにしろ」

今、どんな顔をしているの？

その瞳には何が？

竜ヶ崎先生の言葉が頭を過ぎる。

『同じ過ちを繰り返したくない』

それは愛する人を2度と失いたくないと言う事。

『一番辛いのはあいつか』

愛する人を偽り悲しませて一番辛いのは……

涙と共に折れた刀が落ち。

凍り付いていた心が融解し始め。

あの時と同じように彼の背中に頭を付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6018t/>

蜂蜜入りホットミルクとブラックティー

2011年12月19日14時47分発行